

坂元遺跡発掘調査報告書

坂元遺跡発掘調査報告書

2022.2

2022

加古川市教育委員会

加古川市教育委員会

坂元遺跡発掘調査報告書

2022

加古川市教育委員会



写真 1 調査区①・②遠景（南東から）



写真 2 調査区③～⑥遠景（南東から）

卷頭図版 2



写真3 調査区①・②全景（下が南西）



写真4 調査区③～⑥全景（下が南西）



写真5 調査区①（北西から）



写真6 調査区②（東から）

卷頭図版 4



写真7 調査区③（北西から）



写真8 調査区④（南東から）



写真9 調査区⑤（北西から）



写真10 調査区⑥（南東から）

卷頭図版 6



写真 11 堪穴建物 1
(南東から)



写真 12 柱穴列 1
(北西から)



写真 13 性格不明造構 1
(北西から)

序 文

加古川市は、播磨平野の東部を流れる一級河川加古川の恵みにより、古くから人々が暮らす豊かな場所です。発掘調査を行うと、その確かな軌跡が地中から姿を現します。

このたび完成した本書は、野口町坂元及び坂元北に所在する坂元遺跡の発掘調査報告書です。

坂元遺跡は、平成 11（1999）年に実施された東播磨南北道路事業や坂元・野口土地区画整理事業に伴う分布調査及びその後の確認調査によって発見された大規模集落遺跡で、これまでに縄文時代から鎌倉時代に至る各時代について多くの貴重な発見が報告されてきました。今回の調査では、奈良時代を中心とする遺構・遺物が多数見つかり、古代において加古川下流域に暮らした人々の活発な活動を知ることのできる貴重な成果を得ることができました。

本書の刊行が、市民の方々にとって郷土の歴史・文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施及び報告書作成にあたり、多大なご協力を賜りました秋毎株式会社様、地元住民の方々をはじめ、関係機関、関係各位に厚くお礼申しあげます。

令和 4 年 6 月

加古川市教育委員会

教育長 小南克己

例　　言

- ・本書は、兵庫県加古川市野口町坂元地内において計画された物販店舗建設工事に先立ち実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である坂元遺跡に該当している。
- ・発掘調査及び整理作業、報告書刊行までに要した経費は、事業主である秋毎株式会社様に多大なるご協力をいただいた。記して感謝いたします。
- ・本調査は、加古川市教育委員会が主体となって実施し、事業主より委託を受けた安西工業株式会社の協力を得た。
- ・発掘調査は、平成 31（2019）年 4 月 17 日から、元号が「令和」へと変わった同年 7 月 6 日までの期間において実施した。
- ・整理作業及び報告書作成は、発掘調査中の令和元（2019）年 5 月 12 日から開始し、以後数度の中斷を挟みながら、令和 4（2022）年 6 月 30 日の報告書刊行をもって終了した。
- ・調査期間中（平成 31 年度（令和元年度）から令和 4 年度まで）における調査体制は以下のとおりである。

加古川市教育委員会

教育長 小南克己

教育指導部

部 長 山本照久（令和 2 年度まで）、神吉直哉（令和 3 年度）、桐山朋宏（令和 4 年度から）

次 長 杉本達之

文化財調査研究センター

所 長 沼田好博（令和 2 年度まで）、河村孝弘（令和 3 年度から）

副所長 宮本佳典

庶務担当係長 吉岡和誠（令和元年度）、藤本庸介（令和 2 年度・3 年度）、萩原美和（令和 4 年度から）

主 査 藤原典子（令和元年度まで）、九鬼一文（令和 2 年度）、
前田正尚（令和 3 年度から）、高下 寛（令和元年度から）

学芸員 山中リュウ（調査担当）、平尾英希（調査補佐）、
淺井達也（調査補佐、令和元年度まで）、古林舞香（調査補佐、令和 2 年度から）

埋蔵文化財専門員 岡田美穂

- ・遺物の水洗・注記・接合・復元は、安西工業株式会社が実施した。
- ・遺物の実測・トレース及び遺構図トレースは、安西工業株式会社が実施し、遺物観察表の作成は山中が行った。
- ・本書に掲載の遺構写真は山中が撮影し、空中写真撮影及び遺物写真的撮影は安西工業株式会社が実施した。遺構写真的整理は加古川市会計年度任用職員 井上かおりが行った。
- ・挿図・図版の作成は、加古川市会計年度任用職員 西村秀子及び安西工業株式会社が実施した。

- ・本書の執筆・編集は山中が行った。
- ・本調査において得られた諸資料・出土遺物は、加古川市教育委員会が保管・管理している。
- ・発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々や諸機関からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

永井信弘 原田昌浩 廣瀬 覚 萬代和明 森内秀造 森下章司 山本祐作 渡辺 畿
加古川市文化財審議委員会 兵庫県教育委員会

凡　　例

- ・本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面（T.P）を用いた。また、遺構全体図中の座標値は、世界測地系（第V系）に基づき、作図段階で設定したものである。
- ・上記の座標を基準とし、調査区全域に 5 m 間隔のグリッドを設定した。
- ・本書に掲載の遺構番号は、整理作業時に掲載遺構として抽出したもののみについて、遺構種別ごとに通し番号を付した（例：掘立柱建物 1、溝 1 など）。
- ・本書中の挿図の縮尺は、遺構図は 1/40 を基本とし、溝の平面及び掘立柱建物跡は 1/80 とした。遺物実測図は 1/4 を基本とした。なお、上記と縮尺が異なる場合は個別に明示した。
- ・遺構図における線種・線号は以下のとおりである。
 - 調査区（実線・0.4 mm）、遺構の上端（実線・0.3 mm）、遺構の中端（実線・0.2 mm）、
遺構の下端（実線・0.1 mm）、攪乱（実線・0.1 mm）、復元線・隠れ線（破線）
- ・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2014 年版）に準じた。
- ・本書に掲載の遺物実測図は、出土した遺構にかかわらず通し番号を付している。
- ・遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、ナデによる稜線は破線で示した。また、須恵器の断面は黒塗り、それ以外の遺物の断面は白抜きで表現している。
- ・遺物観察表の計測値で用いている「*」は復元値、「>」は残存値を表す。

目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 調査に至る経緯と経過	1
第3節 地理的環境	5
第4節 歴史的環境	6
第5節 既往の調査	14
第Ⅱ章 遺構と遺物	18
第1節 概要	18
第2節 基本層序	18
第3節 壊穴建物跡	18
第4節 挖立柱建物跡	24
第5節 柱穴列	26
第6節 土坑・ピット	29
第7節 溝状遺構	38
第8節 その他の遺構	42
第9節 包含層・表土	48
第Ⅲ章 まとめ	56

図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置	2
第 2 図 事業対象範囲	3
第 3 図 遺跡の範囲	4
第 4 図 調査地周辺の地形と地質	6
第 5 図 調査地周辺の微地形	7
第 6 図 周辺の遺跡位置図	8
第 7 図 既往の調査地点	16
第 8 図 遺構配置図	19・20
第 9 図 基本層序	21
第 10 図 壊穴建物 1	22
第 11 図 挖立柱建物 1	24
第 12 図 挖立柱建物 2	25
第 13 図 柱穴列 1	26
第 14 図 柱穴列 2	27
第 15 図 柱穴列 3	28
第 16 図 土坑 1	30

第 17 図 土坑 2・3・4	31
第 18 図 土坑 5・6	33
第 19 図 土坑 7	34
第 20 図 土坑 8	35
第 21 図 土坑 9	35
第 22 図 ピット 1	36
第 23 図 ピット 2	36
第 24 図 ピット 3	37
第 25 図 ピット 4	38
第 26 図 ピット 5	38
第 27 図 ピット 6	38
第 28 図 溝 1・2	39
第 29 図 溝 3	40
第 30 図 溝 4	41
第 31 図 性格不明遺構 1	43・44
第 32 図 性格不明遺構 2	46
第 33 図 性格不明遺構 3	47
第 34 図 出土遺物 1 (1~33)	49
第 35 図 出土遺物 2 (34~70)	50
第 36 図 出土遺物 3 (71~88)	51
第 37 図 出土遺物 4 (89~108)	52

表 目 次

表 1 周辺の遺跡	9
表 2 既往の調査	17
表 3 遺物観察表 1	53
表 4 遺物観察表 2	54
表 5 遺物観察表 3	55

図 版 目 次

写真 1 調査区①・②遠景 (南東から)	卷頭図版 1
写真 2 調査区③~⑥遠景 (南東から)	卷頭図版 1
写真 3 調査区①・②全景 (下が南西)	卷頭図版 2
写真 4 調査区③~⑥全景 (下が南西)	卷頭図版 2
写真 5 調査区① (北西から)	卷頭図版 3
写真 6 調査区② (東から)	卷頭図版 3
写真 7 調査区③ (北西から)	卷頭図版 4
写真 8 調査区④ (南東から)	卷頭図版 4
写真 9 調査区⑤ (北西から)	卷頭図版 5
写真 10 調査区⑥ (南東から)	卷頭図版 5
写真 11 壺穴建物 1 (南東から)	卷頭図版 6
写真 12 柱穴列 1 (北西から)	卷頭図版 6
写真 13 性格不明遺構 1 (北西から)	卷頭図版 6
写真 14 壺穴建物 1 檻出 (北東から)	図版 1
写真 15 壺穴建物 1 檻出 (南から)	図版 1
写真 16 壺穴建物 1 床面 (北東から)	図版 1
写真 17 壺穴建物 1 蓋 (南東から)	図版 1
写真 18 壺穴建物 1 (北東から)	図版 1
写真 19 壺穴建物 1 土層断面 (北から)	図版 1
写真 20 壺穴建物 1 蓋東西断面 (南東から)	図版 1
写真 21 壺穴建物 1 蓋南北断面 (南西から)	図版 1
写真 22 捩立柱建物 1 P1 (北西から)	図版 2
写真 23 捩立柱建物 1 P1 断面 (北から)	図版 2
写真 24 捩立柱建物 1 P5 (北東から)	図版 2
写真 25 捩立柱建物 1 P5 断面 (北東から)	図版 2
写真 26 捩立柱建物 2 P1 (西から)	図版 2
写真 27 捩立柱建物 2 P1 断面 (南西から)	図版 2
写真 28 捩立柱建物 2 P4 (南西から)	図版 2
写真 29 捩立柱建物 2 P4 断面 (西から)	図版 2
写真 30 柱穴列 1 (北東から)	図版 3
写真 31 柱穴列 1 P1 (南から)	図版 3
写真 32 柱穴列 1 P1 断面 (南から)	図版 3
写真 33 柱穴列 1 P2 (北西から)	図版 3
写真 34 柱穴列 1 P2 断面 (北から)	図版 3
写真 35 柱穴列 1 P3 (北西から)	図版 4
写真 36 柱穴列 1 P3 断面 (北西から)	図版 4
写真 37 柱穴列 1 P4 (北西から)	図版 4
写真 38 柱穴列 1 P4 断面 (北西から)	図版 4
写真 39 柱穴列 1 P5 (北から)	図版 4
写真 40 柱穴列 1 P5 断面 (北西から)	図版 4

写真 41	柱穴列 1 P6 (西から) ······	図版 4
写真 42	柱穴列 1 P6 断面 (南西から) ······	図版 4
写真 43	柱穴列 2 (北西から) ······	図版 5
写真 44	柱穴列 2 P1 断面 (西から) ······	図版 5
写真 45	柱穴列 2 P2 (北西から) ······	図版 5
写真 46	柱穴列 2 P2 断面 (北西から) ······	図版 5
写真 47	柱穴列 2 P3 (北西から) ······	図版 5
写真 48	柱穴列 2 P3 断面 (北から) ······	図版 5
写真 49	柱穴列 3 P3 (南から) ······	図版 5
写真 50	柱穴列 3 P3 断面 (南から) ······	図版 5
写真 51	柱穴列 3 P5 (南から) ······	図版 6
写真 52	柱穴列 3 P5 断面 (南西から) ······	図版 6
写真 53	土坑 1 (南西から) ······	図版 6
写真 54	土坑 1 遺物出土状況 (東から) ······	図版 6
写真 55	土坑 1 断面 (南東から) ······	図版 6
写真 56	土坑 2 (北東から) ······	図版 6
写真 57	土坑 2 炭化物検出 (北東から) ······	図版 6
写真 58	土坑 2 断面 (北東から) ······	図版 6
写真 59	土坑 3 (北から) ······	図版 7
写真 60	土坑 3 炭化物検出 (北から) ······	図版 7
写真 61	土坑 3 断面 (北から) ······	図版 7
写真 62	土坑 4 (北西から) ······	図版 7
写真 63	土坑 4 炭化物検出 (北西から) ······	図版 7
写真 64	土坑 4 断面 (西から) ······	図版 7
写真 65	土坑 5 (東から) ······	図版 7
写真 66	土坑 5 断面 (東から) ······	図版 7
写真 67	土坑 6 (東から) ······	図版 8
写真 68	土坑 6 断面 (北東から) ······	図版 8
写真 69	土坑 7 (南から) ······	図版 8
写真 70	土坑 7 断面 (南西から) ······	図版 8
写真 71	土坑 8 (西から) ······	図版 8
写真 72	土坑 8 断面 (南から) ······	図版 8
写真 73	土坑 9 (西から) ······	図版 8
写真 74	土坑 9 断面 (南西から) ······	図版 8
写真 75	ピット 1 (北から) ······	図版 9
写真 76	ピット 1 断面 (北から) ······	図版 9
写真 77	ピット 2 (北西から) ······	図版 9
写真 78	ピット 2 断面 (北西から) ······	図版 9
写真 79	ピット 3 (南から) ······	図版 9
写真 80	ピット 3 断面 (南から) ······	図版 9
写真 81	ピット 3 根固め粘土検出 (南から) ······	図版 9
写真 82	ピット 3 根固め粘土断面 (南から) ······	図版 9
写真 83	ピット 4 (北西から) ······	図版 10
写真 84	ピット 4 断面 (北から) ······	図版 10
写真 85	ピット 5 (北西から) ······	図版 10
写真 86	ピット 5 断面 (北西から) ······	図版 10
写真 87	ピット 6 (北東から) ······	図版 10
写真 88	ピット 6 断面 (北東から) ······	図版 10
写真 89	溝 1・2 (南から) ······	図版 10
写真 90	溝 1・2 南側断面 (北西から) ······	図版 10
写真 91	溝 3 (北から) ······	図版 11
写真 92	溝 3 北側断面 (北から) ······	図版 11
写真 93	溝 4 (南東から) ······	図版 11
写真 94	溝 4 断面 (南西から) ······	図版 11
写真 95	性格不明遺構 1 (南から) ······	図版 11
写真 96	性格不明遺構 1 検出 (北西から) ······	図版 12
写真 97	性格不明遺構 1 断面 (北西から) ······	図版 12
写真 98	性格不明遺構 1 漆パレット ······	図版 12
写真 99	性格不明遺構 1 漆パレット 内面 ······	図版 12
写真 100	性格不明遺構 2 (南から) ······	図版 12
写真 101	性格不明遺構 2 遺物出土状況 (南から) ······	図版 12
写真 102	性格不明遺構 3 (西から) ······	図版 12
写真 103	性格不明遺構 3 断面 (西から) ······	図版 12
写真 104	調査区⑤基本層序 (東から) ······	図版 13
写真 105	調査区⑤下層確認 (南から) ······	図版 13
写真 106	調査区⑥基本層序 (南から) ······	図版 13
写真 107	調査区⑥下層確認 (南から) ······	図版 13
写真 108	調査区①基本層序 (北西から) ······	図版 13
写真 109	作業風景① ······	図版 13
写真 110	作業風景② ······	図版 13
写真 111	作業風景③ ······	図版 13
写真 112	出土遺物 1 ~ 14 ······	図版 14
写真 113	出土遺物 15 ~ 25 ······	図版 15
写真 114	出土遺物 26 ~ 37 ······	図版 16
写真 115	出土遺物 38 ~ 52 ······	図版 17
写真 116	出土遺物 53 ~ 67・69 ~ 71 ······	図版 18
写真 117	出土遺物 68・72 ~ 85 ······	図版 19
写真 118	出土遺物 87 ~ 89 ······	図版 20
写真 119	出土遺物 86・90 ~ 108 ······	図版 21

第Ⅰ章 はじめに

第1節 遺跡の位置

坂元遺跡は、兵庫県加古川市野口町坂元及び坂元北地内に所在している（第1図）。

加古川市は、播磨灘に面した県南部のほぼ中央に位置し、西側を高砂市・姫路市、北側を加西市・小野市、東側を三木市・加古郡稲美町・同郡播磨町・明石市と接している。現在、国道2号や国道250号（明姫幹線）、JR山陽本線などの主要基幹交通路が東西に横断するなど、東播磨地域の中核都市として機能している。また、市域の中央には県下最大の河川である加古川がほぼ南北に縦貫しており、おもに近世以前においては内陸部との主要な交通路や交易路として盛んに利用されていた。畿内に近く、陸路・水路・海路が縦横に交わる交通の要衝として、多くの遺跡が存在する土地である。

今回報告の遺跡が所在する野口町は、加古川下流域の左岸側に位置し、市の中心市街地を形成する加古川町の東側に隣接していることから、近年宅地化が著しく進行している地域である。一方、加古川工業団地に代表される産業施設や昔ながらの田園風景が残る場所もあり、旧街道沿いには古社寺が点在するなど多様な景観を呈している地域でもある。町名となる「野口」は、いなみ野への出入口として古くから残る地名で、加古川から東の明石川までの間に広がる広大ないなみの台地の西端部にあたっている。

坂元遺跡は、加古川によって形成された稻作に適した沖積低地に近く、弥生時代から大規模な集落が営まれ、奈良時代にはいなみの台地縁辺に山陽道が敷設されたことで栄え、中世以降も筑紫大道や西国街道の要衝として多くの遺構・遺物が残されている土地である。

第2節 調査に至る経緯と経過

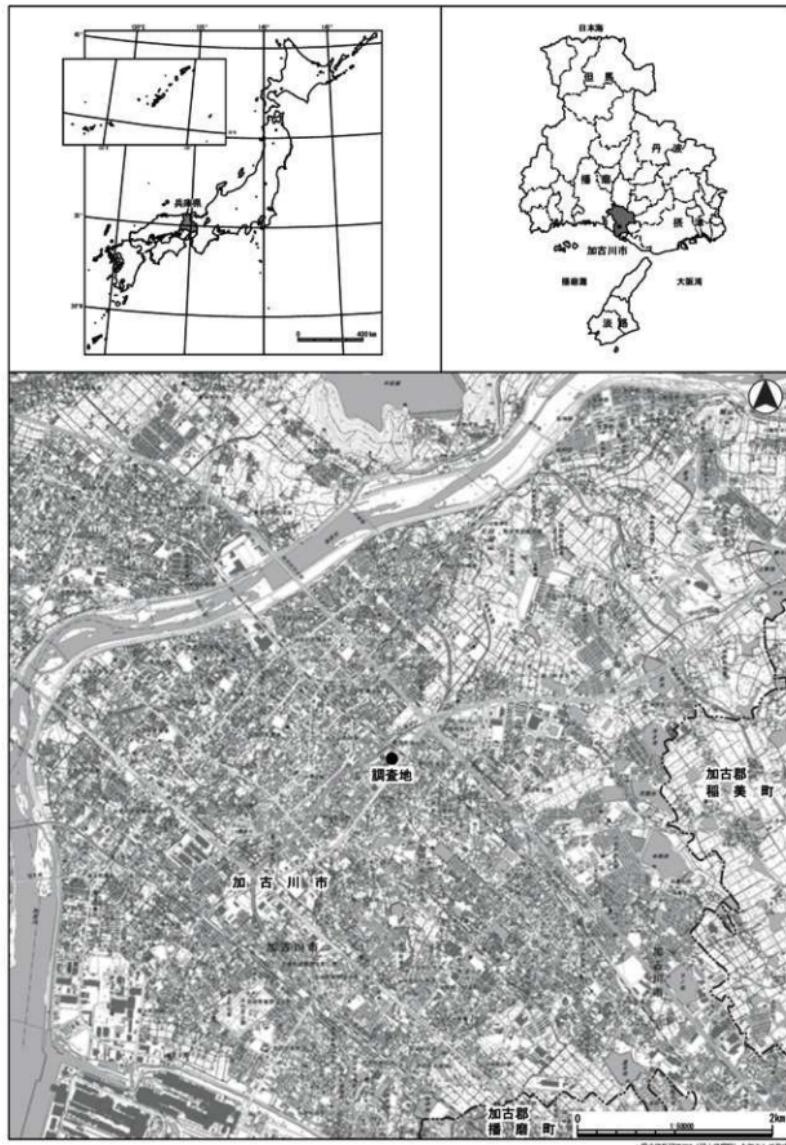
調査に至る経緯 秋毎株式会社（以下「事業者」という。）は、兵庫県加古川市野口町坂元118番1ほか8筆の土地（8,416 m²）において、物販店舗建設工事を計画した（第2図）。

工事着手に先立ち、加古川市教育委員会（以下「市教委」という。）は、上記事業者から当該地における埋蔵文化財の存否確認の照会を受けた。市教委は、照会地が文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地「坂元遺跡」に該当することを伝え、工事着手の60日前までに法に基づく届出が必要である旨の回答を行った。また、当該地は過去に兵庫県教育委員会（以下「県教委」という。）によって本発掘調査が実施された場所の隣接地にあたることを伝え、工事着手前に記録保存のための本発掘調査が必要になる可能性があることを言い添えた。

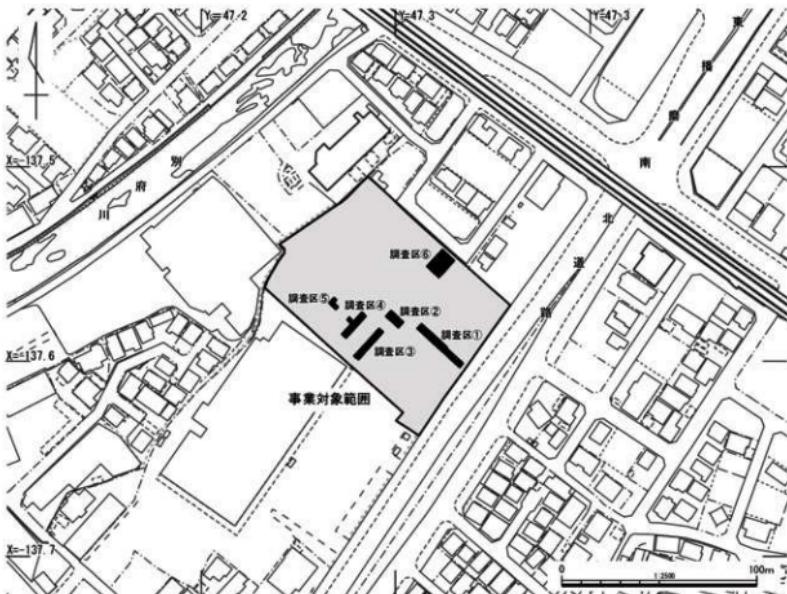
事業者から、平成30（2018）年10月23日付で当遺跡の発掘届が市教委へ提出された。市教委は、提出された工事計画を確認し、工事による掘削が地中の遺跡にどの程度の影響を及ぼすかを調べるために確認調査を実施する計画を立てた。

確認調査は、平成30年12月11・12・14・17日の4日間実施した。対象敷地内に16か所の調査区を設定して合計72 m²の調査を実施した結果、大きく擾乱されていた1か所を除く計15か所の調査区から何らかの遺構・遺物が確認され、県教委による隣接地での調査と同様に、標高5.8 m前後において遺跡が良好に残っていることを確認した。

その後、地中に残る埋蔵文化財を可能な限り保存するため、事業者と工事設計の見直しや調整を複数回繰り返し、平成31（2019）年3月27日付で県教委へ発掘届を進達し、4月1日付で県教委から工事で破壊されてしまう部分について本発掘調査を実施する必要がある旨の通知を受けた。



第1図 遺跡の位置



第2図 事業対象範囲

市教委は、事業者と本発掘調査へ向けての協議を行い、工事の計画上遺跡の破壊を避けることのできない範囲を6か所の調査区に分け（調査区①～⑥）、合計380m²について記録保存を目的とした本発掘調査を実施することとした（第2図）。

調査の経過

平成31（令和元）（2019）年

4月17日：6か所の調査区（調査区①～⑥）を設定し、調査区①の東側から表土掘削を開始。東側は旧建物などの攪乱が多い。

4月19日：調査区①の表土掘削終了後、調査区②の表土掘削を開始。

調査区②において、大型の溝状遺構を検出（溝4）。

4月22日：調査区②の表土掘削終了後、調査区③の表土掘削を開始。

調査区①・②について、遺構検出状況の全景写真撮影を実施。

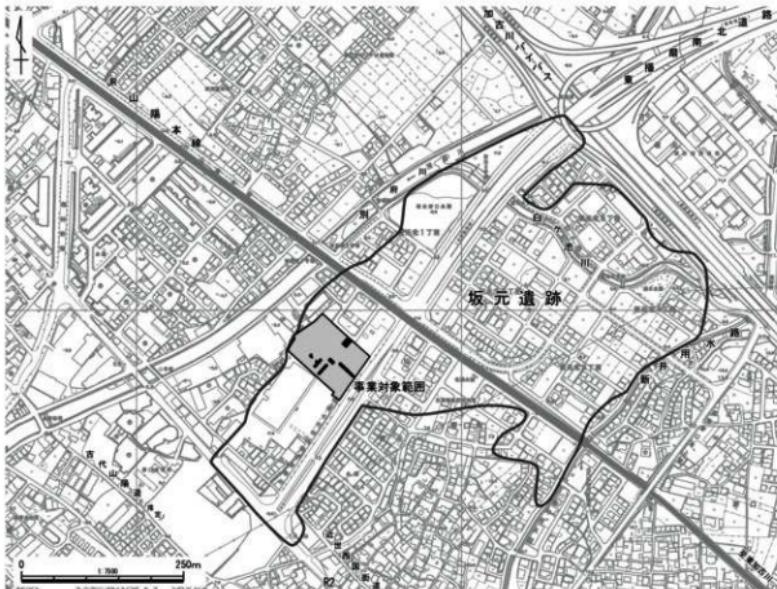
4月23日：調査区③の表土掘削終了後、調査区④の表土掘削を開始。

調査区①・②の遺構精査開始。随時、遺構の図化作業・写真撮影を実施。

4月25日：調査区④の表土掘削終了後、調査区⑤の表土掘削を開始。

調査区④において、甕を伴う竪穴建物跡を検出（竪穴建物1）。

調査区④の遺物包含層中から須恵器把手付椀が出土（実測101）。



第3図 遺跡の範囲

4月26日：調査区⑤の表土掘削終了。

5月7日：調査区⑥の表土掘削を開始。

5月10日：調査区⑥の表土掘削終了。

調査区①において、底面に炭化物が堆積する土坑を確認（土坑2～4）。

5月15日：調査区③・④・⑤について、遺構検出状況の全景写真撮影を実施。

5月16日：調査区②の調査終了。

調査区③の遺構精査開始。随時、遺構の図化作業・写真撮影を実施。

5月20日：調査区①の調査終了。

出土遺物の洗浄作業開始。

5月23日：調査区①・②の全景写真撮影及び空中写真撮影を実施。

調査区①・②の埋戻し開始。

調査区③において、大型の柱穴が6基並ぶ状況を確認（柱穴列1）。

調査区④の遺構精査開始。随時、遺構の図化作業・写真撮影を実施。

5月30日：調査区⑤の遺構精査開始。随時、遺構の図化作業・写真撮影を実施。

6月4日：調査区⑤の調査終了。

6月6日：調査区③の調査終了。

6月12日：調査区⑥について、遺構検出状況の全景写真撮影を実施。

- 6月13日：調査区⑥の遺構精査開始。随時、遺構の図化作業・写真撮影を実施。
- 6月26日：調査区⑥において、粘土で根固めされた柱穴を確認（ピット3）。
- 6月29日：調査区④・⑥の調査終了。
- 7月3日：調査区③～⑥の全景写真撮影及び空中写真撮影を実施。
- 7月4日：調査区⑥において、下層確認のための深掘り実施。
調査区⑥の埋戻し開始。
- 7月5日：調査区③～⑤において、下層確認のための深掘り実施。
調査区③～⑤の埋戻し開始。
- 7月6日：調査区③～⑤の埋戻し終了。
調査完了。

第3節 地理的環境

坂元遺跡は、加古川市野口町坂元及び坂元北に位置している。現在、遺跡の西側には加古川の分流である別府川が南北に流れ、遺跡内北寄りには白ヶ池川が東西に流れて別府川と合流している。

また、東側には近世以来の農業用水路である新井用水が南北に流れている。

遺跡の範囲は、別府川と新井用水で東西が限られ、南側は国道2号、北側は加古川バイパスがそれぞれ東西に延びて遺跡範囲の北限・南限となっている（第3図）。遺跡内の西寄りには、坂元遺跡発見の契機となった東播磨南北道路が国道2号から北へ延びている。遺跡の総面積は約22万m²と広大である。

遺跡周辺の地形を見ると、別府川を境に西側は標高5m前後と低く、東側は標高7m前後と高くなっている。坂元遺跡は、高くなっている別府川東側の土地に広がっており、この土地は北東から南西へ向けて緩やかな下り勾配となっている。こうした地形の変化を地質的に読み解くと、別府川を境に低くなっている西側の土地は、兵庫県最大の河川である加古川によって形成された広大な沖積低地（氾濫原）で、加古川上流から運ばれてきた大量の土砂が河口や最下流域に堆積し、太古からの海進や海退の繰り返しによって均されることで広域かつ低平な沖積低地が形成されている（第4図）。加古川の最下流域は、現在のように流路が固定される前は幾筋もの河道に分かれて播磨灘に注いでいたことがわかつており、現在の別府川はそうした旧加古川河道の名残りともいえる。一方、遺跡の立地する東側の高い土地は、「いなみの台地」と呼称される隆起扇状地の端にあたり、この台地は神戸市西区神出町に所在する雌岡山付近を頂点とし、西の加古川沿岸から東の明石川沿岸にかけて続く、河成・海成からなる広大な段丘地形を形成している。この段丘は、古くに隆起した内陸部が最も高く、そこから順次段階状に高度を下げながら海岸に近い国道250号付近まで至っている。坂元遺跡は、いなみの台地の最終段階に隆起した段丘上に位置しており、この段丘は『加古川市史』第1巻で「野口段丘」と呼称されている（田中1989）。

坂元遺跡周辺の地形環境については、青木哲哉氏によって詳細な分析が行われている（青木2009・2011）。その分析によると、今回調査を実施した土地の周辺は、約10,500年前までに形成され埋没した扇状地が段丘化したものとされ、地中には段丘化する前の旧中洲や旧河道が認められるという（第5図）。また、調査地の西側は別府川に沿う氾濫原となっており、その境界には約2～2.5mの段丘崖が認められる。これまでに行われた周辺での発掘調査では、旧中洲上から掘立柱建物跡や土坑など居住に関係する遺構が、旧河道上から水田跡や溝など生産に関わる遺構が検出されており、地形環境と人間活動が密接に関係している様子が明らかにされている。



第4図 調査地周辺の地形と地質

今回の調査地は、青木氏の分析において旧中洲とされた範囲に含まれている。この土地は、発掘調査に着手する前までは製造工場として利用されてきた土地で、調査時点における地表面の標高は約6.6 mである。

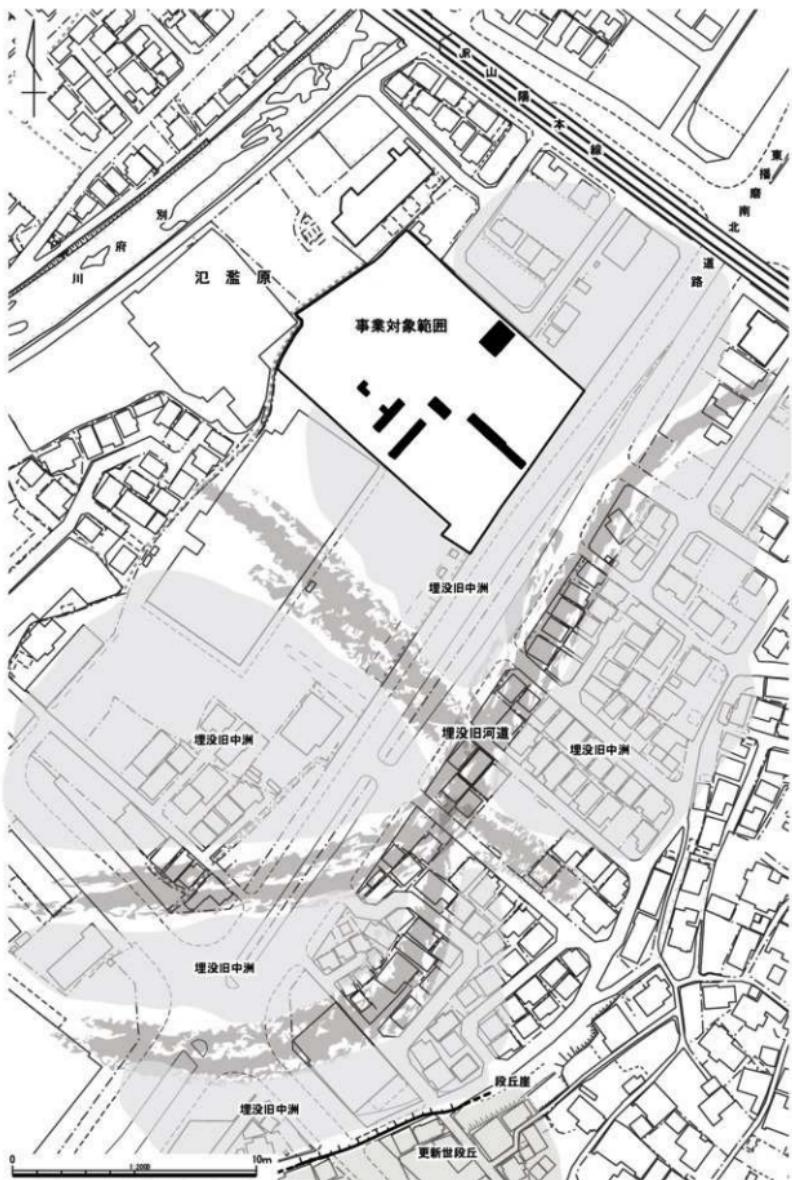
第4節 歴史的環境

加古川下流域は、河川や海上交通のほか、山陽道に代表される陸上交通の要衝でもあり、多くの遺跡が密集している場所である。加古川市内には、旧石器時代から中世にかけてその時に特徴的な遺跡が残されている。以下に、今回調査地とその周辺について、時代ごとに変化する遺跡の様相を概観し、当該地における歴史的環境について述べる。

旧石器時代・縄文時代 旧石器時代・縄文時代の遺跡は、それ以後の時代に比べて調査例や発見例が少ない。また、石器や縄文土器など遺物のみが確認されている場合がほとんどである。

旧石器時代の遺跡としては、坂元遺跡（第6図 634、以下括弧内の番号は第6図及び表1に対応）の過去の調査において、遺物包含層など原位置から離れた状態でナイフ形石器などの石器製品や剝片（フレーク）の出土が報告されている。

ほかに、坂元遺跡と同じいなみの台地上の旧石器時代遺跡としては、東側の平岡町山之上に所在する山之上遺跡やそれに隣接する加古郡播磨町域にある大中遺跡があり、合計700点を超える石器類が採集されている。北側では、加古川へ向けて張り出した日岡山（標高約60 m）の南斜面に日岡山遺跡（4）があり、兵庫県下では珍しい黒曜石製の細石刃核などが採集されている。坂元遺跡周辺では



第5図 調査地周辺の微地形



第6図 周辺の遺跡位置図

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
4	日岡山遺跡	旧石器	115	日岡山18号墳	古墳	480	石守2号墳	古墳
8	東神吉遺跡	弥生-古墳	116	日岡山19号墳	古墳	481	石守3号墳	古墳
10	溝之口遺跡	弥生-平安	117	日岡山20号墳	古墳	488	古代山陽道	奈良
16	今福遺跡	弥生	118	石守1号墳	古墳	490	上村池遺跡	奈良
17	長砂遺跡	弥生	119	水足1号墳	古墳	508	石守古墳群4号墳	古墳
18	橋之口遺跡	弥生	212	尾上遺跡	弥生-古墳	509	石守古墳群5号墳	古墳
22	東車塚古墳	古墳	213	浜の宮遺跡	弥生-古墳	528	松岡青羅墓	近世
23	聖陵山古墳	古墳	218	美乃利遺跡	弥生-中世	555	長烟遺跡	弥生
24	孤塚古墳	古墳	220	古大内遺跡	奈良	611	天神前遺跡	中世
25	勅使塚古墳	古墳	223	野口廃寺	奈良	614	鶴林寺	平安
26	ひれ墓古墳	古墳	224	溝之口廃寺	奈良	617	良野遺跡	弥生
27	西車塚古墳	古墳	225	石守廃寺	奈良	621	教信寺	平安-中世
28	南大塚古墳	古墳	226	西条廃寺	奈良	622	栗津大年遺跡	中世
29	西大塚古墳	古墳	231	日岡山壺棺墓	弥生	631	神野大林古窯跡1号窯	古墳
31	行者塚古墳	古墳	234	日岡遺跡	弥生-古墳	632	神野大林古窯跡2号窯	古墳
32	尼塚古墳	古墳	241	古大内城跡	中世	633	神野大林古窯跡3号窯	古墳
33	人塚古墳	古墳	243	石弾城跡	中世	634	坂元遺跡	绳文-中世
30	北大塚古墳	古墳	245	横倉城跡	中世	635	神野北山遺跡	古墳
68	西条9号墳	古墳	246	安田構居跡	中世	636	大野遺跡	平安-中世
70	西条12号墳	古墳	247	稻屋構居跡	中世	637	大塚遺跡	中世
97	若神社古墳	古墳	248	石守構居跡	中世	646	広沢山遺跡/神納塚古墳	古墳-平安
98	日岡山1号墳	古墳	249	手末構居跡	中世	651	神野山中遺跡	古墳
99	日岡山2号墳	古墳	250	高田構居跡	中世	652	広畑遺跡	奈良-中世
100	日岡山3号墳	古墳	251	中津構居跡	中世	653	西河原遺跡	奈良-平安
101	日岡山4号墳	古墳	257	砂部構居跡	中世	654	石守遺跡	古墳-奈良
102	日岡山5号墳	古墳	258	一色構居跡	中世	655	手末遺跡	弥生
103	日岡山6号墳	古墳	259	野口城跡	中世	657	平津遺跡	弥生-平安
104	日岡山7号墳	古墳	260	長砂構居跡	中世	高85	米田遺跡	弥生-中世
105	日岡山8号墳	古墳	261	細田構居跡	中世	高87	小松原遺跡B地点	古墳-中世
106	日岡山9号墳	古墳	262	尾上構居跡	中世	高90	朝日町遺跡	弥生-古墳
107	日岡山10号墳	古墳	263	加古川城跡	中世	高91	幸田遺跡	弥生-古墳
108	日岡山11号墳	古墳	276	平津構居跡	中世	高92	高砂城跡	中世-近世
109	日岡山12号墳	古墳	282	水足2号墳	古墳	高93	東宮町遺跡	弥生-中世
110	日岡山13号墳	古墳	292	北在家遺跡	弥生-古墳	高94	高砂町遺跡	近世
111	日岡山14号墳	古墳	294	栗津遺跡	弥生-古墳	稻14	幸竹池遺跡	古墳
112	日岡山15号墳	古墳	305	具平塚古墳	古墳	稻17	広ヶ沢遺跡	古墳
113	日岡山16号墳	古墳	357	平野遺跡	弥生	稻20	平見遺跡	その他
114	日岡山17号墳	古墳						

※「高」は高砂市、「稻」は稻美町の遺跡

表1 周辺の遺跡

ほかに目立った報告例はなく、より標高の高い市域北側に遺跡が点在している。しかし、旧石器時代の遺跡は、いずれも石器が表面採集されたり、他の時代の遺構や土層に混入した状態で発見されたものが中心で、原位置を留めた状態での石器出土例はこれまで報告されていない。いくつかの遺跡では石器製品だけでなく剝片や碎片（チップ）が採集されていることから、付近で石器製作が行われたことは間違いないため、今後地中にユニットやブロックが残されているような遺跡が発見されることが期待される。

縄文時代の遺跡としては、同じく坂元遺跡の過去の調査において晚期の埋甕土坑が複数基調査されている。これらの土坑は墓と考えられており、この墓域に対応する居住域が付近に存在する可能性が指摘されている（渡辺 2009）。また、坂元遺跡の西側に広がる沖積低地に所在する溝之口遺跡（10）からは、古墳時代の溝に混入した状態で晚期の土器片が出土している。坂元遺跡周辺ではほかに目立った報告例はなく、旧石器時代と同様に、より標高の高い市域北側に遺跡が点在している。いずれも後期や晚期の土器・石器が他の時代の遺構や土層に混入した状態で見つかる例が多く、集落の具体的な様子はほとんどわかつていない。

弥生時代 弥生時代になると市域全体で遺跡の数が大幅に増加する。

前期の遺跡としては、坂元遺跡の過去の調査において埋没流路から少量の土器が出土しており、周辺では、今回調査地の北側 0.7 km にある美乃利遺跡（218）において、溝や土坑とともに広範囲に広がる水田跡が調査されている。美乃利遺跡は、加古川左岸の沖積低地に位置し、先述の溝之口遺跡と南北に隣り合って所在している。現在のところこの時期の竪穴建物等の検出例がないため居住域の位置ははっきりとしないが、この時期における加古川下流左岸域の中心は美乃利遺跡にあったと考えられる。

その他の市域の前期遺跡では、加古川右岸側の沖積地において充実した調査成果が得られている。東神吉町に所在する砂部遺跡と東神吉遺跡（8）は、現在の加古川右岸の沖積低地上に隣り合って所在する集落遺跡である。両者を同一の集落と考える見方もあり、前期における拠点的な集落と考えられている。砂部遺跡では、全国的に発見例の少ない土器焼成土坑が複数検出されており注目される。

中期の遺跡としては、坂元遺跡の過去の調査において中期後半の遺構が多数調査されている。台地の縁辺部に竪穴建物跡や土坑が広がり、その北側には広範囲に方形周溝墓が分布している。水田に関連すると考えられる溝状遺構なども複数あり、この時期の集落の充実ぶりが窺える。また、坂元遺跡に近接する溝之口遺跡や美乃利遺跡でも中期の遺構が多数調査されている。特に、溝之口遺跡は中期前半頃から遺構が現れ始め、中期半ばから後半にかけて美乃利遺跡をしげぐ大規模集落へと発展する。開発に伴う調査が広範囲に実施されたことで、竪穴建物が密集する居住域、方形周溝墓を主体とする墓域、水田が営まれた生産域という集落景観が明らかにされつつある。溝之口遺跡出土の豊富な土器群は、東播磨の中期弥生土器の基準資料として紹介されることも多い。中期後半においては、近接する美乃利遺跡、坂元遺跡においても居住域が確認されており、その関係性が注目される。

一方、いなみの台地北側の縁辺部では、集落の様相が分かる遺跡は少ないものの、城山（標高約 85 m）の南側に西条庵寺下層遺跡（226）があり、古代寺院の下層から円形の竪穴建物跡が検出されている。さらに東側の台地縁辺には望塚（八幡町上西条）があり、扁平鉢式 6 区袈裟 檜文の銅鐸 1 点が発見されている。

加古川の右岸側では、沖積地内に前期から継続する砂部遺跡があり、丘陵上には中期のみ短期的に存続した集落と考えられる平山遺跡（平莊町池尻）などがある。

後期の遺跡としては、引き続き坂元遺跡・溝之口遺跡・美乃利遺跡で集落の痕跡が確認されている。

各遺跡とも後期前半においては集落規模の縮小や断絶がみられるが、後期後半以降は美乃利遺跡を中心とする堅穴建物跡などが検出されている。終末期（庄内式並行期）には、美乃利遺跡で工房跡と考えられる平面六角形の堅穴建物跡や完形の遺物を含む土坑が検出され、土坑からは特殊な形態と文様を持つ器台なども出土している（友久 2018）。また、この時期になると周辺で粟津遺跡（294）、北在家遺跡（292）などの小規模な集落遺跡が点在するようになり、上記拠点集落からの分村集落とも考えられている（置田 1989）。

いなみの台地上では、坂元遺跡と同様に海岸部に近い台地上の遺跡として南東 4.5 km の位置に大中遺跡がある。中期後半頃に堅穴建物跡が出現し始め、後期後半から終末期にかけて拠点集落へと発展していく。堅穴建物跡から装飾品に加工された内行花文鏡の破片が出土するなど、一般的な集落遺跡ではみられない貴重な発見が相次ぎ、昭和 42 (1967) 年に国史跡に指定されている。台地の北側では、台地上から加古川へ流れ込む曇川沿いの低位段丘上に手米遺跡（249）がある。平面六角形の堅穴建物跡が調査され、遺構構造時に投棄されたと考えられる大量の土器が出土している。その北側には西条遺跡（神野町西条、旧神野遺跡）があり、ほ場整備に伴う確認調査において大型の堅穴建物跡が検出されている。さらに東の城山の麓には、終末期の墳丘墓として著名な西条 52 号墓（西条山手二丁目）がある。開発によってすでに消滅しているが、工事直前に緊急発掘調査が実施され、円丘部と突出部によって構成されていること、石槨を伴う埋葬施設を持つことなどが確かめられた。石槨内に落ち込んだ状態で内行花文鏡などが出土している。

加古川右岸側では、下流の沖積地に前期から続く砂部遺跡があり、その北西段丘上の岸遺跡（西神吉町岸）ではまとまった土器の出土が認められるが、いずれも遺構は乏しい。

古墳時代 古墳時代は、集落遺跡の発見例や調査事例が少なく詳細な検討は進んでいない。対して、加古川流域一帯に築かれた豊富な古墳群の様相について多くの研究や報告がなされている。

前期の古墳としては、今回調査地の北東 2 km に位置する日岡山古墳群が代表的である。宮内庁が所管するひれ墓古墳（26）をはじめ、これまで 8 基の古墳が前期古墳として登録されていたが、令和 2 年度に調査を実施した神納塚古墳（646）の発見によって合計 9 基となった。これらのうち、ひれ墓古墳、勤使塚古墳（25）、西大塚古墳（29）、南大塚古墳（28）、北大塚古墳（30）の 5 基は前方後円墳で、狐塚古墳（24）、東車塚古墳（22、すでに消滅）、西車塚古墳（27）の 3 基は変形や消滅のため明確な形状はわからないものの、中・小規模の円墳もしくは前方後円墳と考えられている。神納塚古墳は、削平が著しいものの円墳である可能性が高い。

ひれ墓古墳は、宮内庁により景行天皇の皇后にあたる「稻日大郎姫命」の陵墓に比定され管理されている。古墳の位置や規模・形態から、古墳群中で最も古くに築かれたと考えられている。神納塚古墳以外はこれまで本格的な発掘調査が行われたことはないが、近代以降の土取り工事や表面採集によって、埋葬施設や副葬品の一端が知られている。採集された遺物としては、南大塚古墳や勤使塚古墳から三角縁神獣鏡、東車塚古墳から三角縁神獣鏡、方格 T 字文鏡・獸文鏡及び石劍 2 点、北大塚古墳から埴輪片や短甲片があり、発掘調査の実施された神納塚古墳からは埴輪片が出土している。前方後円墳が連続して築かれていることや、これまで採集された遺物の内容から、この古墳群の被葬者集団は畿内政権と強い結びつきがあったものと考えられている。

その他の前期古墳としては、今回調査地から南西 1.6 km のいなみの台地南端部にあたる低位段丘上に聖陵山古墳（23）が単独で所在しており、海岸部に近い位置を占めていることで注目される。前方後円墳もしくは前方後方墳と伝えられるが、これまで発掘調査が行われたことはなく前方部はすでに失われている。加古川右岸側では、上荘町薬栗に前方後円墳の長慶寺山 1 号墳があり、埋葬施設の

痕跡と考えられる粘土床状の遺構が調査され、内行花文鏡や武器・農工具が出土している。その北東側の上莊町小野には天坊山古墳があり、円墳とされる墳丘から2基の竪穴式石室が検出され、そのうちの1基から上方作系獸帶鏡・銅鐵・武器・農工具が、他の1基からは画文帶神獸鏡片・管玉・銅鐵・鉄劍・鉄鎌・鉄斧が出土している。

集落遺跡としては、坂元遺跡に隣接する溝之口遺跡において竪穴建物跡1棟の調査事例が報告されており（石野、松下 1969）、日岡山古墳群の母体となる集落が加古川下流域の平野部に存在する可能性が指摘されているが（西谷 1989）、この時期の拠点集落と言えるような規模の遺跡は今のところ確認されていない。

中期の古墳としては、日岡山でみられたような首長墓が東側の西条地区の丘陵地において築かれるようになる。前方後円墳の行者塚古墳（31）、造り出し付円墳（帆立貝式古墳）の人塚古墳（33）及び尼塚古墳（32）という3基の大型古墳が西条古墳群として国史跡に指定され保存整備されている。整備に伴う基礎調査として行われた行者塚古墳の発掘調査では、墳頂部や造り出しのトレンチ調査が行われ、墳頂部から大量の舶載品を納めた副葬品箱が検出され、造り出しの調査では祭祀跡の様子が良好な状態で発見されるなど数々の重要な成果があった。中期後半には、加古川右岸の平莊町池尻や東神吉町升田周辺において平莊湖古墳群が新たに築かれる。平莊湖古墳群は、カヌス塚古墳や池尻2号墳にみられるような竪穴式石室ないし竪穴系横口式石室を埋葬施設とする段階から、升田山15号墳や池尻16号墳に代表される横穴式石室を埋葬施設とする段階まで合計68基の古墳が確認されており、後期まで連続する市内最大規模の古墳群である。ダム建設地区における緊急発掘では、馬具や金製耳飾などの渡来系遺物が多く副葬されていることが明らかにされた。残念ながら古墳の多くは昭和41（1966）年に造られた人工湖である平莊湖の湖底へと没し、現在は墳丘を確認することはできない。

中期の集落遺跡としては、引き続き溝之口遺跡が存続し、その南側の沖積地に立地する北在家遺跡でも竪穴建物跡が検出されている。溝之口遺跡では、遺跡範囲の南端付近で調査された竪穴建物跡から複数の韓式系土器が出土しており、遺物包含層には初期須恵器や陶質土器が含まれるなど、渡来系集団との関連が考えられ、同じく渡来系遺物が多数副葬されていた行者塚古墳と同時期の集落遺跡として注目される。似たような事例として、加古川右岸側では砂部遺跡で掘立柱建物跡や溝状遺構、土坑が調査され、韓式系土器が複数出土しており、平莊湖古墳群との関係が注目される。

後期の古墳としては、中期後半から継続する平莊湖古墳群が代表的であるが、市内各所に円墳や方墳が数多く築かれている。中期に古墳が築かれなくなる日岡山古墳群においても、6世紀から7世紀にかけて小型の後期古墳が築かれるようになり、20基が遺跡登録されている（98～117）。多くは横穴式石室を埋葬主体とした円墳と考えられるが、昭和33（1958）年以降に始まった日岡山公園の造成工事によってそのほとんどが消滅しており詳細は不明である。坂元遺跡では、墳丘の削平が著しいものの遺跡範囲の西側において方墳または円墳を中心とした小規模な古墳群が調査されている。

後期の集落遺跡としては、坂元遺跡の過去の調査において、竪穴建物跡などを中心とする居住域と、その周辺に築かれた墓域としての古墳群及び生産域となる水田跡を検出している。さらに、古墳群近くの段丘崖を利用した埴輪窯も発見され、石見型盾形埴輪をはじめ、古墳群に用いるための各種の埴輪を焼成していたことがわかっている。また、隣接する溝之口遺跡でも引き続き竪穴建物跡の調査事例がある。

ほかに、後期になってからの新たな動きとして、須恵器の窯が加古川市域でも築かれるようになる。いなみの台地上を流れる曇川沿岸には神野大林窯跡群（631～633）があり、さらに東側の草谷川沿岸には野村古窯跡群（八幡町下村）が知られている。

奈良時代・平安時代 奈良時代は、律令制の導入により新たな行政単位が設けられた時代であり、加古川下流域の左岸側は播磨国賀古郡に、右岸側は同国印南郡に含まれる。この時代の特徴的な遺跡としては、いなみの台地南側の縁辺あたりを通っていたとされる古代山陽道（488）があり、その山陽道沿いには賀古駅家の比定されている古大内遺跡（220）がある。兵庫県教育委員会により、賀古駅家の入口付近が発掘調査されている（中川編2010）。また、古墳に替わって古代寺院が出現することも大きな変化である。

この時期の遺跡として、坂元遺跡の過去の調査において多数の遺構が調査されている。特に掘立柱建物跡は80棟近くが検出され、奈良時代の前半と後半で建物の軸方向が変化することが分かり、8世紀後半に建物の大幅な配置転換が行われるとともに、建物方向を条里制の地割に対応したものへ変えた様子が解明されている（西口2009）。また、古代山陽道との位置関係や出土遺物の内容から、坂元遺跡は賀古駅家における駅務を負担する駅戸集落の有力候補とされ、「駅」または「郡」と読める墨書き土器や円面鏡などが出土している。坂元遺跡の南東1kmには、古大内遺跡の北東側に野口廃寺（223）がある。発掘調査の結果、瓦積基壇で構築された塔・講堂・小堂宇が確認されており、坂元遺跡を拠点とする勢力と何らかの関係があるものと考えられる。その他の古代寺院としては、北東に流れる曇川沿岸に石守廃寺（225）がある。法隆寺式の伽藍配置に類似し、この地域で産出される竜山石（流紋岩質凝灰岩）製の心礎を持つ塔跡や瓦積基壇で構築された金堂跡などが調査されている。曇川を超えた東側には西条古墳群と同じ台地上に西条廃寺（226）がある。発掘調査によって精緻に組まれた瓦積基壇が検出され、竜山石製の心礎を持つ塔跡や金堂・講堂などが調査されている。石守廃寺と同様に法隆寺式の伽藍配置に類似している。昭和44（1969）年に兵庫県の指定史跡となっており、平成6（1994）年に史跡公園としての整備が完了している。加古川右岸側では、沖積地を望む段丘上に中西廃寺（西神吉町中西）がある。発掘調査は行われていないが、採集された瓦から平安時代後期まで存続したことがわかっている。

官衙的な性格を持つ遺跡としては、坂元遺跡に隣接する溝之口遺跡において、遺跡範囲の北側を中心に櫛列や溝状遺構に囲まれて「コ」字形に配置された掘立柱建物跡や、倉庫群と考えられる多数の掘立柱建物跡、井戸などが調査されている（加古川市教育委員会1992）。「大穀」と記された墨書き土器や銅製・石製の鈎帶具などが出土したことから「賀古郡衙」の候補地となっており、北側に隣接する美乃利遺跡からは、「郡」と記された墨書き土器なども出土している。ほかに、溝之口遺跡の遺跡範囲北端は、古代瓦が表面採取されたことを理由に溝之口廃寺（224）として遺跡登録されているが詳細は不明であり、古代寺院というよりは郡衙との関連で解釈したほうがよさそうである。

平安時代は、先述した古代寺院の多くが9世紀までにいったん廃絶する傾向がみられ、その理由として、『日本三代実録』に播磨諸郡の官舎・諸定額寺の堂塔が悉く倒壊したことが載る、貞觀10（868）年の播磨国大地震との関連が指摘されている。後期までは、新たな寺院として鶴林寺（614）、教信寺（621）、佐伯寺跡（東神吉町升田）などが成立したと考えられる。鶴林寺は、聖德太子の建立という縁起を持つが、本尊の薬師如來像や法華堂（太子堂）・常行堂の年代観から、この時期に伽藍が整えられたとする説が有力である。また、10世紀初めに編纂された『延喜式』には、賀古郡・印南郡のうち唯一の式内社として日岡坐天伊佐々比古神社（日岡神社）が掲載されている。

この時期の遺跡としては、坂元遺跡の過去の調査において、広範囲に点在する掘立柱建物跡や溝状遺構が検出されており、周辺の溝之口遺跡・美乃利遺跡・大野遺跡（636）などでも溝状遺構や井戸とともに広範囲に点在する掘立柱建物跡が調査されている。こうした成果から、平安時代後期頃には加古川左岸低地部から台地縁辺部での開拓はかなり広範囲に進んでいたことがわかってきてている。

鎌倉時代・室町時代 市内全域で調査事例が少なく、内容のわかる遺跡は僅かである。

この時期の遺跡としては、坂元遺跡の過去の調査において、掘立柱建物跡や水田跡などが検出されている。周辺の美乃利遺跡においては、鎌倉時代の掘立柱建物跡や屋敷墓が検出され、美乃利遺跡に接する大野遺跡においても鎌倉時代の掘立柱建物跡や墓が検出されている。また、同じ沖積低地の南側に立地する栗津大年遺跡（622）では、室町時代まで続く掘立柱建物跡や木棺墓などが検出されている。いずれの遺跡も、現在の加古川町本町周辺に栄えていたとされる中世加古川宿の周辺に点在する集落跡と考えられる。ほかに、具体的な調査事例は乏しいものの、室町時代に築かれたとされる城や構居が数多く存在したことが文献資料の分析などからわかっている。戦国期の羽柴秀吉による播磨平定に深く関わる加古川城跡（263）、野口城跡（259）、神吉城跡（東神吉町神吉）をはじめ、今回調査地周辺にも長砂構居跡（260）、細田構居跡（261）などが遺跡登録されている。なお、加古川城跡については、鎌倉時代を通じて播磨守護所が置かれていた可能性があり、城として活用される以前の様相にも注意を払う必要がある。

江戸時代以降 今回調査地周辺は、江戸時代をとおして姫路藩領の農村地域であった。一方、現在の加古川町寺家町周辺は、京都から下関を通り長崎に至る西国街道（中国路）の重要な宿場町（近世加古川宿）として栄え、加古川には舟運の高瀬舟が往来し内陸部との物流における主要拠点であった。

江戸時代の遺跡は、中期に俳人として活躍した松岡青蘿（まつおかせいら）の墓所が「松岡青蘿墓」（528）として登録されている。また、平成 16（2004）年に実施された坂元遺跡の発掘調査では、道路の側溝と考えられる溝状遺構が検出され、西国街道の一部と推定されている（岸本 2011）。

明治時代になると、加古川には橋が架けられ、明治 21（1888）年に山陽鉄道（現 JR 山陽本線）が開通し、明治 31（1898）年には日本毛織工場の操業が始まるなど近代化が進む一方、宿場町としての機能は衰えていった。大正 2（1913）年には播州鉄道（現 JR 加古川線）が開通したことで高瀬舟も姿を消した。

昭和 12（1937）年に始まる日中戦争及びそれに続く太平洋戦争の際に、交通の便利な加古川地域に多数の軍事施設が設けられることとなり、「小軍都」の様相となる。尾上方面に陸軍加古川飛行場や陸軍航空通信学校尾上教育隊、野口方面には陸軍高射砲第三連隊基地が置かれ、日岡山に近い現加古川刑務所一帯は陸軍航空補給廠神野出張所として爆弾の製造や保管場所として利用され、加古川駅と繋がる鉄道も敷設された。

戦後には、復興への動きの中で昭和 25（1950）年に加古川町、尾上村、神野村、野口村、平岡村の5か町村解消合併による「加古川市」が誕生し、その後、別府町、八幡村、平荘村、上荘村、東神吉村、西神吉村、米田町の一部の合併や金沢町の新設があり、昭和 54（1979）年の志方町との合併を経て現在の市域となった。

現在の加古川市は、播磨灘沿岸の工業地帯や神戸・大阪方面のベッドタウンとして栄えている。

第 5 節 既往の調査

坂元遺跡の位置する野口町坂元周辺では、平成 8（1996）年頃から JR 山陽本線の立体交差事業や坂元・野口土地区画整理事業、東播磨南北道路改築事業等に対する埋蔵文化財関連の協議が進められていた。平成 11（1999）年には、加古川市教育委員会による分布調査によって事業地周辺に埋蔵文化財の存在が確かめられたため、「坂元遺跡」の名称で遺跡が登録された。これ以後、主に兵庫県教育委員会によって工事計画に合わせて確認調査が随時実施され、坂元遺跡が当初の想定よりかなり広い範囲まで及んでいることが明らかになっていくとともに、開発等で遺跡が破壊される範囲について、

以後数年間にわたる記録保存のための本発掘調査が行われることとなった。

平成12（2000）年に、JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う調査が兵庫県教育委員会によって実施された。調査面積は575m²である。主に弥生時代と奈良時代の遺構・遺物が確認され、その成果は平成18（2006）年刊行の兵庫県文化財調査報告第308冊『坂元遺跡I』にまとめられた（兵庫県教育委員会2006）。

平成15（2003）年には、坂元・野口土地区画整理事業に伴う調査が同じく兵庫県教育委員会によって実施され、この事業に伴う調査は平成16年、17年と続いた。各年の調査面積は、平成15年が7,626m²、平成16年が18,502m²、平成17年が6,807m²で、合計32,935m²という広大なものである。調査では、奈良時代を中心に縄文時代から中世に至る各時代の遺構・遺物が多数検出され、その成果は平成21（2009）年刊行の兵庫県文化財調査報告第366冊『坂元遺跡II』にまとめられた（兵庫県教育委員会2009）。

土地区画整理に伴う調査と並行して、平成16（2004）年には主要地方道加古川小野線（東播磨南北道路）道路改築事業に伴う調査が兵庫県教育委員会によって実施され、この事業に伴う調査は平成18（2006）年、19年、20年にも実施された。各年の調査面積は、平成16年が5,181m²、平成18年が4,878m²、平成19年が127m²、平成20年が1,130m²で、合計11,316m²である。調査では、主に古墳時代や奈良時代の遺構・遺物が確認された。その成果は、事業範囲の南側で実施された平成16・19年調査分については平成23（2011）年刊行の兵庫県文化財調査報告第404冊『坂元遺跡III』に（兵庫県教育委員会2011）、北側で実施された平成18・20年調査分については平成24（2012）年刊行の兵庫県文化財調査報告第427冊『坂元遺跡IV・溝之口遺跡II』にまとめられた（兵庫県教育委員会2012）。

以上のように、これまでの調査はすべて兵庫県教育委員会によって実施されたものであり、合計44,826m²を調査し、その内容は4冊の発掘調査報告書にまとめられている。大きな成果としては、溝之口遺跡と並行する時期に営まれた弥生時代集落の充実ぶりや、兵庫県内で初めてとなる埴輪窯の発見、賀古駅家の運営に携わった駅戸集落の可能性がある建物群の検出などが挙げられる。これら過去の調査における各地点での主な調査成果は、第7図及び表2を参照されたい。

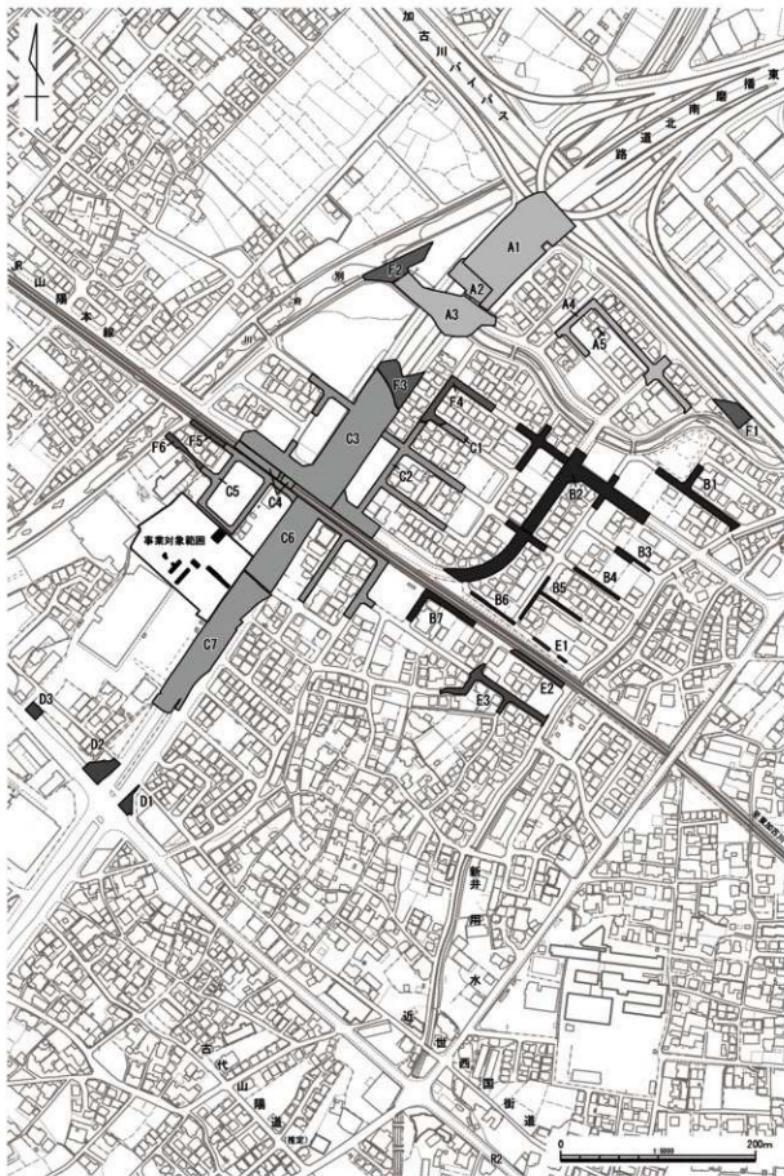
今回の調査は、加古川市教育委員会が実施する初めての坂元遺跡での本発掘調査である。

註1) 現在登録されている遺跡名称は「西条庵寺」だが、古代寺院と区別するため表記の遺跡名を通称として用いている。

註2) 手末遺跡は、現在登録されている遺跡名称は「手末構居跡」だが、中世城館と区別するため表記の遺跡名を用いている。

註3) ひれ墓古墳は、「日岡陵古墳」「日岡御陵」と呼称されることも多いが、本報告書では遺跡台帳に登録されている遺跡名稱を用いている。

註4) 神納塚古墳は、集落遺跡として登録されている広沢山遺跡（646）と重複しているため、現在のところ単独の遺跡としては登録されていない。



第7図 既往の調査地点

地形	地点名	主な遺構					掲載 報告書名	特記事項
		繩文時代	弥生時代	古墳時代	古代	中世		
段丘上	A1 地点	—	土坑 1	古墳 4・壠穴建物 2・ 竪穴建物 2・ 木棺墓 2・土坑 4	掘立柱建物 2・ 土坑 2	—	溝 1	『坂元遺跡Ⅳ』 兵庫県教育委員会 2012
	A2 地点	—	—	—	掘立柱建物 6	—	—	『坂元遺跡Ⅲ』 兵庫県教育委員会 2009
	A3 地点	—	方形周溝墓 9・ 土坑墓 2	大畦畔	—	掘立柱建物 1	〃	段丘尾端に方形 周溝墓と土坑墓
	A4 地点	複数土坑 4・土坑 1・ピット 1	整穴建物 1・溝 2	竪穴建物跡 2	掘立柱建物 3・ 溝 1	掘立柱建物 1	〃	段丘尾端に複数 土坑の埋蔵土坑
	A5 地点	—	—	堆積層 ? 1・土坑 1・性格不明 1	—	—	〃	すべての遺構が 砂礫堆出土
段丘中	B1 地点	—	—	—	—	溝 6	〃	水田閑連の溝
	B2 地点	土坑 3	方形周溝墓 4	溝 1	掘立柱建物 3・上 坑 3・溝 3・堆積 1	掘立柱建物 1・上 坑 5・溝 12	〃	段丘尾端に圓 文土坑・弥生方 形周溝墓
	B3 地点	—	—	—	—	溝 7	〃	水田閑連の溝
	B4 地点	—	—	—	—	—	〃	時期不明の水 田閑連の溝
	B5 地点	—	—	—	—	—	〃	時期不明の水 田閑連の溝
	B6 地点	—	—	—	—	小溝数条	〃	水田閑連の溝
	B7 地点	—	—	—	掘立柱建物 1	溝 1・ピット 8	〃	
段丘池ヶ上	C1 地点	—	方形周溝墓 1・溝 1	性格不明 1	—	—	〃	古墳時代の性格 不明遺構から埴 輪多量に出土
	C2 地点	—	方形周溝墓 1・土坑 1	祭祀土坑 2	—	掘立柱建物 3・ 溝 5・水田跡	掘立柱建物 1	〃
	C3 地点	—	掘立柱建物 1・ 方形周溝墓 3・ 土坑 13・溝 2	古墳 1・堆立柱建 物 2・堆積 1・ 性格不明 2・祭祀 土坑 1・溝 1	掘立柱建物 41・ 井戸 1・土坑 22・ 溝 18	—	〃	時期不明の竪穴 建物 4棟 掘立柱建物密集
	C4 地点	—	土坑 4・溝 2	—	—	水田柱建物 20・ 堆積 1・土坑 6・ 溝 9	—	『坂元遺跡Ⅰ』 兵庫県教育委員会 2006
	C5 地点	—	竪穴建物 4・ 土坑 7・溝 1	竪穴建物 4・ 溝 8	竪穴建物 2・ 柱建物 10・土坑 5・ 溝 20・水田跡・ 大畦畔	—	『坂元遺跡Ⅱ』 兵庫県教育委員会 2009	時期不明の竪穴 建物 10 棟
	C6 地点	—	竪穴建物 1・土坑 1	竪穴建物 2	—	焼土坑 2・動跡	〃	東側は丘地点 へ続く生産城
	C7 地点	—	—	土坑 1・溝 2	—	水田柱建物 15・ 土坑 43・溝 31・ 水田跡	—	『坂元遺跡Ⅲ』 兵庫県教育委員会 2011
段丘端上	D1 地点	—	溝・流路跡			—	〃	
	D2 地点	—	—	—	—	溝 7	〃	近世西国街道 の側溝検出
	D3 地点	—	—	—	—	溝 3	—	〃
	E1 地点	—	—	—	—	溝 1	『坂元遺跡Ⅱ』 兵庫県教育委員会 2009	
(開丘部)	E2 地点	—	—	—	—	—	〃	時期不明の溝 5
	E3 地点	—	—	—	—	—	〃	
	F1 地点	—	—	—	—	溝 1	〃	
北段谷丘中雷	F2 地点	—	溝 1	—	—	—	〃	
	F3 地点	—	—	水田跡	—	—	〃	
	F4 地点	—	溝 2	—	溝 1・水田跡	—	〃	時期不明の溝多
	F5 地点	—	—	—	水田跡	—	〃	
	F6 地点	—	—	—	大畦畔	—	〃	

*地名は本書での仮の名称であり、既刊報告書の調査区名とは対応しない。
*遺構種別に綴ぐ数字は検出数を表す。既刊報告書で時期が明記されていないものはカウントしていない。

表 4 既往の調査
低

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 概要

今回の調査では、6か所に分かれる調査区で合計380 m²の発掘調査を実施し、弥生時代から平安時代までの遺構・遺物を確認した。

遺構は合計147基検出した（第8図）。内訳は、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡2棟、柱穴列3列、土坑47基、ピット83基、溝状遺構7条、性格不明遺構4基である。このうち本書では、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡2棟、柱穴列3列、土坑9基、ピット6基、溝状遺構4条、性格不明遺構3基を選定し、次節以降にその詳細を述べる。

遺物は遺物収納コンテナで15箱分出土した。須恵器・土師器が多く、ほかに弥生土器、円筒埴輪、瓦、金属製品、石器などが遺構埋土や遺物包含層中、表土・擾乱から出土した。このうち本書では、弥生土器16点、円筒埴輪2点、須恵器56点、土師器29点、瓦4点、石器1点を抽出し、次節以降にその詳細を述べる。

第2節 基本層序

今回の発掘調査は、工場として利用されていた土地に6か所に分かれる調査区を設定して実施した。工場解体後の現地表面は、標高6.6 m前後で平坦な更地となっており、おおむね長方形となる敷地の東面は東播磨南北道路に接し、西面は別府川沿いの低地部と接している。

各調査区における基本層序はおおむね共通しており、大きく3段階（第I～III層）の堆積により成り立っている（第9図）。

第I層は、現代土及び工場の基礎等による擾乱層や、工場として利用される前の旧耕作土・床土層である。旧耕作土には近世以降の遺物が少量含まれている。床土上面での標高は6 m前後で、2段ほどの高低差のある耕作地が広がっていたものと考えられる。

第II層は、奈良時代の遺物を中心とした遺物包含層である。主に2層の堆積に分かれ、1層のみの部分も近世以降の耕作や工場建設の際に上層の包含層が削られた結果と考えられ、本来は2層以上の包含層が安定して堆積していたものと考えられる。層厚はいずれも0.2 m以下である。

第III層は、砂質シルトや砂礫・砂で構成される自然堆積層（いわゆる「地山」）である。第I章第3節で触れたとおり、段丘化する前の旧中洲の堆積層と考えられる。いずれの調査区でも第II層の直下が第III層の地山となっており、今回調査した遺構はすべて第III層上面から検出したものである。地面上の標高は5.6～6.0 mとやや差があり、東側から別府川のある西側へ向けて緩やかに下がっている。

第3節 竪穴建物跡

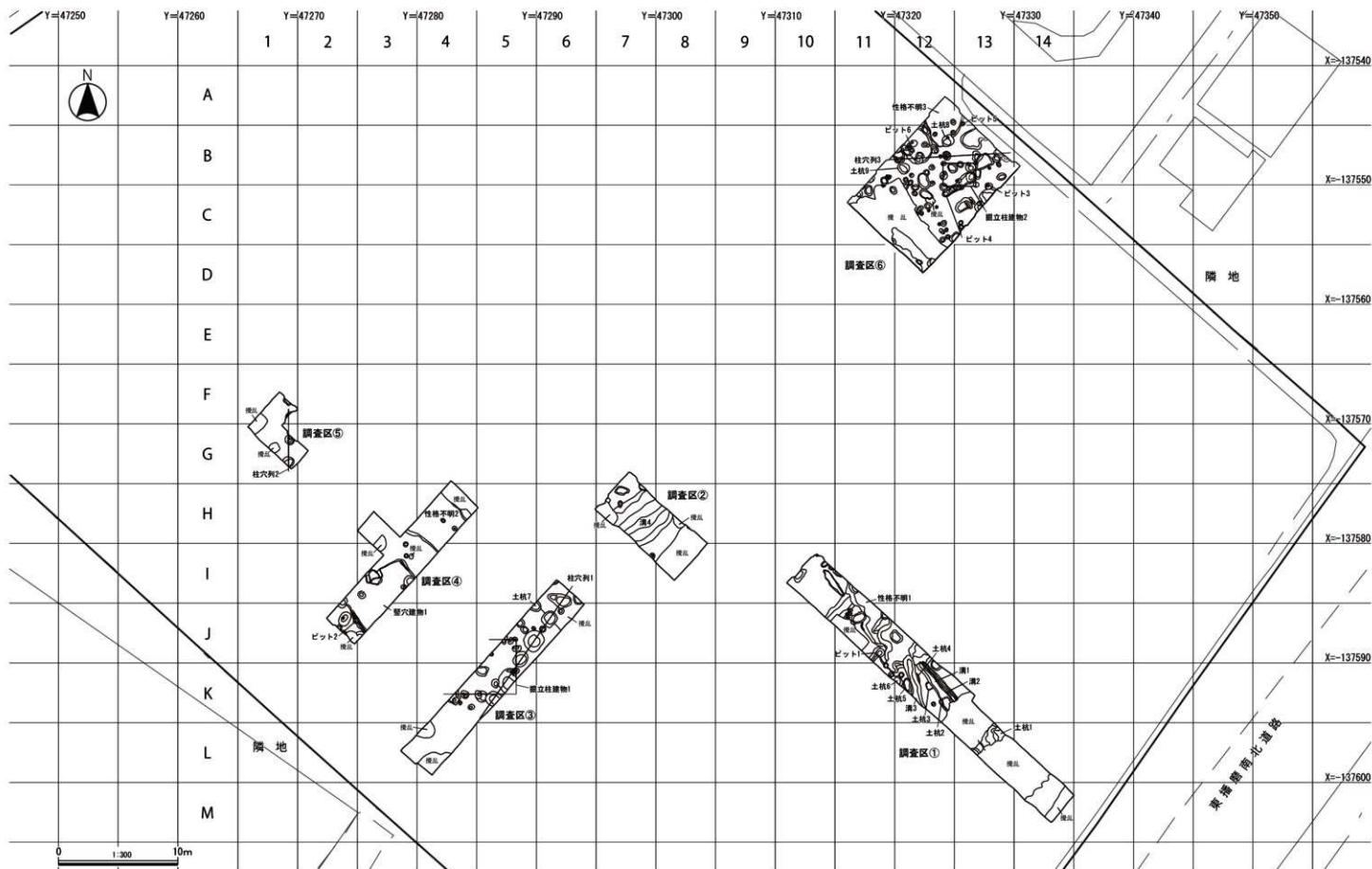
■竪穴建物1（第10・34図、表3、写真11・14～21・112）

位 置：調査区④のI3・J3グリッドに位置する。上端の一部を土坑やピット2に切られている。

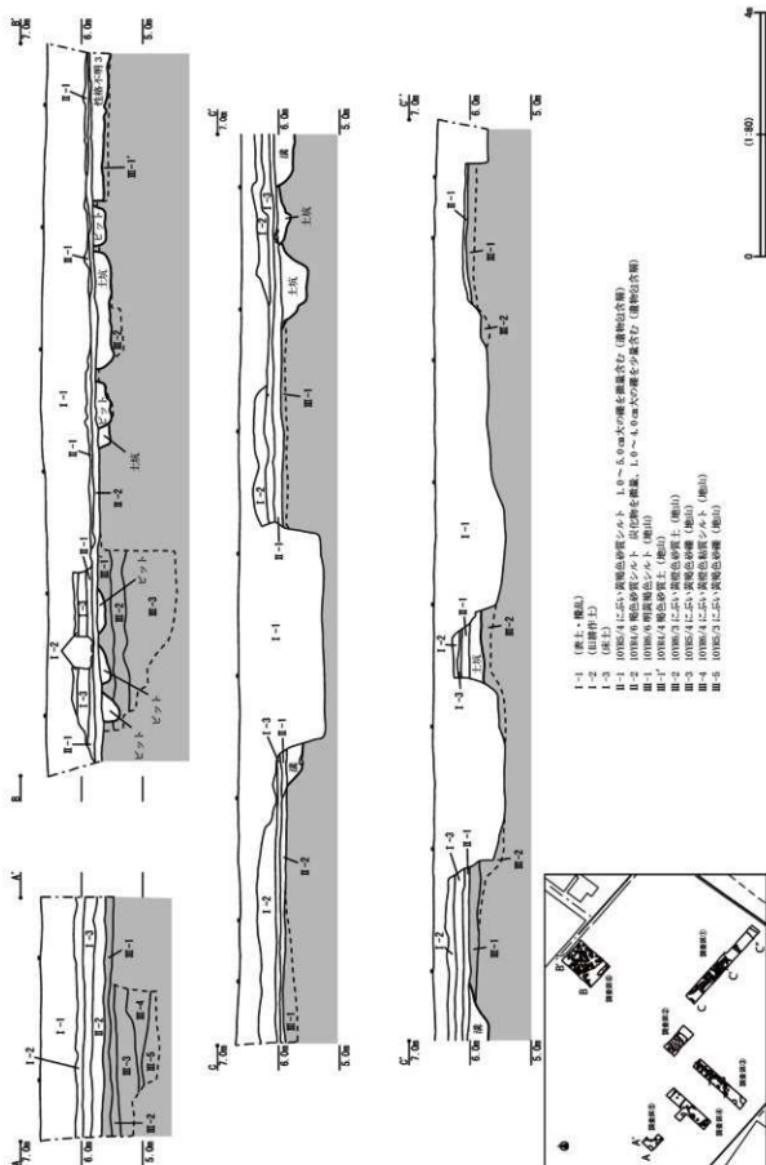
遺構の南半部と北西隅は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.70 mで、現地表面から約1 m下に位置する。竪を基準とした軸方位は、N-34°Wを示す。

形 態：平面形は隅丸方形と推測され、北側壁面の中央に竪が設けられている。

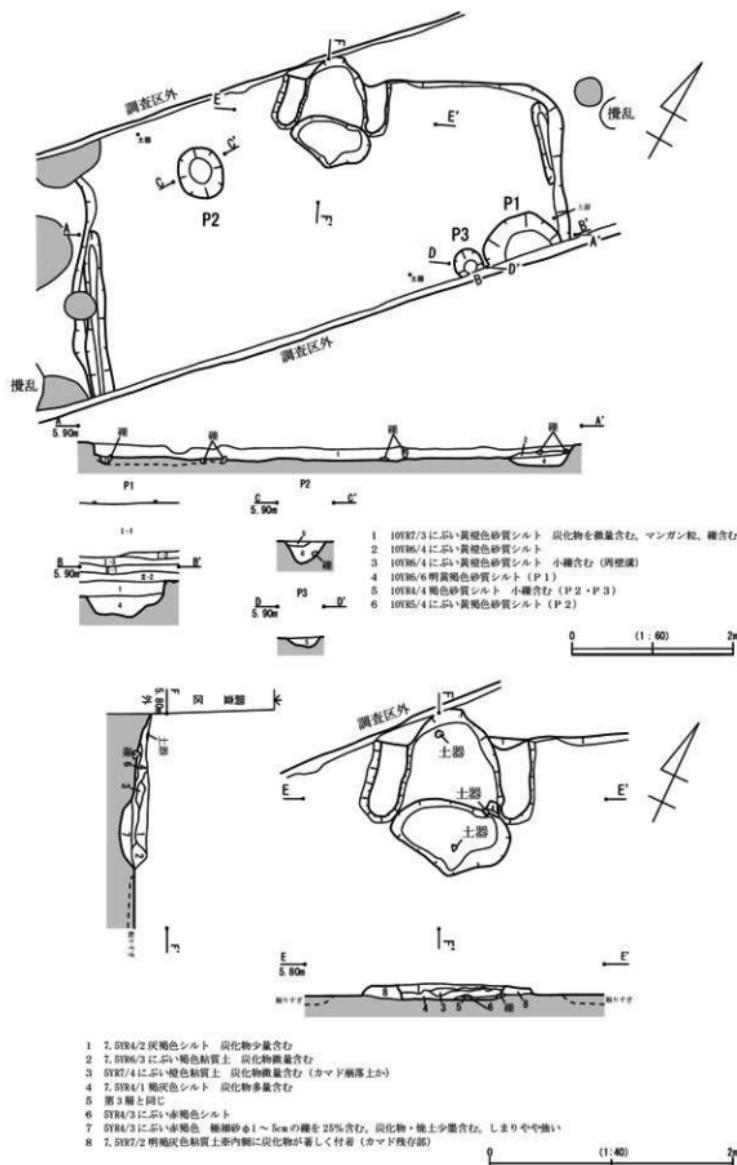
規 模：東西方向の平面規模は約6.1 mを測る。南北方向は、検出した範囲で3.1 mを測る。遺



第8図 遺構配置図



第9図 基本調査



第 10 図 穴穴建物 1

構面は全体的に大きく削平されており、床面までの深さは 0.15 m と浅い。検出した範囲での建物面積は 19 m² 以上となる。

付帯施設：一部に周壁溝が見られ、北壁には竈がある。床面からビット 3 基(P1 ~ P3)を検出したが、配置は不規則で遺物の出土はほとんどなく、確実に建物に伴うものか不明である。明確な主柱穴や貯蔵穴は確認できていない。

周壁溝は、西壁沿いと北東隅付近で確認したほかは不明瞭であった。幅は 0.20 ~ 0.26 m、床面からの深さは 0.07 m を測る。

竈は、北壁の中央で検出し、上面は後世の削平により大きく失われているものの、両袖の下部は崩れることなく良好な状態で残っていた。袖は白色の粘土で構築され、両袖の中心間の距離は約 1 m を測る。竈内の縁にて、赤褐色に変色した被熱層を確認している。竈の奥壁側は煙道が続いているものと考えられるが、削平により失われている。

床面から検出したビットは合計 3 基である。このうち P2 は、建物内の北西にあり、主柱穴の可能性があるが、対応するビットは検出できなかった。規模は、長軸 0.66 m、短軸 0.55 m、床面からの深さ 0.26 m を測る。東壁に接する位置で検出した P1 は、貯蔵穴の可能性が考えられたが、遺物が一切出土していないため断定できない。規模は、長軸 0.97 m、検出した範囲での短軸 0.48 m、床面からの深さ 0.25 m を測る。それに隣接する P3 の規模は、長軸 0.35 m、検出した範囲での短軸 0.30 m、床面からの深さ 0.12 m を測る。

土 層：建物内の埋土は、床面から検出した P1 ~ P3 を含めると 6 層に区分できる。にぶい黄橙色の砂質シルトを主体とし、第 3 層は周壁溝の埋土である。

竈の土層は、8 層に区分できる。第 1・2 層は、竈の天井部崩落後の堆積層と考えられる。第 3 層は、崩落した天井部の一部と考えられ、竈内の東側を中心に確認された。粘土を主体とする構築材がにぶい橙色に変色し、ブロック状の塊として堆積している。第 4 層は、竈内の全面に堆積しており、褐灰色シルトに多量の炭化物が含まれている。使用した燃料の残存物と考えられる。第 5・6 層は、燃焼の結果変色したと考えられる橙色や赤褐色を呈する粘質土で、竈内の縁に堆積し、東側から奥壁付近にかけて認められる。第 7 層は、竈の入口手前に掘られた梢円形の浅い窪みの堆積土である。にぶい赤褐色の砂質土を主体とし、小礫や焼土・炭化物片を含んでいる。竈内から掻き出した燃え滓などの痕跡と考えられる。第 8 層は、竈の袖を構成する明褐色の粘土である。内側には炭化物が著しく付着している。

出土遺物：遺物の出土は少量であったが、埋土や竈内、床面に掘られたビットから弥生土器や須恵器・土師器が出土している。土師器の小片が多く、須恵器は甕の破片が 1 点出土したのみである。

1・2 層は、土師器の甕である。竈内から出土し、やや胴長の体部に外反する口縁部を持つ。外面はタテハケされ、1 の内面はナデ仕上げされている。

3 層は、弥生土器の甕もしくは壺の底部片である。P2 から出土したが、竈内の出土遺物と時期が異なるため混入品と考えられる。

4 層は、土師器の椀である。高い高台と直線的に開く体部を持つ。底部外面はナデ仕上げされている。埋土の上層から出土し、竈内の出土遺物と時期が異なるため混入品と考えられる。

遺構時期：竈内から出土した遺物から、遺構の時期は 7 世紀前半頃と判断した。

第 4 節 挖立柱建物跡

■ 挖立柱建物 1 (第 11・34 図、表 3、写真 22 ~ 25・112)

位 置：調査区③の J5・K5 グリッドに位置する。柱穴列 1 に切られ、他の土坑を切っている。建物の西側半分と南東隅付近は調査区外へ及んでおり、調査では 6 基の柱穴 (P1 ~ P6) を検出した。遺構確認面の高さは標高 5.9 m で、現地表面から約 0.8 m 下に位置する。東側に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は、ほぼ南北の正方位を向いている。

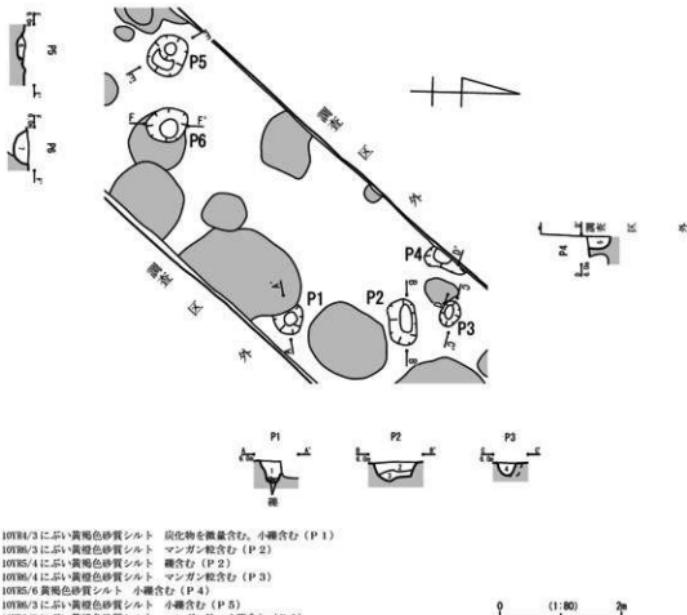
形 態：東西方向、南北方向に柱穴が並ぶ 5 間 × 3 間以上の建物と考えられるが、柱穴列 1 に P4・P6 に切られているため詳細な柱配置は不明で、桁行・梁行の判別もできない。各柱穴はおおむね平面梢円形を呈し、P2 のみ隅丸長方形となる。断面形は、U 字状や凹字状をしている。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できない。

規 模：東西方向の柱間は 1.0 ~ 1.3 m、南北方向の柱間は 0.9 m 前後を測り、検出した範囲での床面積は 19 m² 以上となる。各柱穴の規模にはばらつきがあり、長軸 0.43 ~ 0.74 m、短軸 0.32 ~ 0.59 m、深さ 0.13 ~ 0.37 m を測る。

土 層：合計 7 層に区分できる。黄褐色や黄橙色の砂質シルトを主体としている。

出土遺物：各柱穴から少量の須恵器・土師器の破片が出土地している。図化可能なものは、P2 から出土した須恵器のみである。土師器の破片が多めで、須恵器は 3 点のみの出土である。

P5 は、P2 から出土した須恵器の杯蓋である。内面に浅いかえりを持つ。



第 11 図 挖立柱建物 1

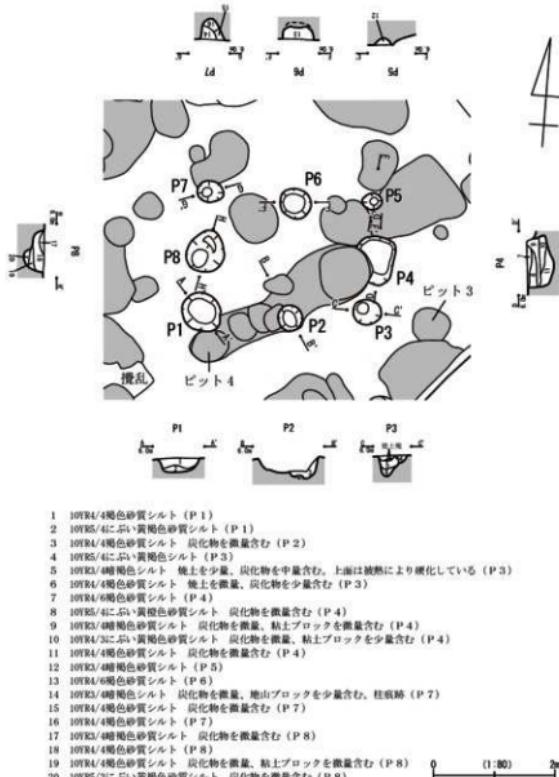
遺構時期：出土遺物が少なく時期の推定は困難であるが、建物方位や柱穴列1との切合の関係などを考慮し、遺構の時期は8世紀前後と判断した。

■掘立柱建物2（第12・34図、表3、写真26～29・112）

位置：調査区⑥のB12・13グリッドに位置する。複数の土坑・ピットに切られ、ピット4やその他の土坑・ピットを切っている。また、同軸方向に延びる柱穴列3と上端の一部が接している。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。北側に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は、ほぼ東西の正方位を向いている。

形態：東西方向、南北方向に合計8基の柱穴（P1～P8）が並ぶ2間×2間の小型の建物であるが、桁行・梁行の判別はできない。各柱穴は、おおむね平面楕円形や円形を呈し、P4のみ隅丸長方形となる。断面形は、U字状や回字状をしている。P7には柱痕跡が認められる。

規模：東西方向の柱間は1.3m、南北方向の柱間は0.9mを測り、床面積は5.4m²となる。各柱穴の規模にはばらつきがあり、長軸0.34～0.76m、短軸0.27～0.65m、深さ0.11～0.38mを



第12図 掘立柱建物2

測る。

土 層：合計 20 層に区分できる。褐色やにぶい黄褐色の砂質シルトを主体としている。P3 は上層に焼土塊が堆積している。P7 には柱痕跡が認められる（第 14 層）。P8 は 2 段に掘り込まれており、柱の抜き取りが行われた可能性がある。

出土遺物：各柱穴から少量の須恵器・土師器の破片が出土している。図化可能なものは、P4 から出土した須恵器のみである。

6 は、P4 から出土した須恵器の杯蓋である。体部は丸みを帯びるが、器高は低い。

遺構時期：出土遺物が少なく時期の推定は困難である。

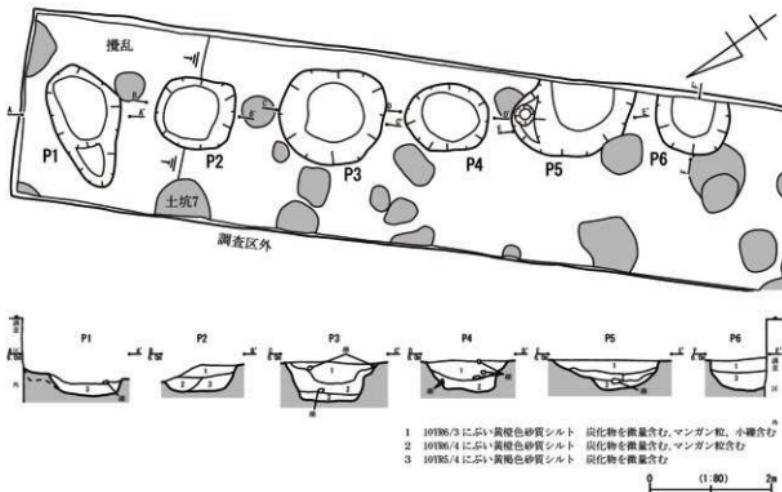
第 5 節 柱穴列

■柱穴列 1（第 13・34 図、表 3、写真 12・30～42・112）

位 置：調査区③の I5・6～K5・6 グリッドにおいて、一列に並ぶ 6 基の大型の土坑（P1～P6）を検出した。大型の掘立柱建物跡である可能性も考えられるが、調査区が狭く、対応する柱穴の有無を検討できないことから、本書では柱穴列として報告する。柱穴のうち P5 は他のビットに上端の一部を切られ、掘立柱建物 1 の P1 を切っている。P6 は他の土坑を切っている。また、P5・P6 の南東側は調査区外へ及んでいる。P1 の北側は調査区外にあたるため、北側へ列が続くかは判断できない。遺構確認面の高さは標高 5.9 m で、現地表面からは約 0.7 m 下に位置する。柱穴列の示す方位は N-35°-E を示す。

形 態：平面が隅丸方形や楕円形の土坑 6 基で構成されている。各柱穴の断面形は、おおむねやや外側に開く四字状をしている。底面は平坦で、急斜に立ち上がったのち、外側に開くものが主体である。

規 模：各柱穴の柱間は 1.9～2.3 m を測り、検出した範囲での列の全長は 10 m となる。柱穴



第 13 図 柱穴列 1

の規模は2種類の規格に分かれ、長軸1.69～2.07m、短軸1.16～1.54mを測る大型のものと、長軸1.28～1.36m、短軸1.08～1.20mを測るやや小さいものが交互に3基ずつ配置されている。深さは、削平を受けているP1は0.20m、それ以外は0.42～0.66mである。

土層：合計3層に区分できる。柱痕跡が確認できる柱穴ではなく、レンズ状堆積を基本としているものが多い。

出土遺物：各柱穴から須恵器・土師器の破片が出土し、ほかに金属製品などが出土している。図化しえなかったが、P3からは暗文土師器、P5からは板状の鉄製品が出土している。

7～10は須恵器である。7は杯蓋の破片で、外面の一部に回転ヘラケズリの痕跡が認められる。8～10は杯身で、8は底部をヘラ切り後、ナデ調整している。9・10は外側に踏ん張る高台を貼り付けている。

11～13は土師器である。11は高杯で、器壁は厚く、脚部は中空のつくりをしている。12・13は把手付壺の把手部分の破片で、13には甕外面のハケ調整が認められる。

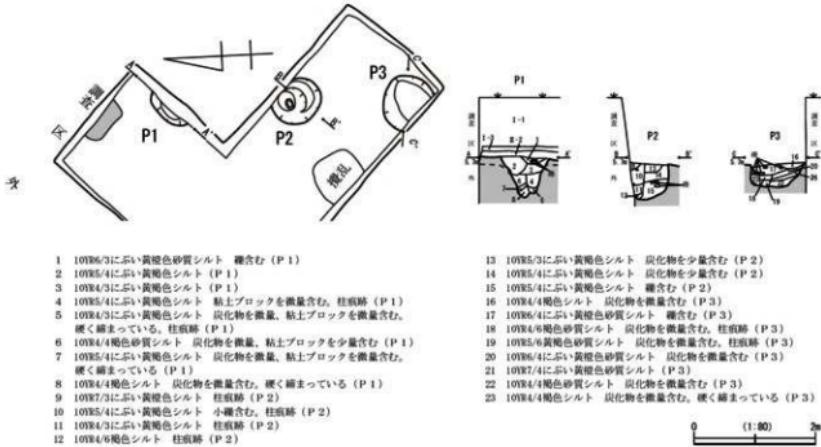
遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は8世紀代と判断した。

■柱穴列2（第14・34図、表3、写真43～48・112）

位置：調査区⑤のF1・G1グリッドに位置する。検出された柱穴は3基（P1～P3）で、いずれも遺構の一部が調査区外へ及んでおり、全形が確認できるものはない。P1の北側及びP3の南側は調査区外にあたるため、列がどの程度続くかは判断できない。また、東側の調査区外に対応する柱穴が存在すれば掘立柱建物跡となるが、今回の調査範囲だけでは判断できない。遺構確認面の高さは標高5.6mで、現地表面からは約1m下に位置する。柱穴列の示す方位は、ほぼ南北の正方位を向いている。

形態：平面円形の柱穴3基で構成されている。各柱穴の断面形は、四字状やV字状をしている。P1の底面は平坦で、他は湾曲しながら急斜に立ち上がっている。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。

規模：柱痕跡を基準とした柱間は1.9mを測り、検出した範囲での列の全長は3.8mとなる。柱穴の規模は、長軸0.85m前後、短軸0.75m前後を測る。深さは0.38～0.66mである。



第14図 柱穴列2

土層：合計 23 層に区分できる。褐色、黄褐色、黄橙色の砂質シルトを主体としている。P1 や P3 は、上部の柱痕跡や柱掘方を削りこんで別の土が堆積していることから、柱の切り取りなどが行われた可能性がある。

出土遺物：各柱穴から弥生土器・須恵器・土師器などが少量出土している。図化可能なものは、P3 から出土した弥生土器のみである。

14 は、P3 から出土した弥生土器の底部破片である。磨滅が著しく調整は不明で、器種の判別も困難である。

遺構時期：出土遺物が少なく時期の推定は困難である。

■柱穴列 3 (第 15・34 図、表 3、写真 49～52・113)

位置：調査区⑥の B12・13 グリッドに位置する。検出された柱穴は 5 基 (P1～P5) で、P1 や P5 は他の土坑やピットに切られ、P2 は他の土坑・ピットを切っている。P1 の西側及び P5 の東側は調査区外へ及んでいたため、列がどこまで続くかは判断できない。遺構確認面の高さは標高 5.8～5.9 m で、現地表面からは 0.7～0.8 m 下に位置する。柱穴列の示す方位は N-87°E を示す。

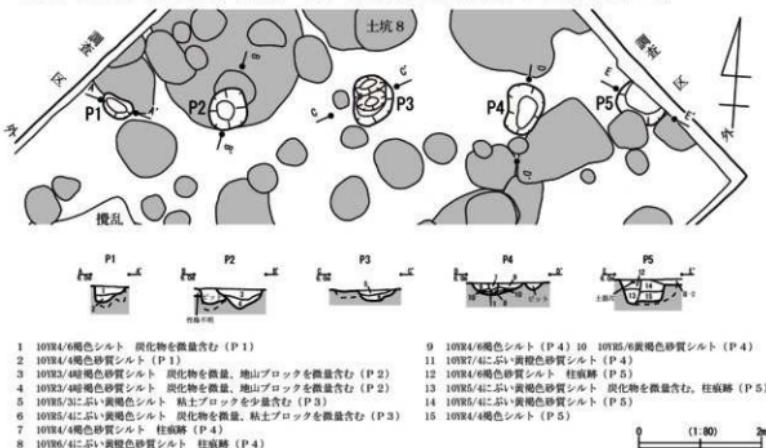
形態：平面円形や楕円形の柱穴 5 基で構成されている。各柱穴の断面形は、凹字状や U 字状をしている。P5 の底面は平坦で、その他は湾曲しながら緩やかに立ち上がっている。P4・P5 で柱痕跡を確認している。

規模：柱痕跡や柱穴中心部を基準とした柱間は 1.7～2.5 m を測り、検出した範囲での列の全長は 8.4 m となる。柱穴の規模は、長軸 0.54～0.82 m、短軸 0.62 m を測る。深さは 0.18～0.38 m である。

土層：合計 15 層に区分できる。暗褐色、褐色、黄褐色の砂質シルトを主体としている。

出土遺物：各柱穴から少量の須恵器・土師器の破片が出土している。土師器の破片数が多めで、須恵器は 3 点のみの出土である。

15 は、土師器の甕である。口縁部の小片で、体部は内外面ともハケ調整されている。



第 15 図 柱穴列 3

16は、土師器のイイダコ壺である。釣鐘形の吊手部分の破片である。

遺構時期：出土遺物が少なく時期の推定は困難である。

第6節 土坑・ピット

■土坑1（第16・34図、表3、写真53～55・113）

位置：調査区①のL13 グリッドに位置する。遺構の北西側と南東側は搅乱により大きく壊されている。北側は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 6.0 mで、現地表面から約 0.6 m 下に位置している。

形態：搅乱に大きく壊されているため、平面形は不明である。断面形も明確ではないが、浅い皿状と考えられる。底面は不均等な形状だが、おおむね平坦である。

規模：長軸、短軸ともに本来の規模は不明だが、検出された範囲での長軸は 2.03 m、短軸は 1.47 m を測る。深さは 0.26 m である。

土層：3 層に区分できる。黄褐色や黄橙色の砂質シルトを主体とし、底面付近から遺物が集中して出土している。

出土遺物：埋土中や底面付近から、須恵器・土師器や瓦片が出土している。

17は、須恵器杯蓋の摘み部分である。焼成不良のため表面は褐色をしている。

18は、須恵器の杯身である。ロクロ成形され、外側に踏ん張る高台を貼り付けている。

19は、須恵器の壺底部である。底部外面は、回転ヘラ切り後にナデ調整されている。

20は、土師器の高杯である。表面の磨減が著しく調整は不明瞭であるが、外面にユビオサエの痕跡が認められる。脚部は中空の作りをしている。

21は、土師器の鍋である。体部は丸みを持ち、口縁部は外側に開いている。体部の内外面はハケ調整されている。

22は、平瓦の破片である。凹面には布目压痕、端面にはケズリがみられ、凸面はナデ調整されている。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は8世紀代と判断した。

■土坑2（第17図、写真56～58）

位置：調査区①のK12 グリッドに位置する。遺構の大部分は溝1と重複して上部を削られ、南東側は搅乱により壊されている。遺構確認面の高さは標高 5.9 mで、現地表面から約 0.7 m 下に位置している。長軸方向を基準とした方位は N-28°-W を示す。

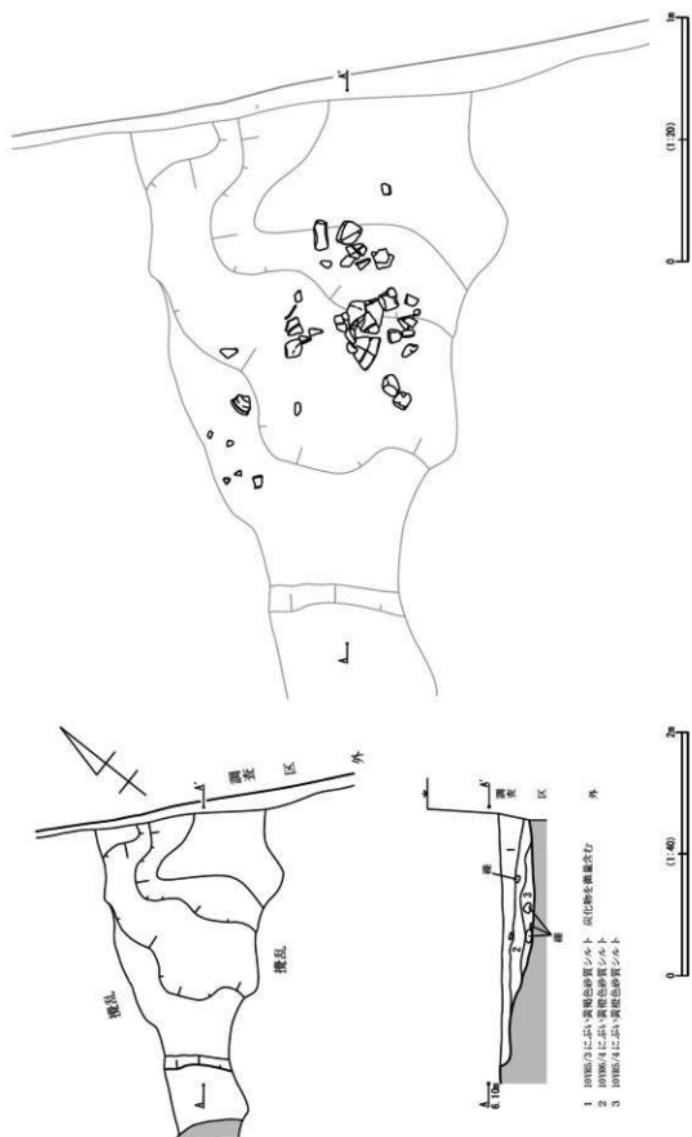
形態：搅乱に一部を壊されているものの、平面形は隅丸長方形と考えられる。断面形は浅い凹字状をしており、底面は平坦である。

規模：検出した範囲での長軸は 1.11 m、短軸は 0.88 m を測る。上部を溝1に削られているため、深さは 0.08 m と浅い。

土層：2 層に区分できる。土坑3・4 と類似した堆積を示し、底面には焼土ブロックを少量含む炭化物層が堆積している。

出土遺物：須恵器・土師器の小片が僅かに出土した。

遺構時期：遺物から時期を検討することは困難であるが、重複する溝1に切られていることから、遺構の時期は8世紀前後より古いと考えられる。



第16図 土坑1

■土坑3（第17図、写真59～61）

位 置：調査区①のK12グリッドに位置する。遺構の東半部は溝1と重複して上部を削られてい る。遺構確認面の高さは標高6.0mで、現地表面から約0.6m下に位置している。長軸方向を基準とした方位はN-70°-Eを示す。

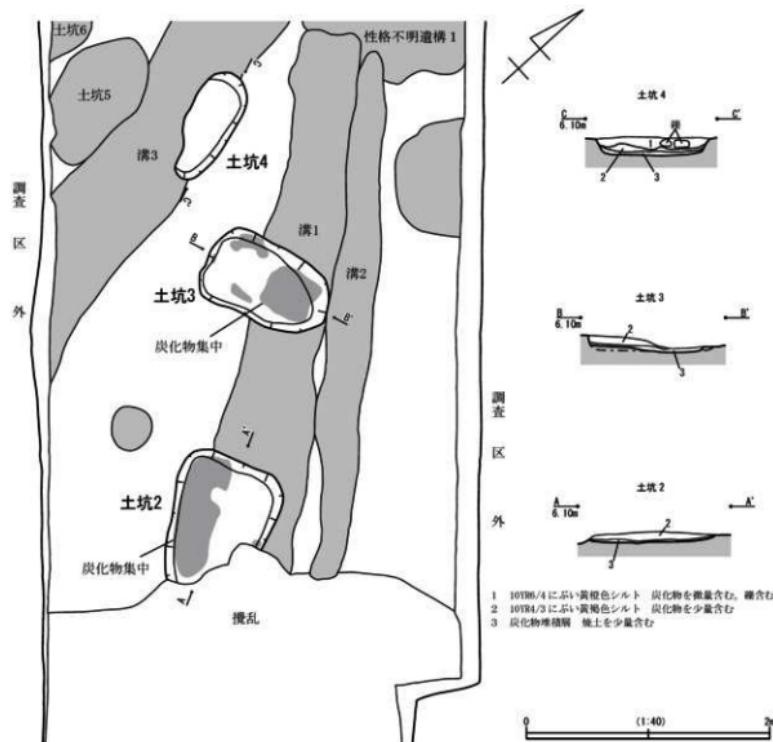
形 態：平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は浅い凹字状をしている。底面はおおむね平坦である。

規 模：長軸は1.08m、短軸は0.66mを測る。深さは0.08mと浅い。

土 層：2層に区分できる。土坑2・4と類似した堆積を示し、底面には焼土ブロックを少量含む炭化物層が堆積している。

出土遺物：なし。

遺構時期：出土遺物がないため時期の検討は困難であるが、重複する溝1に切られていることから、遺構の時期は8世紀前後より古いと考えられる。



第17図 土坑2・3・4

■土坑4（第17・34図、表3、写真113）

位 置：調査区①のK12グリッドに位置する。遺構の大部分は溝3に切られて失われている。遺構確認面の高さは標高5.9mで、現地表面から約0.7m下に位置している。失われている範囲が大きいため軸方向は明確ではないが、おおむね土坑3と似た方向を示す。

形 態：平面の全体形は明確ではないが、土坑2・3と同様に隅丸長方形と考えられる。断面形は浅い凹字状をしており、底面は平坦である。

規 模：検出した範囲での長軸は0.94m、短軸は0.41mを測る。深さは0.15mと浅い。

土 層：3層に区分できる。土坑2・3と類似した堆積を示し、底面全体に焼土ブロックを少量含む炭化物層が堆積していた。

出土遺物：土師器の破片数点が出土している。

23は、土師器の高杯脚部の破片である。中空の作りをしており、内面の中心に製作時の棒状工具の痕跡が残る。

遺構時期：出土遺物からの時期の推定は困難であるが、遺構の特徴が土坑2・3と類似することから、これらの遺構の時期に近いものと考えられる。

■土坑5（第18・34図、表3、写真65・66・113）

位 置：調査区①のK12グリッドに位置する。溝3を切っている。遺構の南端は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.9mで、現地表面から約0.7m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-6°-Wを示す。

形 態：平面形は梢円形を呈し、断面形は皿状をしている。底面はゆるやかに湾曲し、外側へ広がりながら立ち上がる。

規 模：長軸は1.15m、短軸は0.68mを測る。深さは0.15mである。

土 層：2層に区分できる。第1層は灰黄褐色の砂質シルト、第2層はにぶい黄褐色の砂質シルトを主体としている。

出土遺物：須恵器・土師器の破片が少量出土している。

24は、土師器の高杯である。脚部は中空で、内面には成形時のシボリの痕跡が認められる。

遺構時期：出土遺物からの時期の推定は困難である。

■土坑6（第18図、写真67・68）

位 置：調査区①のK11・12グリッドに位置する。調査区の境に位置し、南半部は調査区外へ及んでいる。他のピットに上端の一部を切られている。遺構確認面の高さは標高5.9mで、現地表面から約0.7m下に位置する。

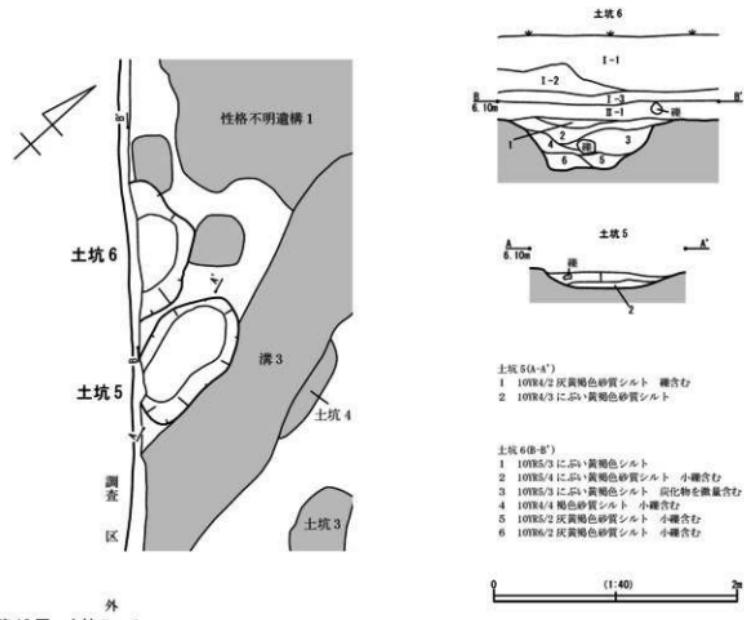
形 態：南半部が調査区外へ及んでいるため平面形は不明である。断面形は逆台形状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて立ち上がる。

規 模：長軸は1.11m、検出した範囲での短軸は0.47mを測る。深さは0.42mである。

土 層：6層に区分できる。褐色や黄褐色の砂質シルトを主体としている。

出土遺物：図化できるものはないが、須恵器・土師器の破片や台石などが出土している。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は8世紀代と判断した。



第18図 土坑5・6

■土坑7（第19・34図、表3、写真69・70・113・114）

位 置：調査区③のJ5・6グリッドに位置する。調査区の境に位置し、西半部は調査区外へ及んでいる。遺構の北側は擾乱により上端を削られている。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。

形 態：西半部が調査区外へ及んでいるものの、平面形は円形か梢円形を呈すると推測される。断面形はU字状をしている。底面は緩やかに湾曲し、外側へ向けてやや急斜に立ち上がる。断面の観察において柱痕跡を確認したことから建物等の柱穴であったと考えられるが、今回の調査範囲では対応する柱穴等は確認できなかった。そのため本書では土坑として報告する。

規 模：長軸は0.91m、検出した範囲での短軸は0.62mを測る。深さは0.40mである。

土 層：4層に区分できる。このうち第2・3層が柱痕跡にあたる。柱痕跡、柱掘方とともに褐色やにぶい黄褐色シルトを主体としている。

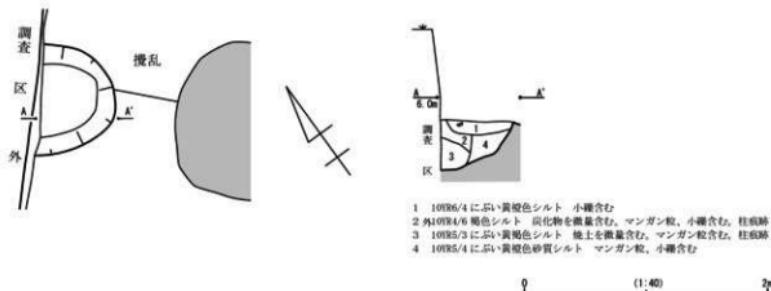
出土遺物：少量の須恵器や土師器が出土している。

25は、須恵器の壺である。外側に開く広口の壺口縁部破片である。

26は、土師器の高杯である。杯部の破片で、内面に放射状にめぐる暗文が施されている。口縁端部は玉縁状になっている。

27は、土師器の製塙器である。体部の器壁は厚く、口縁は僅かに内湾している。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は8世紀代と判断した。



第19図 土坑 8

■土坑 8 (第20・34図、表3、写真71・72・114)

位 置：調査区⑥のB12グリッドに位置する。性格不明遺構3を切っている。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。

形 態：平面形はやや不整な方形で、断面形は回字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けてやや急斜に立ち上がる。

規 模：長軸は1.01m、短軸は0.89mを測る。深さは0.42mである。

土 層：3層に区分できる。黄褐色や褐色の砂質シルトを主体としている。

出土遺物：須恵器や土師器のほか、焼成粘土塊などが出土している。炭化しえなかつたが、土師器にはイイダコ壺破片がある。土師器の破片数が多めで、須恵器は2点のみの出土である。

28は、須恵器の高杯である。脚部の破片で、脚端部は折り返して面を作っている。

29・30は、土師器の甕である。いずれも断面が「く」字形に折れるが、30は屈曲が緩やかである。口縁端部は、29は平坦な面をつくり、30は丸くおさめている。

31は、土師器の鉢である。口縁部は内湾し、端部は丸くおさめている。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は8世紀代と判断した。

■土坑 9 (第21・34図、表3、写真73・74・114)

位 置：調査区⑥のB12グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。

形 態：平面形は不整な円形で、断面形は回字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて急斜に立ち上がる。

規 模：長軸は1.00m、短軸は0.90mを測る。深さは0.48mである。

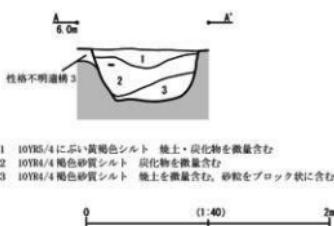
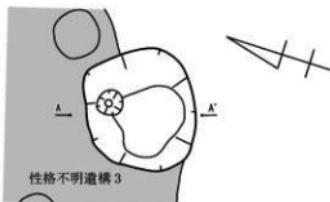
土 層：3層に区分できる。粘土ブロックの混じる暗褐色や黄褐色の砂質シルトを主体としている。

出土遺物：須恵器・土師器の破片が少量出土している。

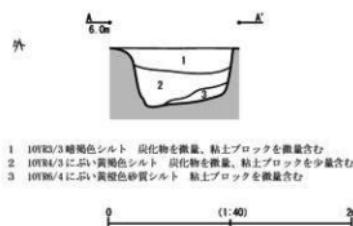
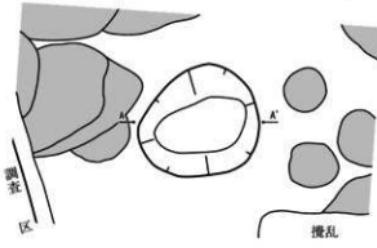
32は、須恵器の甕である。口縁部の小片で、端部はやや肥厚し面を作っている。

33は、須恵器の甕である。丸みを帯びた小ぶりの体部に沈線がめぐり、底部付近は手持ちヘラケズリされている。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は7世紀代と判断した。



第20図 土坑8



第21図 土坑9

■ピット1（第22・35図、表3、写真75・76・114）

位 置：調査区①のJ11グリッドに位置する。重複する性格不明遺構1や構状遺構を切っている。遺構確認面の高さは標高5.9mで、現地表面から約0.7m下に位置する。

形 態：平面形は円形で、断面形はV字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて急斜に立ち上がる。

規 模：直径は約0.7m、深さは0.27mを測る。

土 層：3層に区分できる。褐色や黄褐色の砂質シルトを主体としている。

出土遺物：須恵器・土師器の破片が少量出土している。

34は、須恵器の高杯蓋である。内面に浅いかえりを持つ。

遺構時期：出土した遺物に8世紀代の須恵器鉢などが含まれることや、性格不明遺構1を切っていることから、遺構の時期は8世紀後半頃と判断した。出土遺物34は混入品と考えられる。

■ピット2（第23・35図、表3、写真77・78・114）

位 置：調査区④のJ2グリッドに位置する。重複する竪穴建物1を切っている。遺構確認面の高さは標高5.7mで、現地表面から約0.9m下に位置する。

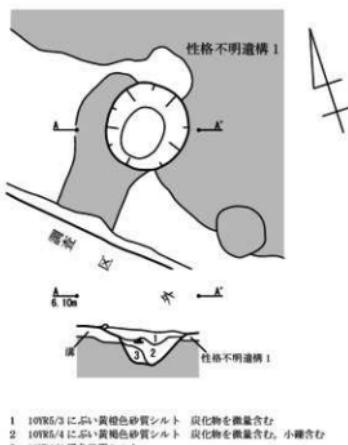
形 態：平面形は梢円形を呈する。断面形はU字状で、底面は緩やかに湾曲し、外側へ向けて開きながら立ち上がる。

規 模：長軸は0.40m、短軸は0.34m、深さは0.16mを測る。

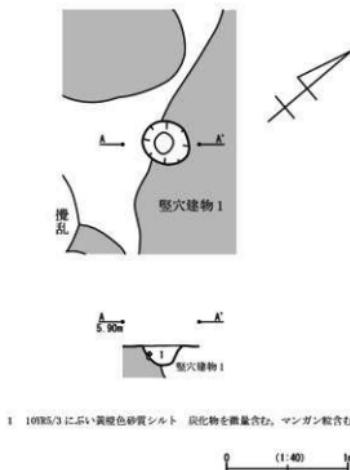
土 層：にぶい黄褐色砂質シルトを主体とする単層である。炭化物を微量に含んでいる。

出土遺物：円筒埴輪片のほか、土師器の小片が出土している。

35は、円筒埴輪の突帶部破片である。突帶の断面は台形を呈する。磨滅が著しく調整は不明である。
遺構時期：出土遺物が少なく遺構時期は不明と言わざるを得ないが、堅穴建物1を切っていることから7世紀以降と考えられ、出土遺物35は混入品と考えられる。



第22図 ピット1



第23図 ピット2

■ピット3（第24・35図、表3、写真79～82・114）

位 置：調査区⑥のB13・C13グリッドに位置する。重複する土坑に上端の一部を切られている。
遺構確認面の高さは標高5.9mで、現地表面から約0.7m下に位置する。

形 態：平面形は不整な円形を呈する。粘土で根固めされた柱痕跡を伴う柱穴だが、調査区の境に近く、対応する柱穴が検討できないため、本書ではピットとして報告する。断面形は、柱部分がやや深く窪む回字状をしており、柱の当たり部分には粘土を充填して根固めをしている。柱部分以外の底面は平坦で、外側へ向けて急斜に立ち上がる。

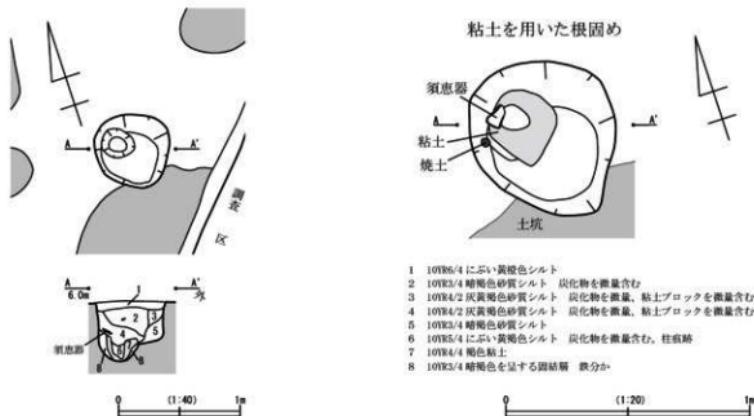
規 模：直径は約0.6mを測り、根固め上部までの深さは0.34m、柱部分の窪み底面までの深さは0.49mを測る。

土 層：8層に区分できる。第6層は柱痕跡、第1層から第5層までは、柱が切り取られた後の堆積層と考えられる。第7層は褐色を呈する粘土で、柱部分の窪み全体に充填されている。第8層は、ピット壁面が暗褐色に硬化したもので、充填された粘土と接触していた範囲の壁面全体が硬化している。

出土遺物：須恵器の杯や甕、土師器の甕やイイダコ壺が出土している。

36は、須恵器の杯である。受け部の立ち上がりが退化して低くなっている。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は7世紀前半と判断した。



第24図 ピット3

■ピット4（第25・35図、表4、写真83・84・114・115）

位 置：調査区⑥のC12グリッドに位置する。重複する溝状遺構に切られている。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。

形 態：平面形は梢円形を呈する。断面形はU字状をしている。底面はおおむね平坦で、外側へ向けて緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

規 模：長軸は0.64m、短軸は0.51m、深さは0.36mを測る。

土 層：暗褐色砂質シルトを主体とする単層である。炭化物を微量に含んでいる。

出土遺物：須恵器の高杯や土師器の壺・瓶などのほか、焼成粘土塊が出土している。

37は、須恵器の高杯である。口縁部の破片で、杯部との境に沈線が一条巡っている。

38は、土師器の壺である。把手部分の破片で、牛角状につくられている

遺構時期：出土した遺物は少ないものの、遺構の時期は古墳時代後期前半頃と判断した。

■ピット5（第26図、写真85・86）

位 置：調査区⑥のA13・B13グリッドに位置する。上端の一部を性格不明遺構3に切られている。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。

形 態：平面形は梢円形を呈する。柱痕跡を伴う柱穴だが、調査区の境に近く、対応する柱穴が検討できないため、本書ではピットとして報告する。断面形はU字状で、底面は緩やかに湾曲し、外側へ向けて急斜に立ち上がる。

規 模：長軸は0.39m、短軸は0.31m、深さは0.27mを測る。

土 層：4層に区分できる。第1・2層はにぶい黄褐色のシルトを主体とする柱痕跡で、第3・4層は暗褐色砂質シルトを主体とする柱掘方である。

出土遺物：土師器イイダコ壺の破片を含む小片が出土している。

遺構時期：出土遺物からの時期の推定は困難であるが、性格不明遺構3に切られていることから、8世紀前半より古いと考えられる。

■ピット6（第27図、写真87・88）

位置：調査区⑥のB12グリッドに位置する。重複する大型の性格不明遺構を切っている。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。

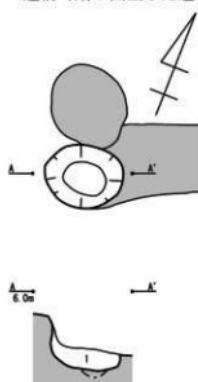
形態：平面形は梢円形を呈する。断面形は浅いU字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

規模：長軸は0.40m、短軸は0.32m、深さは0.12mを測る。

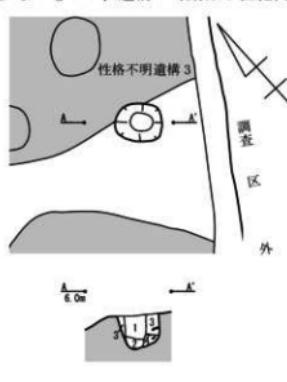
土層：暗褐色シルトを主体とする単層である。炭化物を微量に含んでいる。

出土遺物：小型甕を含む土師器の破片が出土している。

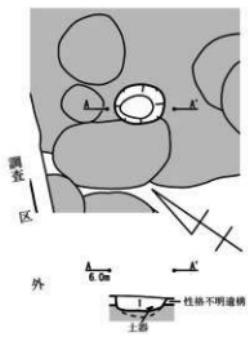
遺構時期：出土した遺物は少ないものの、遺構の時期は8世紀代と考えられる。



第25図 ピット4



第26図 ピット5



第27図 ピット6

第7節 溝状遺構

■溝1（第28・35図、表4、写真89・90・115）

位置：調査区①のK12グリッドに位置する。性格不明遺構1に切られ、隣接する溝2や重複する土坑2・3を切っている。遺構の南東側は攪乱によって壊されている。遺構確認面の高さは標高6.0mで、現地表面から約0.6m下に位置する。主軸方位はN-35°-Wを示す。

形態：全体の平面形は不明だが、浅い溝状を呈する。断面形はおおむね皿状をしており、底面は平坦である。

規模：検出した範囲での長さは4.62m、最大幅は1.02mを測る。深さは0.09mと浅い。

土層：にぶい黄橙色の砂質シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器や土師器の小片が出土している。

39は、須恵器の杯蓋である。器高は低く、天井部は平坦である。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は8世紀前後と判断した。

■溝2（第28図、写真89・90）

位置：調査区①のK12・13グリッドに位置する。隣接する溝1や性格不明遺構1に切られている。遺構の南東側は擾乱によって壊されている。遺構確認面の高さは標高6.0mで、現地表面から約0.6m下に位置する。主軸方位はN43°-Wを示す。

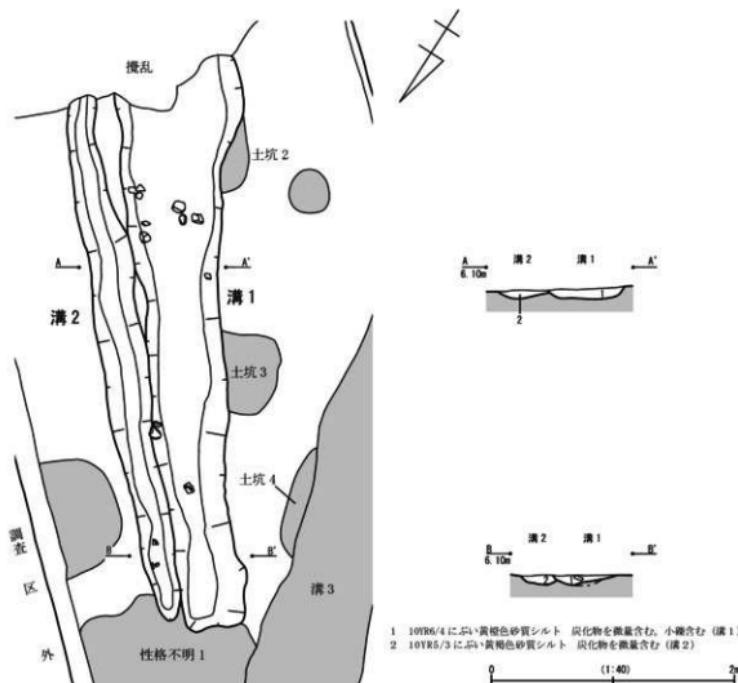
形態：全体の平面形は不明だが、浅く細い溝状を呈する。断面形はおおむねU字状をしており、底面は緩やかに湾曲している。

規模：検出した範囲での長さは4.32m、最大幅は0.38mを測る。深さは0.08mと浅い。

土層：にぶい黄褐色の砂質シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器・土師器の小片が少量出土している。

遺構時期：出土遺物からの時期の推定は困難であるが、一部重複しながら並行している溝1に近い時期と考えられる。



第28図 溝1・2

■溝3（第29図、写真91・92）

位置：調査区①のJ 12・K12 グリッドに位置する。重複する土坑5に切られ、土坑4を切っている。また、北西側の性格不明遺構1とも一部重複しているが、新旧関係は不明瞭で、一体となって何らかの施設を構成していた可能性も考えられる。遺構の南側は調査区外へと続いている。遺構確認面の高さは標高 5.9 m で、現地表面から約 0.7 m 下に位置する。主軸方位は N-13°-W を示す。

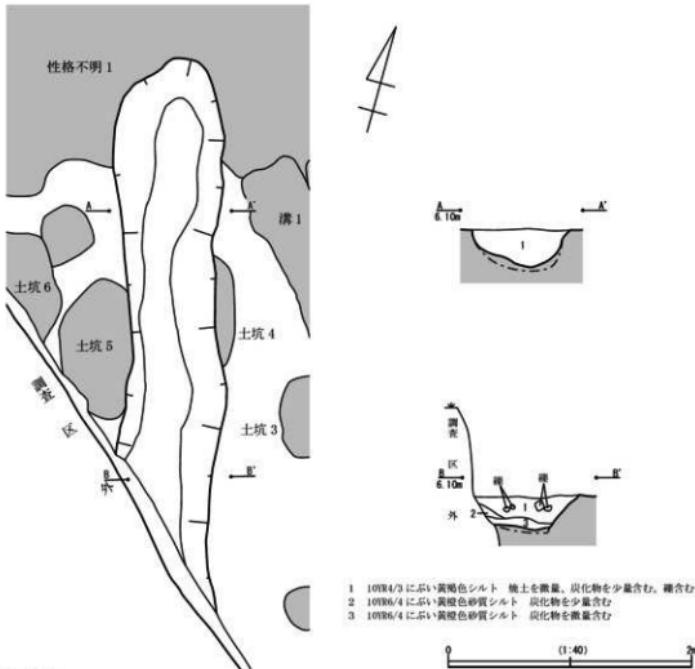
形態：全体の平面形は不明だが、直線的に延びる溝状を呈する。断面形はおおむねU字状をしているが、底面は場所によって凹凸があり不均等である。

規模：検出した範囲での長さは 4.18 m、最大幅は 0.87 m を測る。深さは 0.31 m である。

土層：最大で 3 層に区分できる。にぶい黄褐色の砂質シルトを主体としている。

出土遺物：須恵器・土師器の小片のほか、平瓦破片や珪化木が出土している。

遺構時期：出土遺物からの時期の推定は困難である。土坑4を切っていることから、8世紀前後の時期よりは新しいと考えられる。



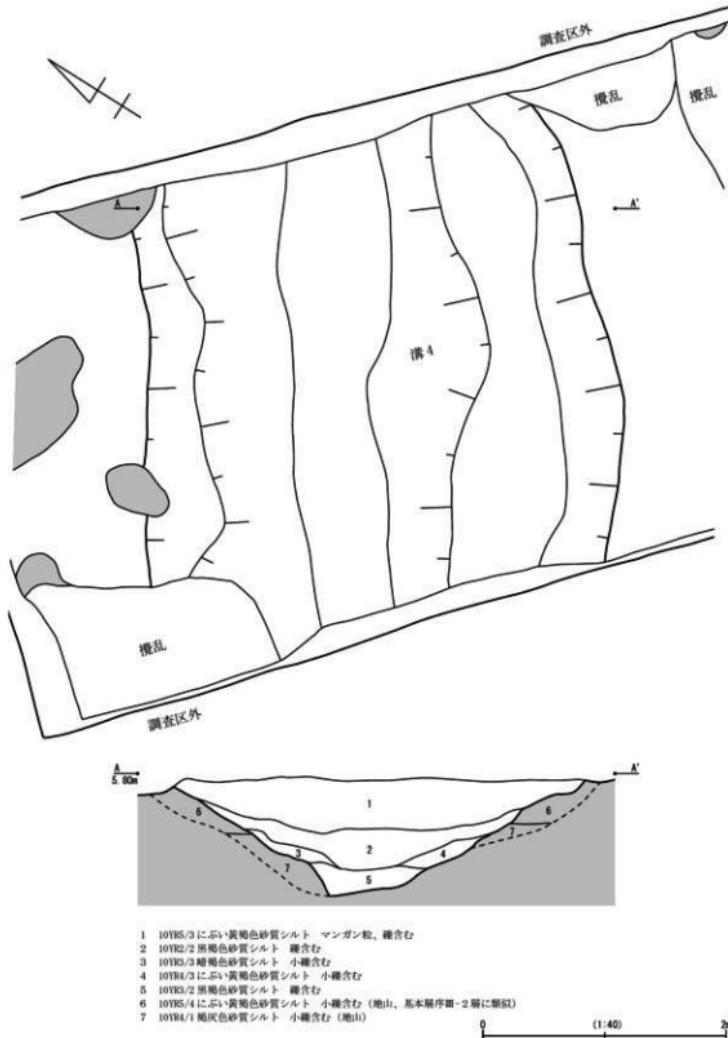
第29図 溝3

■溝4（第30・35図、表4、写真93・94・115・116）

位置：調査区②のH7・8 グリッドに位置する。重複する土坑やピットに切られ、上端の一部は擾乱に壊されている。溝の両端とも調査区外へと続いている。遺構確認面の高さは標高 5.8 m で、現

地表面から約 0.8 m 下に位置する。主軸方位は N-54°-E を示す。

形態：全体の平面形は不明だが、検出した範囲では直線的に伸びる大型の溝である。断面形はおおむね逆台形状であるが、壁面はテラス状の平坦部分がみられるなど不均等である。底面はおおむね平坦である。



第30図 溝4

規 模：検出した範囲での長さは4.00 m、最大幅は3.92 mを測る。深さは0.95 mである。

土 層：5層に区分できる。第1層は人為的に溝を埋めた際の整地層と考えられ、それ以下は自然埋没と考えられる。第2層と第5層は黒褐色を呈する砂質シルトで、埋没の過程において低湿な溝の底部として一定期間機能していたものと考えられる。

発掘調査では、第2層までを上層、第3層以下を下層として掘削を行った。

出土遺物：下層からは弥生土器の壺・甕・高杯などが出土し、上層からは須恵器の杯蓋や杯身・皿・高杯・甕、土師器の甕・瓶・その他小片・瓦、鉄滓などが出土している。

40～52は、下層から出土した弥生土器である。40・41は壺口縁部で、端面に擬回線が施されている。42は甕で、頸部は断面が「く」字状に曲がり肩部外面に僅かにハケの痕跡が認められる。43～48は壺または甕の底部破片で、いずれも磨滅が著しく調整は不明なもの、45の底部外面にはハケ調整が施され、46には木葉痕が認められる。49～52は高杯脚部で、いずれも中空のつくりをしており、51には杯部との接合部分に円盤充填の痕跡が明瞭に認められる。

53～60は、上層から出土した遺物である。53～58は須恵器で、53・54は杯蓋、55・56は杯身57は皿、58は高杯である。54には頂部の外面にミガキの痕跡がわずかに認められ、いわゆる稜楕形の杯身の蓋と考えられる。55の外面には自然釉が認められる。56にはやや背の高い高台が付く。57は、全体的にやや厚手のつくりをしている。58は、やや径の細い中空の脚が接続していたことがわかる。

59は、土師器の瓶である。口縁端部は面をつくり、内側にわずかに張り出している。被熱のため全体的に変色している。

60は、平瓦の小片である。薄手のつくりで、凹面にはわずかに布目压痕が認められ、端面にはケズリ、凸面にはナデ調整が確認できる。

遺構時期：出土した遺物から、弥生時代後期頃に下層が埋没し、8世紀前半頃に上層が埋められたものと考えられる。

第8節 その他の遺構

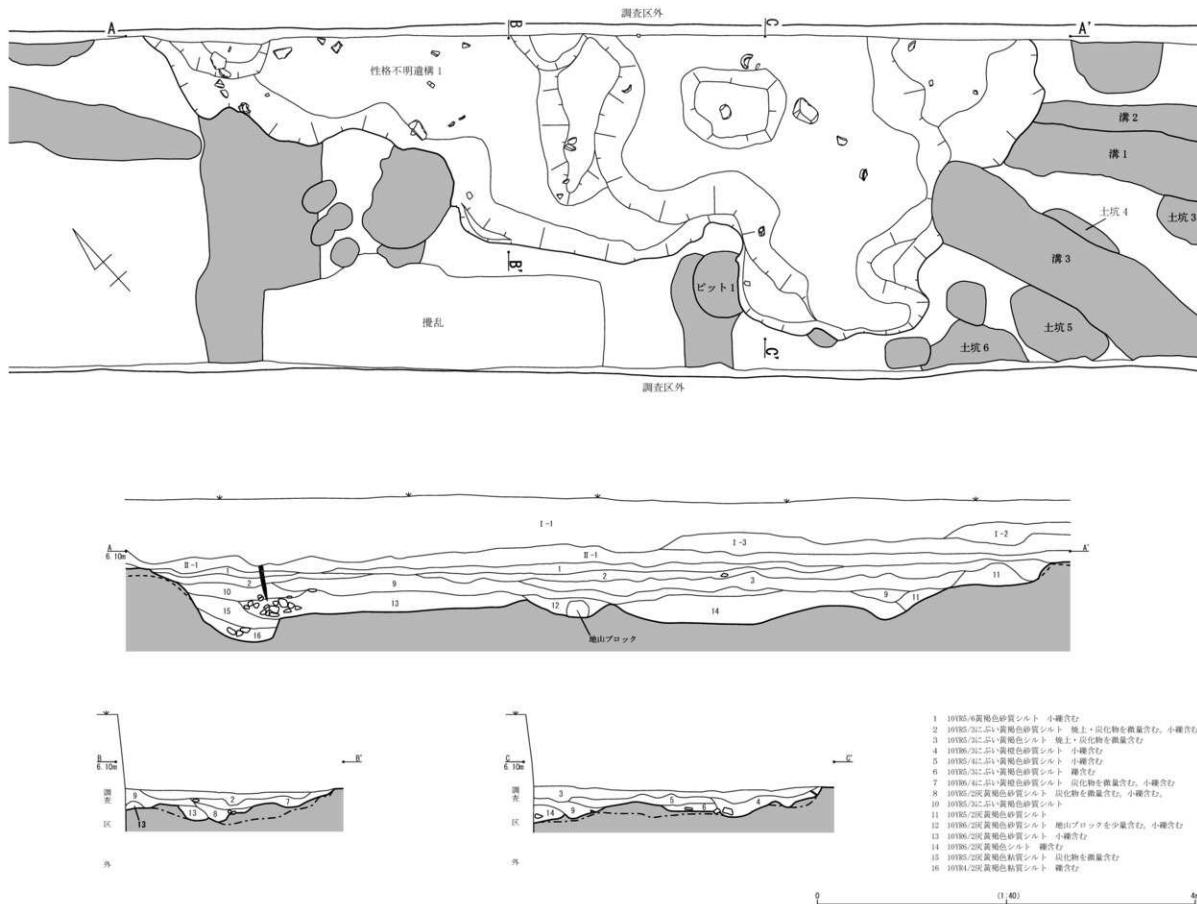
■性格不明遺構1（第31・35・36図、表4・5、写真13・95～99・116～119）

位 置：調査区①のI11・12～K11・12グリッドに位置する。ピット1やその他の土坑・ピットに切られ、溝1・2や北西にある溝を切っている。また、溝3と部分的に重複するが、土層からは明確な新旧関係は把握できず、溝3と一体となって何らかの施設として機能していた可能性も考えられる。遺構の北側は調査区外へ及んでおり全容は不明である。遺構確認面の高さは標高5.9～6.0mで、現地表面から0.6～0.7m下に位置する。

形 態：遺構の北側が調査区外へ及んでいるため全体の平面形は不明である。検出範囲での上端の形状は歪みが大きく不整形である。断面形は、底面の凹凸が激しく歪であるものの、おおむね皿状をしている。

規 模：検出した範囲での長軸は9.38 m、短軸は3.21 mを測る。深さは南東側と北西側で若干異なり、南東側は0.63 m、北西側は0.48 mを測る。ほかに、テラス状の高まりや底面より深くなる窪みなどが部分的に認められ、複雑な凹凸がある。

土 層：16層に区分できる。このうち第1層から第3層は、検出範囲の大部分で確認でき、埋没の最終段階における整地層と考えられる。一方、第4層以下の堆積層は広範囲に広がらず、遺構内の狭い範囲に分散して分布している状況である。全体の傾向としては、調査区外となる北寄りから埋没が進み、南側へ向けて埋まっていたものと考えられる。



第31図 性格不明遺構 1

出土遺物：今回調査の中で最も多くの遺物が出土している。須恵器・土師器が中心で、ほかに弥生土器・瓦・石器・椀形浮などが僅かに含まれる。須恵器には志方窯跡群（加古川市志方町）の製品が多く含まれている。

61～64は、須恵器の杯蓋である。61は内面に浅いかえりを持つ。63は、内面が摩擦により平滑となつており、墨が付着していた痕跡がみられることから、硯として転用された可能性がある。

65は、須恵器の壺蓋である。内面に浅いかえりを持つ。

66～74は、須恵器の杯身である。66～68は杯A、69～73は杯B、74はいわゆる稜挽形の杯Lである。66の内外面には火摺が認められる。67の底面はヘラ切り後ナデ調整されている。68は、見込みに漆が付着しており、いわゆる漆パレットとして利用されたものと考えられる。71は、使用の結果内面が平滑になっている。見込みの中央付近には線刻が認められる。72は、各部が丁寧に作られた良質の須恵器である。内面には自然釉が付着している。74は、破片のため明確な稜は確認できないものの、丁寧に作られた背の高い高台を持ち、内面は使用の結果器面が平滑になっている。

75は須恵器の皿、76は鉢である。ともによく焼き縮まつていて堅緻である。

77は、須恵器の高杯である。脚部の内面に製作時の絞り目が認められる。

78は、須恵器の甕破片である。外面に上下2条の沈線と、その内部に櫛描き波状文が施されている。

79は、須恵器の壺頸部の破片である。

80～86は、土師器である。80・81は椀で、両者とも磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、80の外面には僅かにミガキの痕跡が認められる。82・83は高杯で、83の脚部外表面は断面多角形になるよう整形されている。84・85は甕で、いずれも把手部分の破片である。84の把手下面全体に煤が付着している。86は鍋で、使用のため表面の大部分が剥離しているが、口縁の内側に幅の広いハケが僅かに確認できる。

87は、平瓦の破片である。二次的に被熱しているため調整は不明瞭であるが、凹面に布目压痕、凸面に斜格子叩きが確認できる。

88は、サヌカイト製の削器である。右側縁を中心に、腹面側から入念な二次加工が施されている。背面の数か所に使用時の擦れによる光沢や磨滅がみられる。肉眼観察の所見から、石材は金山産（香川県坂出市）と推測される。

遺構時期：さまざまな時期の遺物が出土しているが、遺構の時期は遺物の大部分を占める8世紀中頃から後半の時期と判断した。

■性格不明遺構2（第32・37図、表5、写真100・101・118・119）

位置：調査区④のH3・4グリッドに位置する。複数のピットに切られ、北西側の遺構上端は擾乱に壊されている。遺構の北側・南側ともに調査区外へ及んでおり全容は不明である。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。

形状：遺構の両端が調査区外へ及んでいるため全体の平面形は不明である。断面形は浅い凹字状を呈し、底面はおおむね平坦である。

規模：検出された範囲での長軸は4.53m、短軸は3.06mを測る。深さは0.17mを測る。

土層：にぶい黄褐色砂質シルトを主体とする単層である。

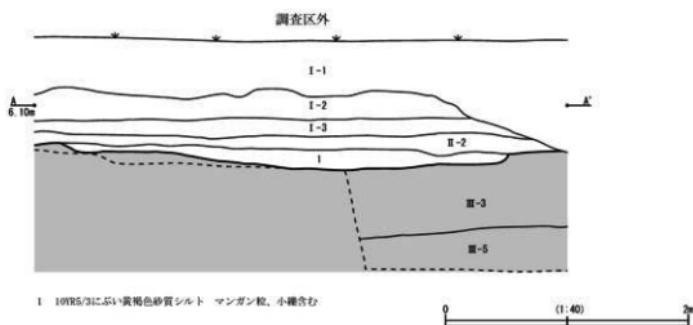
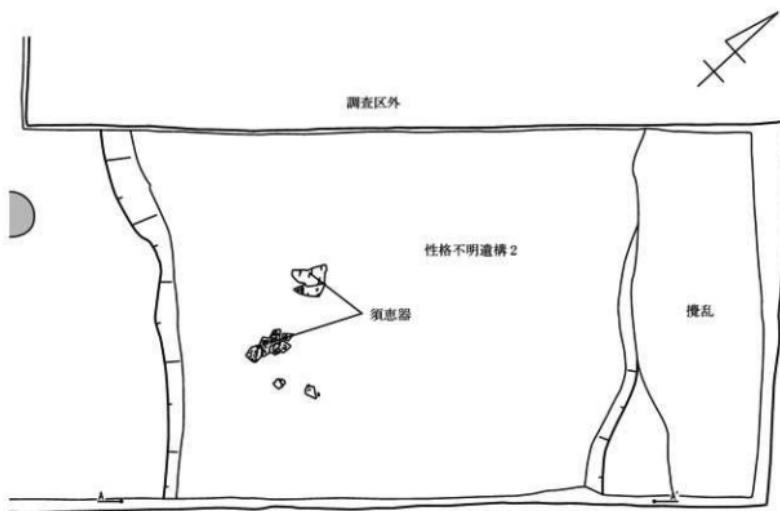
出土遺物：遺構内の南寄りで須恵器甕の底部が割れた状態で出土したほか、須恵器杯、土師器小片などが出土した。

89は、須恵器の甕である。外面は平行叩き後に板状工具により調整されカキメ状になっている。

内面は当て具による同心円文がみられる。

90は、土師器の甕である。把手部分の破片で、内面側には把手を貼りつけた際の押圧によるユビオサエの痕跡がみられる。

遺構時期：出土遺物からの時期の推定は困難である。



第32図 性格不明遺構 2

■性格不明遺構3（第33・37図、表5、写真102・103・119）

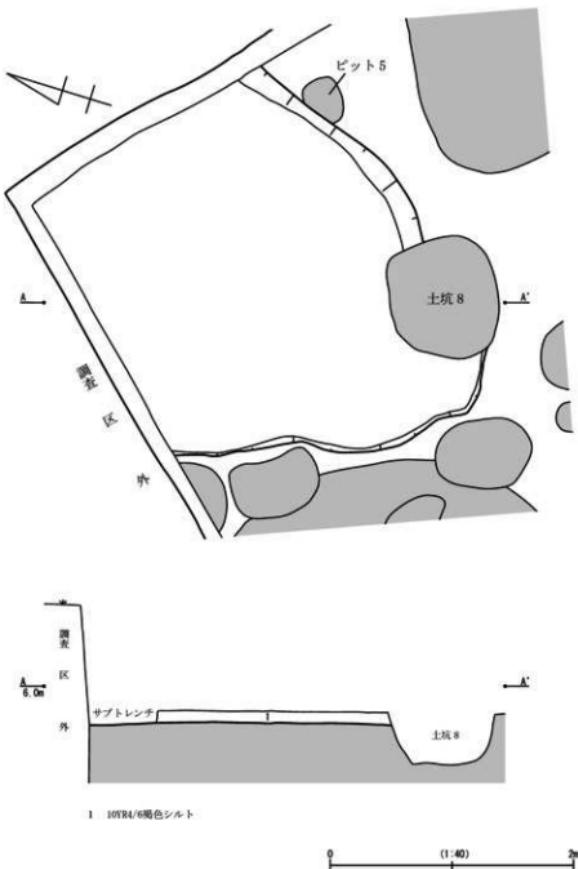
位 置：調査区⑥のA12・13～B12・13グリッドに位置する。土坑8や複数のビットに切られ、ビット5を切っている。遺構の北側は調査区外へ及んでおり、全容は不明である。遺構確認面の高さは標高5.8mで、現地表面から約0.8m下に位置する。

形 態：遺構の北側が調査区外へ及んでいるため全体の平面形は不明である。断面形は浅い回字状を呈し、底面は平坦である。

規 模：検出された範囲での長軸は3.96m、短軸は3.26mを測る。深さは0.10mを測る。

土 層：褐色シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器・土師器が少量出土した。



第33図 性格不明遺構3

91は、須恵器の杯身である。薄手の受け部を持つ。

92は、須恵器の鉢である。屈曲部の外面に3条の凹線が巡っている。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

第9節 包含層・表土

本章第2節で述べたとおり、今回の調査地は第Ⅰ層とした表土・擾乱層や旧耕作土・床土層が厚く堆積しており、その下位に2層に分かれる遺物包含層（第Ⅱ層）が確認されている。各包含層からは、弥生時代～中世にかけての遺物が混在した状態で出土しており、第Ⅰ層からも若干の遺物が出土している。

本節では、これら第Ⅰ・Ⅱ層出土の遺物のうち、主要なものを選定して報告する。（第37図、表5、写真119）。

93は、弥生土器の甕底部である。外面に煤が付着している。

94は、円筒埴輪の破片である。器壁は薄く、突出の低い突帯が貼り付けられている。外面に僅かにハケの痕跡が認められる。

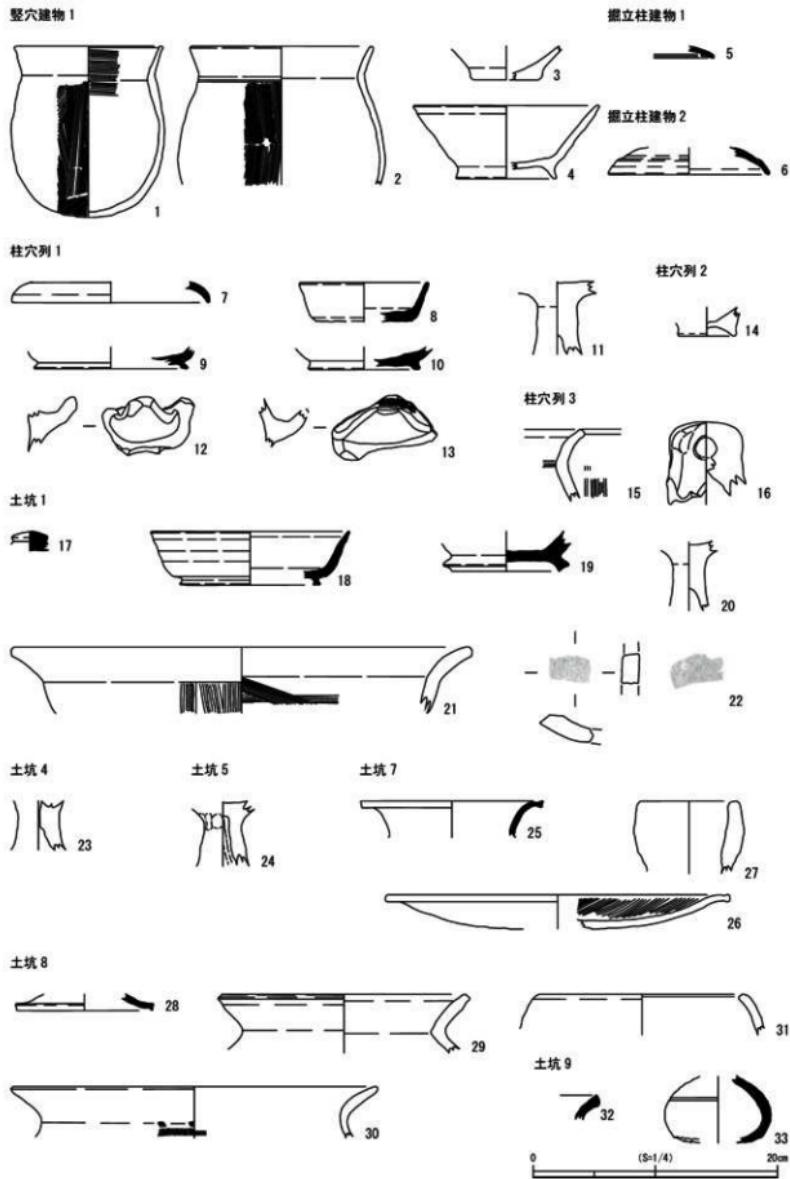
95～105は須恵器である。95は高杯の脚部、96は平瓶とみられる頸部破片、97は穿孔部直上に沈線が巡る題、98は壺の脚台部である。いずれも飛鳥時代頃の製品と考えられる。

99～101は杯である。99は、高台内を除いて全体的に自然釉が付着し、見込み部は特に顕著である。100は、厚手の底部に粗雑な高台を貼り付けている。101は、体部側面に撥形の耳を持ついわゆる双耳碗で、耳の端面はヘラで削り整形している。高台の有無に差があるが、志方窯跡群の投松6号窯に類似品があり、猿投窯系の外來器種とされている。102は皿の口縁部、103は高台を持つ壺である。これらは8世紀代の製品と考えられる。

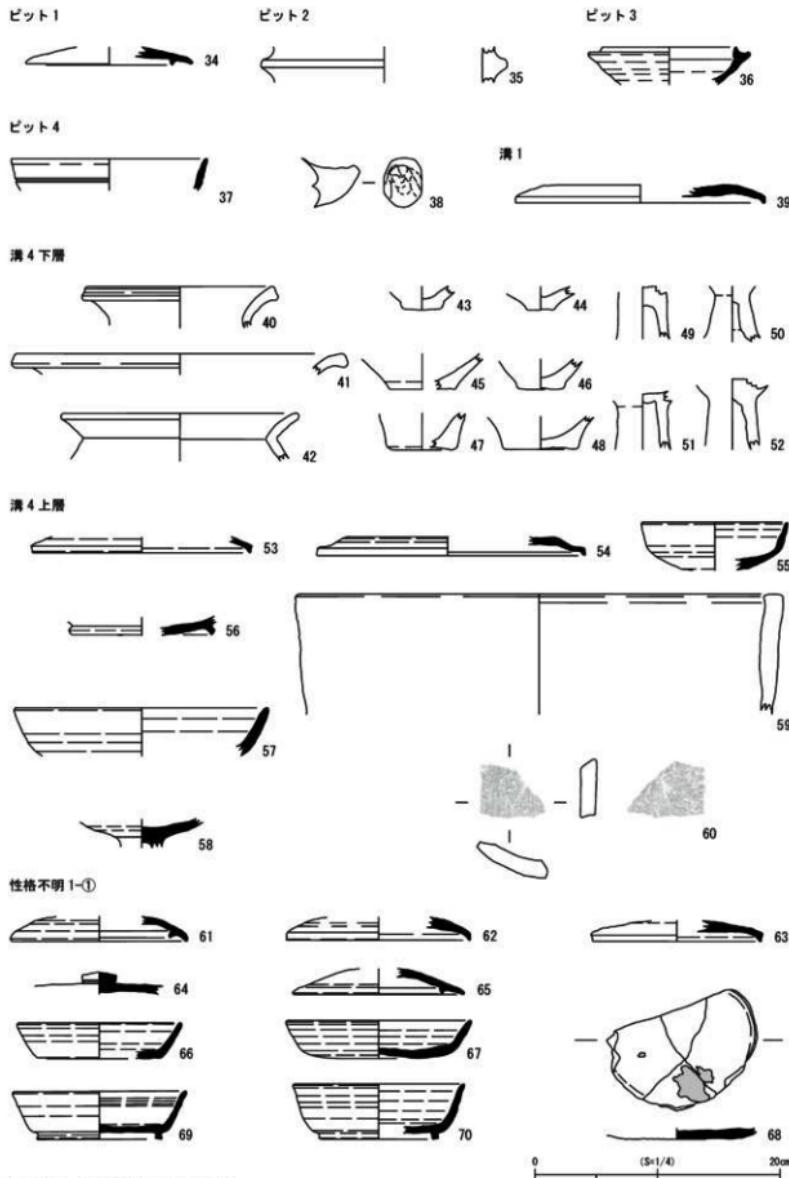
104・105は鉢の口縁部である。中世の製品と考えられる。

106・107は土師器である。106は中実の高杯脚部、107は把手付甕の把手部分である。

108は平瓦の破片である。二次的に被熱していて調整は不明瞭であるが、凹面に布目压痕、凸面に綱目叩きの痕跡が僅かに認められる。

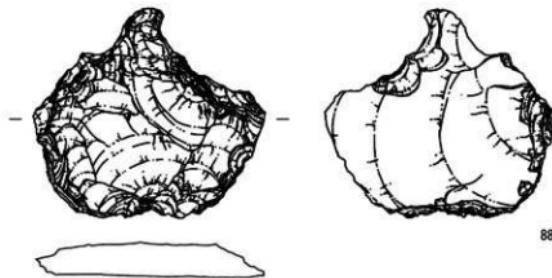
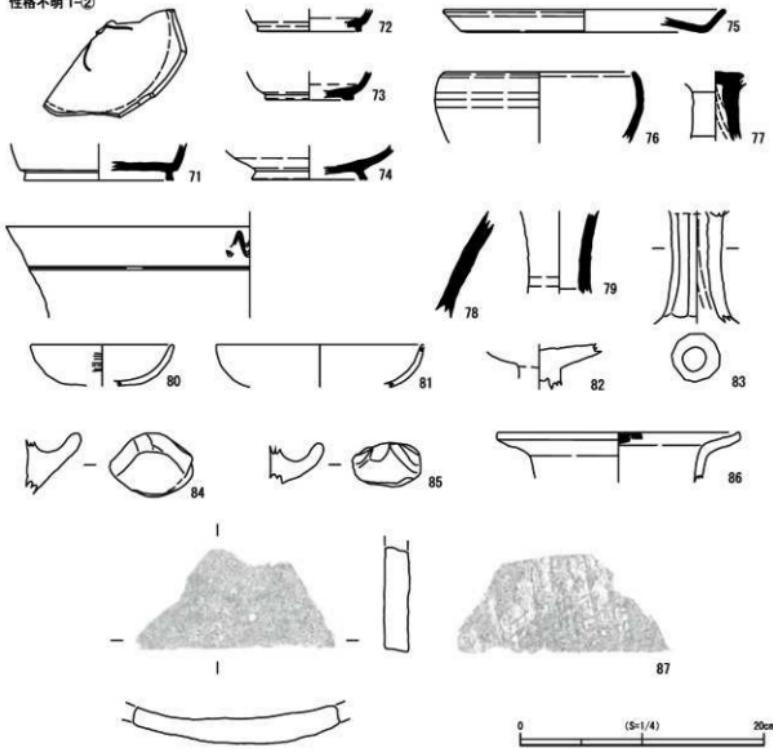


第34図 出土遺物 1 (1~33)



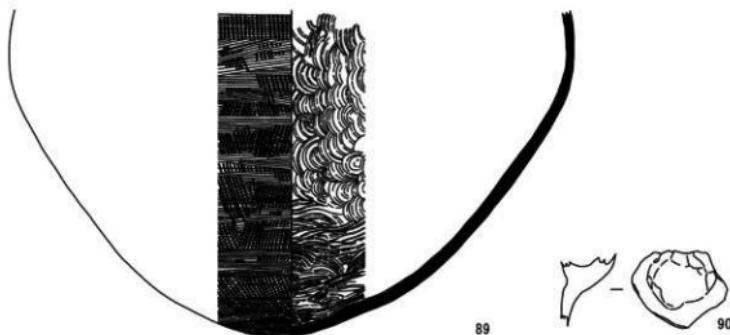
第 35 図 出土遺物 2 (34 ~ 70)

性格不明 1-2

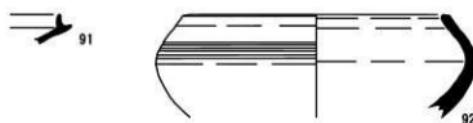


第36図 出土遺物3 (71~88)

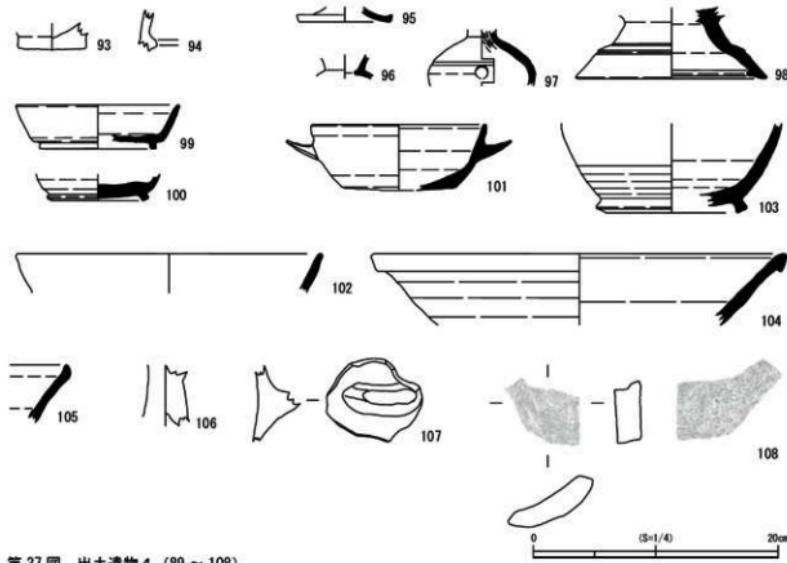
性格不明 2



性格不明 3



包含層・表土



第 37 図 出土遺物 4 (89 ~ 108)

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径等	
1	盤立柱建物 ₁ 竈内	土師器	甕	* 12.2	* 14.0		* 12.5	外側：口縁部ヨコナデ 脚部縦方向ハケ 内側：口縁部付近横方向ハケ、脚部ナデ
2	盤立柱建物 ₁ 竈内	土師器	甕	* 15.0	> 11.3		* 17.2	外側：口縁部縦方向のため調整等不明 脚部縦方向ハケ 内側：脚部のため調整等不明
3	盤立柱建物 ₁ P2	弥生土器	壺・甕		> 2.8	* 6.0		内外面ともに磨滅のため調査等不明
4	盤立柱建物 ₁ 上層	土師器	椀	* 15.2	6.0	* 8.2		外側：回転ナデ 高台貼り付け 内側：回転ナデ
5	盤立柱建物 ₁ P2	須恵器	杯蓋	> 2.1	> 2.0			外側：回転ナデ カエリ貼り付け 内側：回転ナデ
6	盤立柱建物 ₂ P4	須恵器	杯蓋	* 13.2	> 2.2			内外面ともに回転ナデ
7	柱穴例 ₁ P2	須恵器	杯蓋	* 16.0	> 1.7			外側：口縁部付近回転ナデ 天井端付近回転ハタケズリ 内側：回転ナデ
8	柱穴例 ₁ P6	須恵器	杯	* 10.6	* 3.2	* 7.8		外側：底部ヘラ切り後、ナデ 体部回転ナデ 内側：回転ナデ
9	柱穴例 ₁ P4	須恵器	杯		> 1.8	* 12.6		外側：回転ナデ 高台貼り付け 内側：回転ナデ
10	柱穴例 ₁ P5	須恵器	杯		> 2.9	* 8.8		外側：口縁部ヘラ切り後ナデ 体部回転ナデ 高台貼り付け 内側：回転ナデ
11	柱穴例 ₁ P1上層	土師器	高杯		> 6.0			外側：わざかにハケ痕跡 内側：磨滅のため調査等不明
12	柱穴例 ₁ P1上層	土師器	甕・鍋		> 4.5			外側：脚部付近磨滅不明、表みビカキエ 表引手引付 内側：磨滅のため調査等不明
13	柱穴例 ₁ P5	土師器	甕・鍋		> 3.9			外側：脚部縦方向ハケ 肥手ヨコサエ 肥手貼り付け 内側：ヨコサエ
14	柱穴例 ₂ P3	弥生土器	底部		> 2.4	8.5		内外面ともに磨滅のため調査等不明
15	柱穴例 ₃ P5	土師器	甕		> 5.9			外側：口縁部ヨコナデ 脚部縦方向ハケ 内側：口縁部付近横方向ハケ
16	柱穴例 ₃ P9	土師器	飯蛸蓋		> 6.8			足部破片 外側：ナデ
17	土坑 ₁ 一括	須恵器	杯蓋		> 1.6		横み破片 内外面ともにナデ	
18	土坑 ₁ 一括	須恵器	杯	* 16.4	4.4	* 11.6		内外面ともに回転ナデ 高台貼り付け
19	土坑 ₁ 下層	須恵器	壺		> 3.3	* 10.3		外側：底部ヘラ切り後ナデ 脚部回転ナデ 高台貼り付け 内側：回転ナデ 自然袖付着
20	土坑 ₁ 下層	土師器	高杯		> 5.7			内外面ともに磨滅のため調査等不明
21	土坑 ₁ 下層	土師器	鍋	* 38.0	> 5.4			外側：口縁部ヨコナデ 脚部縦方向ハケ 内側：口縁部ヨコナデ 脚部横方向ハケ
22	土坑 ₁ 一括	瓦	平瓦	長さ> 2.4	幅> 4.4	厚さ1.3		ナデ 内側：ナデ 外側：ナデ
23	土坑 ₄ 一括	土師器	高杯		> 4.0			内外面ともに磨滅のため調査等不明
24	土坑 ₅ 一括	土師器	高杯		> 5.3			内外面ともに磨滅のため調査等不明 外側：ヨコサエ
25	土坑 ₇ 一括	須恵器	壺	* 14.8	> 3.0			内外面ともに回転ナデ
26	土坑 ₇ 一括	土師器	高杯	* 18.2	> 2.8			外側：ナデ ヨコサエ 内側：ミガキ後跡文
27	土坑 ₇ 一括	土師器	製塙土器	* 7.8	> 6.0			内外面ともにナデ
28	土坑 ₈ 一括	須恵器	高杯		> 1.4	* 11.1		内外面ともに回転ナデ
29	土坑 ₈ 一括	土師器	甕	* 20.6	> 4.8			内外面ともに磨滅のため調査等不明
30	土坑 ₈ 一括	土師器	甕	* 30.0	> 4.2			外側：口縁部ヨコナデ 脚部縦方向ハケ 内側：口縁部ヨコナデ 脚部横方向ハケ
31	土坑 ₈ 一括	土師器	鉢	* 16.6	> 3.4			内外面ともに磨滅のため調査等不明
32	土坑 ₉ 一括	須恵器	甕		> 2.1			内外面ともに回転ナデ
33	土坑 ₉ 一括	須恵器	龜		> 5.5		* 8.7	外側：底部手持ちハタケズリ 体部回転ナデ 深縫1条 内側：回転ナデ
34	ピット ₁ 一括	須恵器	高杯蓋	* 13.6	> 1.5			外側：回転ハタケズリ 内側：回転ナデ カエリ貼り付け
35	ピット ₂ 一括	埴輪	円筒埴輪		> 2.9		突唇径* 20.1	内外面ともに磨滅のため調査等不明 突唇貼り付け
36	ピット ₃ 一括	須恵器	杯	* 11.0	> 4.1		最大径* 13.2	外側：回転ナデ 内側：回転ナデ 直受貼り付け

表3 遺物観察表1

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径等	
37	ピット4 一括	須恵器	高杯		* 16.0	> 2.7		外面：回転ナデ 沈済1条 内面：回転ナデ
38	ピット4 一括	土師器	甌		> 4.0			外面ナデ 牛角状把手
39	溝4 一括	須恵器	杯蓋	* 20.2	> 1.5			外面：天井部切削ヘラケズリ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ
40	溝4 下層	弥生土器	壺	* 15.4	> 3.4			内外面ともに磨減のため調整等不明 口部に回転丸文
41	溝4 下層	弥生土器	壺	* 27.4	> 1.7			内外面ともに磨減のため調整等不明 口部に回転丸文
42	溝4 下層	弥生土器	甌	* 19.4	> 3.9			内外面ともに磨減のため調整等不明
43	溝4 下層	弥生土器	壺・甌		> 2.0	3.6		内外面ともに磨減のため調整等不明
44	溝4 下層	弥生土器	壺・甌		> 1.9	2.3		外面：ナデ 煙付着 内面：ナデ
45	溝4 下層	弥生土器	壺・甌		> 2.9	* 5.3		外面：底部ハケ 脚部ナデ 黒斑 内面：ナデ
46	溝4 下層	弥生土器	壺・甌		> 2.5	4.0		外面：底部木葉痕 脚部ナデ 内面：ナデ
47	溝4 下層	弥生土器	壺・甌		> 3.0	* 5.8		内外面ともに磨減のため調整等不明
48	溝4 下層	弥生土器	壺・甌		> 2.7	6.2		外面：ナデ 黒斑 内面：ナデ
49	溝4 下層	弥生土器	壺・甌		> 4.3			内外面ともにナデ
50	溝4 下層	弥生土器	高杯		> 4.5			内外面ともに磨減のため調整等不明
51	溝4 下層	弥生土器	高杯		> 4.8			内外面ともに磨減のため調整等不明 円盤光沢
52	溝4 下層	弥生土器	高杯		> 5.8			内外面ともに磨減のため調整等不明
53	溝4 上層	須恵器	杯蓋	* 17.8	> 1.8			内外面ともに回転ナデ
54	溝4 上層	須恵器	杯・口蓋	* 21.4	> 1.5			外面：天井部ヘラ切り後ナデ・ミガキ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ
55	溝4 上層	須恵器	杯	* 12.0	3.9	* 9.5		外面：底部ヘラ切り後ナデ 自然縫・滑痕 内面：回転ナデ
56	溝4 上層	須恵器	杯		> 1.5	* 11.9		外面：底部ヘラ切り後ナデ 体部回転ナデ 高台取り付け 内面：回転ナデ・ナデ
57	溝4 上層	須恵器	皿	* 20.8	> 3.9			内外面ともに回転ナデ
58	溝4 上層	須恵器	高杯		> 2.4			内外面ともに回転ナデ
59	溝4 上層	土師器	甌	* 39.8	> 9.8			内外面ともに磨減のため調整等不明
60	溝4 上層	瓦	平瓦	長さ > 4.7	幅 > 5.7	厚さ 1.3		上面：ナデ 下面：ナデ 側面：ナデ
61	性柄不明1 北側一括	須恵器	杯蓋	* 14.4	> 2.0	天井径 * 10.4		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ カエリ貼り付け
62	性柄不明1 中央一括	須恵器	杯蓋	* 15.0	> 1.9			内外面ともに回転ナデ
63	性柄不明1 下層	須恵器	杯蓋	* 13.8	> 1.7	天井径 本 7.6		外面：回転ナデ・ナデ 内面：回転ナデ 研磨痕・墨付着
64	性柄不明1 中央一括	須恵器	杯蓋		> 1.8			内外面ともに回転ナデ 織み貼り付け
65	性柄不明1 北側一括	須恵器	壺蓋	* 14.0	> 2.1			外面：口縁部附近回転ナデ 体部ヘラケズリ 内面：回転ナデ
66	性柄不明1 点上げ遺物	須恵器	杯	* 13.4	2.9	* 10.2		外面：底部ヘラ切り後ナデ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ
67	性柄不明1 点上げ遺物	須恵器	杯	15.2	3.1	12.4		外面：底部ヘラ切り後ナデ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ
68	性柄不明1 点上げ遺物	須恵器	杯		> 1.9	9.1		外面：底部ヘラ切り後ナデ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ 煙付着
69	性柄不明1 点上げ遺物	須恵器	杯	* 14.2	3.9	10.9		外面：底部ヘラ切り後ナデ 体部回転ナデ 高台取り付け 内面：回転ナデ
70	性柄不明1 点上げ遺物	須恵器	杯	* 14.0	4.5	* 10.8		外面：底部ヘラ切り後ナデ 体部回転ナデ 高台取り付け 内面：回転ナデ
71	性柄不明1 点上げ遺物	須恵器	杯		> 3.0	* 12.2		外面：回転ナデ・ナデ 大陸・高台貼り付け 内面：回転ナデ・ナデ
72	性柄不明1 下層	須恵器	杯		> 1.8	* 8.5		外面：回転ナデ・ナデ 自然袖付着

表4 遺物観察表2

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径等	
73	性格不明1 中央一括	須恵器	杯		> 2.3	* 7.2		外側: 滑面へ切り落ナダ 体部回転ナダ 高台貼り付け 内側: 回転ナダ
74	性格不明1 点上付遺物	須恵器	杯L		> 2.8	* 4.7		外側: 滑面へ切り落ナダ 体部回転ナダ 高台貼り付け 内側: 回転ナダ
75	性格不明1 点上付遺物	須恵器	皿	* 23.2	1.9	* 20.2		外側: 滑面へ切り落ナダ 体部回転ナダ 内側: 回転ナダ
76	性格不明1 下層	須恵器	鉢	* 15.6	> 5.8			内外面ともに回転ナダ
77	性格不明1 下層	須恵器	高杯		> 5.7			内外面ともにナダ 脚部内面にシボリ
78	性格不明1 中央一括	須恵器	甕		> 7.6			外側: ナダ 沈縫 2条 柳綺波状文 内側: ナダ
79	性格不明1 点上付遺物	須恵器	壺		> 6.7		腹径5.0	外側: ナダ 自然軸付着 内側: ナダ
80	性格不明1 南側一括	土師器	椀	* 11.7	3.4	* 6.2		外側: ハヤキ 内側: 瓢箪のため調整等不明
81	性格不明1 南側下層	土師器	椀	* 17.0	> 3.3			内外面ともに縦誠のため調整不明
82	性格不明1 点上付遺物	土師器	高杯		> 3.7			内外面ともに縦誠のため調整不明
83	性格不明1 点上付遺物	土師器	高杯		> 9.2			外側: 開口ケズリによる取扱い 断面多角形 内側: シボリ
84	性格不明1 南側一括	土師器	甕・鍋		> 5.0			外側: 手揉み波状文 把手貼り付け 肝付着 内側: 縦誠のため調整等不明
85	性格不明1 中央一括	土師器	甕・鍋		> 3.3			内外面ともに縦誠のため調整等不明 把手貼り付け
86	性格不明1 点上付遺物	土師器	鍋	* 30.0	> 5.7			外側: 縦誠のため調整等不明 内側: 口部斜付造ハケ 制縦誠のため調整等不明
87	性格不明1 点上付遺物	瓦	平瓦	長さ > 8.2	幅 > 16.5	厚さ 1.9		外側: 瓦タキ 内側: シボリ
88	性格不明1 下層	石器	削器	長さ 8.59	幅 9.5	厚さ 1.58		サヌカイノ剥 金剛山産か 重さ 130.8 g
89	性格不明2 点上付遺物	須恵器	甕		> 26.7			外側: 平瓦タキ剥カキメ 内側: 同心円压痕
90	性格不明2 点上付遺物	土師器	甕・鍋		> 6.0			外側: 手揉み波状文・ナダ 把手貼り付け 内側: ハヤキ・ナダ
91	性格不明3 一括	須恵器	杯		> 2.5			外側: 回転ナダ 内側: 回転ナダ 窒受貼り付け
92	性格不明3 一括	須恵器	鉢	* 21.8	> 8.4			内外面ともに回転ナダ
93	調査区⑤ 遺物包含層	弥生土器	甕		> 2.2	5.6		外側: ナダ 底部に煤付着 内側: ナダ
94	調査区⑤ 遺物包含層	埴輪	円筒埴輪		> 3.4			内外面ともに縦誠のため調整等不明 実芯貼り付け
95	調査区⑥ 遺物包含層	須恵器	高杯		> 1.2			内外面ともに回転ナダ
96	調査区① 遺物包含層	須恵器	平瓶		> 1.9		腹径 * 3.2	内外面ともにナダ 自然軸付着
97	調査区① 遺物包含層	須恵器	甕		> 4.6		* 8.7	外側: 回転ナダ 沈縫 1条 径 1cm の穿孔 内側: 回転ナダ 底部にシボリ
98	調査区⑤ 遺物包含層	須恵器	壺		> 5.8	* 15.6		脚部破損 内外面ともにナダ 外面に沈縫 2条
99	調査区⑤ 遺物包含層	須恵器	杯	* 13.4	3.6	* 9.5		外側: 滑面へ切り落ナダ 体部回転ナダ 高台に別個体との接觸部 高台貼り付け 自然軸付着 内側: 回転ナダ 自然軸付着
100	調査区⑤ 遺物包含層	須恵器	杯		> 2.2	10.3		外側: 滑面へ切り落ナダ 体部回転ナダ 高台貼り付け 内側: 回転ナダ
101	調査区⑤ 遺物包含層	須恵器	双耳椀	* 14.3	5.4	* 9.4		外側: 滑面へ切り落ナダ 体部回転ナダ はすへ成形 窒受貼り付け 内側: 回転ナダ 自然軸付着
102	調査区⑤ 遺物包含層	須恵器	皿	* 25.0	> 3.2			内外面ともに回転ナダ
103	調査区④ 遺物包含層	須恵器	壺		> 7.3	* 12.3		外側: 滑面へ切り落ナダ 体部回転ナダ・ハラカミ・高台貼り付け 内側: 回転ナダ・ナダ
104	調査区④ 遺物包含層	須恵器	鉢	* 34.0	> 5.8			内外面ともに回転ナダ
105	調査区④ 土上	須恵器	鉢		> 4.7			内外面ともに回転ナダ・ナダ
106	調査区④ 遺物包含層	土師器	高杯		> 5.0			内外面ともにナダ
107	調査区④ 遺物包含層	土師器	甕・鍋		> 6.2			内外面ともに縦誠のため調整等不明
108	調査区④ 遺物包含層	瓦	平瓦	長さ > 5.1	幅 > 6.9	厚さ 2.0		外側: 瓦タキ 内側: シボリ

表5 遺物観察表3

第三章　まとめ

今回の発掘調査は、坂元遺跡の範囲内で計画された物販店舗建設工事によって、遺跡が破壊されてしまう範囲 380 m²を調査した。その結果、合計 147 基の遺構を検出し、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。

本章では、今回調査したこれらの遺構・遺物の情報をもとに、当該地における土地利用の変遷について若干の検討を行うことでまとめとしたい。

弥生時代　調査区②で検出した溝 4 の下層から遺物が出土したほか、遺物包含層中や古代の遺構埋土への混入品として少量の弥生土器が出土している。溝 4 出土の弥生土器はすべて後期のものであり、周辺に後期の居住域が存在する可能性がある。溝 4 は、幅約 4 m の大型の溝で、南側の延長線上に位置する調査区③・④からは検出されず、蛇行しながら流れる自然流路であったと考えられる。坂元遺跡の過去の調査では、規模の大きな自然流路が複数条検出されており、この溝もそれらの一部と推定される。今回調査地の東側で行われた C7 地点（第7図・表2、以下過去の調査地点名はすべて同図表に対応）の調査では、今回の溝と同規模の自然流路が検出されており、下層から弥生時代後期の土器が出土している。

古墳時代　調査区⑥で検出したピット 4 から後期前半頃の遺物が出土したほか、遺物包含層中や 7 世紀前半頃と判断した竪穴建物 1 を切っているピット 2 への混入品として円筒埴輪片が出土している。坂元遺跡の過去の調査では、C5・6 地点で古墳時代の竪穴建物が検出され、C3 地点では古墳や埴輪窯が発見されていることから、それらの集団による活動痕跡と考えられるが、当該地における土地利用は活発ではなかったようである。隣接する C7 地点においても、土坑や溝が若干検出されたのみで、今回調査地と類似した傾向がみてとれる。

飛鳥時代（7世紀代）　7世紀前半の遺構として調査区④の竪穴建物 1、調査区⑥のピット 3 がある。また、他の遺構との切合い関係から、調査区①の土坑 2～4 や 7世紀代の遺物を出土した調査区⑥の土坑 9 も同時期の可能性がある。竪穴建物の存在や底部に炭化物が集中する土坑 2～4 など特徴的な遺構もあるが、複数の調査区から遺構が散漫に検出されるにとどまり、居住域の中心とはいえない。隣接する C7 地点の調査では、この時期に該当する小規模な掘立柱建物跡が複数検出されており、工房のような機能を担っていた可能性が指摘されている（久保 2011）。

7世紀末から8世紀初頭にかけて、建物方位が正方位を向く調査区③の掘立柱建物 1 や、調査区①の溝 1・2 が出現する。遺構の軸が正方位を向くことを重視すれば、時期不明とした調査区⑤の柱穴列 2 や調査区⑥の掘立柱建物 2・柱穴列 3 も同時期の可能性があり、古代山陽道や賀古駅家との関連で語られることの多い古代坂元集落の一部に含まれるといえる。当該時期は、過去の分析において「坂元古代 II 期（飛鳥 IV～V 期）」に分類される時期で（中川 2006・2021）、建物の軸方位は、正方位から山陽道を基準とした西へ傾いた方位へと変化することが指摘されているが、今回調査の成果では坂元古代 I 期（飛鳥 II～III 期）の傾向と言わわれている正方位を基準としている。遺構から出土する遺物が少ないため、個別の遺構時期の判断には検討の余地が残るが、いずれにせよ古代山陽道が軸線の基準となる前の遺構群といえる。

奈良時代（8世紀代） 8世紀前半の遺構として、調査区②の溝4上層や、調査区⑥の性格不明遺構3がある。溝4は、弥生時代から継続する自然流路をこの時期に埋めて整地したものと考えられる。性格不明遺構3についても、周辺の不整形な大型の遺構とともに自然の落ち込みや崖地であったと考えられ、やはりこの時期に埋められて整地されたと解釈できる。賀古駅家を管理する役目を担ったとも言われる坂元集落が、集落の充実とともに域内の開発を進めていく様子が反映されているものと考えられ、8世紀代の遺構とした調査区①の性格不明遺構1についても、大規模な自然の落ち込みをこの時期に埋めて整地したと考えることができそうである。そうした行為を受けて、性格不明遺構1以外の8世紀代の遺構と判断した調査区①の土坑1・6、調査区③の柱穴列1・土坑7、調査区⑥の土坑8・ピット6などが成立したものと考えられる。なお、今回の調査ではこの時期に該当する掘立柱建物跡は確認できていないが、柱穴列1の軸方位は、古代山陽道の推定ラインに直行する方位を向いており、これまでの研究において指摘されている傾向と整合する。

8世紀後半になると、明確な遺構は調査区①のピット1のみとなり、当該地における開発は低調となる。隣接するC7地点でも同様の傾向がみられ、集落規模は徐々に縮小していったものと考えられる。今回調査では、後続する平安時代の遺物や中世の遺物も若干出土しているが、遺物包含層中のものが多く、明確に平安時代以降の遺構といえるものは確認できていない。

以上、加古川市を代表する古代の集落遺跡である坂元遺跡の南西部分にあたる今回調査地の発掘成果を概観した。坂元遺跡は、過去に広範囲にわたる発掘調査が行われたことによって、遺跡の大まかな全体像がすでに明らかにされている。今後は、それらの成果を基準として、今回のような小規模な調査を蓄積することによって、律令期における「賀古郡駅家里」の実態についてより具体的な解明を進めていく必要がある。

最後に、発掘調査と整理作業にご協力くださった多くの方々と、今回調査へ参加したすべての皆さんに心よりお礼申し上げます。また、今回の調査では、遺跡の保護のために事業主である秋每株式会社様に大幅な設計変更にご同意していただき、大変な労力とご迷惑をおかけいたしました。末筆ながら感謝の意を申し上げます。

<引用・参考文献>

- 青木哲哉 2009 「坂元遺跡の地形環境」『坂元遺跡II』兵庫県文化財調査報告第366冊 兵庫県教育委員会
 青木哲哉 2011 「坂元遺跡IIIにおける地形環境」『坂元遺跡III』兵庫県文化財調査報告第404冊 兵庫県教育委員会
 石野博信・松下 勝 1969 「住居址8」『播磨・東漢弥生遺跡II』加古川市教育委員会
 置田雅昭 1989 「米作りと金属器」『加古川市史』第1巻 加古川市
 加古川市教育委員会 1992 「溝之口遺跡発掘調査報告書I」『加古川市文化財調査報告10』
 岸本一宏 2011 「F地区の調査」『坂元遺跡III』兵庫県文化財調査報告第404冊 兵庫県教育委員会
 久保弘幸 2011 「遺構・遺物の時期と概要」『坂元遺跡III』兵庫県文化財調査報告第404冊 兵庫県教育委員会
 田中眞吾 1989 「加古川市付近の地形と地質」『加古川市史』第1巻 加古川市
 友久伸子 2018 「美乃利遺跡の調査成果 弥生時代の土器」『溝之口遺跡発掘調査報告書IV・美乃利遺跡発掘調査報告書I』
 加古川市文化財調査報告29 加古川市教育委員会
 中川 渉 2006 「飛鳥時代～奈良時代」『坂元遺跡I』兵庫県文化財調査報告第308冊 兵庫県教育委員会
 中川 渉 2021 「坂元遺跡における古代の掘立柱建物群の検討」『兵庫県考古博物館 研究紀要』 第14号 兵庫県立考古博物館
 中川 渉 編 2010 『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書I』兵庫県文化財調査報告第384冊 兵庫県教育委員会
 西口圭介 2009 「条理型地割の復元と集落の考察」『坂元遺跡II』兵庫県文化財調査報告第366冊 兵庫県教育委員会
 西谷真治 1989 「豪族の誕生」『加古川市史』第1巻 加古川市
 兵庫県教育委員会 2006 『坂元遺跡I』兵庫県文化財調査報告第308冊

- 兵庫県教育委員会 2009 『坂元遺跡II』兵庫県文化財調査報告第366冊
兵庫県教育委員会 2011 『坂元遺跡III』兵庫県文化財調査報告第404冊
兵庫県教育委員会 2012 『坂元遺跡IV 溝之口遺跡II』兵庫県文化財調査報告第427冊
渡辺 昇 2009 「おわりに」『坂元遺跡II』兵庫県文化財調査報告第366冊 兵庫県教育委員会

図 版



写真 14 窪穴建物 1 棘出（北東から）

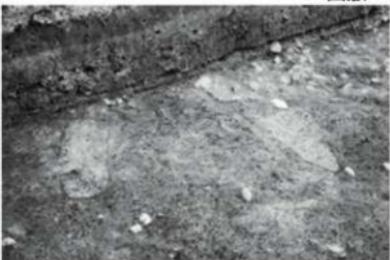


写真 15 窪穴建物 1 棘出（南から）



写真 16 窪穴建物 1 床面（北東から）



写真 17 窪穴建物 1 棘（南東から）



写真 18 窪穴建物 1（北東から）



写真 19 窪穴建物 1 土層断面（北から）



写真 20 窪穴建物 1 棘東西断面（南東から）



写真 21 窪穴建物 1 棘南北断面（南西から）

図版2



写真22 挖立柱建物1 P1（北西から）



写真23 挖立柱建物1 P1 断面（北から）



写真24 挖立柱建物1 P5（北東から）



写真25 挖立柱建物1 P5 断面（北東から）



写真26 挖立柱建物2 P1（西から）



写真27 挖立柱建物2 P1 断面（南西から）



写真28 挖立柱建物2 P4（南西から）



写真29 挖立柱建物2 P4 断面（西から）



写真 30 柱穴列 1 (北東から)

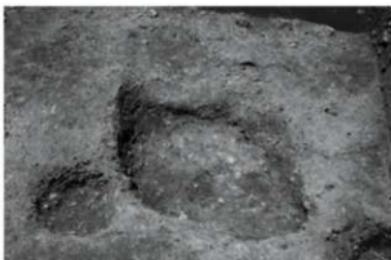


写真 31 柱穴列 1 P1 (南から)



写真 32 柱穴列 1 P1 断面 (南から)



写真 33 柱穴列 1 P2 (北西から)

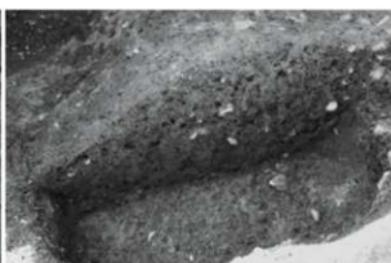


写真 34 柱穴列 1 P2 断面 (北から)

図版 4



写真 35 柱穴列 1 P3 (北西から)



写真 36 柱穴列 1 P3 断面 (北西から)

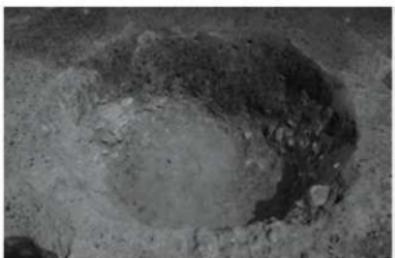


写真 37 柱穴列 1 P4 (北西から)



写真 38 柱穴列 1 P4 断面 (北西から)



写真 39 柱穴列 1 P5 (北から)



写真 40 柱穴列 1 P5 断面 (北から)



写真 41 柱穴列 1 P6 (西から)



写真 42 柱穴列 1 P6 断面 (西南から)



写真 43 柱穴列 2 (北西から)

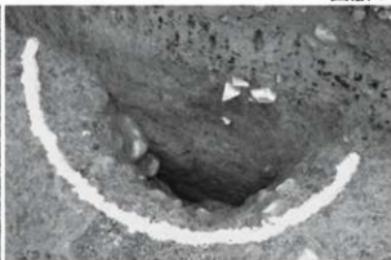


写真 44 柱穴列 2 P1 断面 (西から)



写真 45 柱穴列 2 P2 (北西から)



写真 46 柱穴列 2 P2 断面 (北西から)

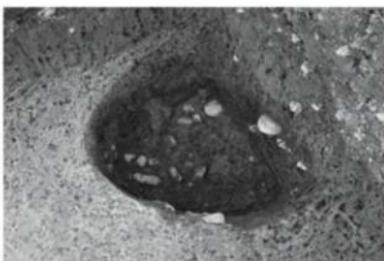


写真 47 柱穴列 2 P3 (北西から)



写真 48 柱穴列 2 P3 断面 (北から)

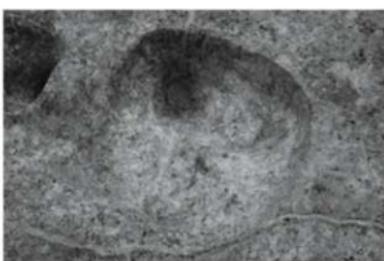


写真 49 柱穴列 3 P3 (南から)

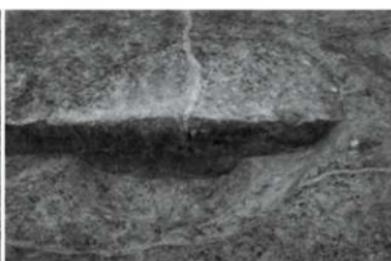


写真 50 柱穴列 3 P3 断面 (南から)

図版6



写真51 柱穴列3 P5（南から）



写真52 柱穴列3 P5 断面（南西から）



写真53 土坑1（南西から）



写真54 土坑1遺物出土状況（東から）



写真55 土坑1断面（南東から）



写真56 土坑2（北東から）



写真57 土坑2炭化物検出（北東から）



写真58 土坑2断面（北東から）



写真 59 土坑 3 (北から)



写真 60 土坑 3 炭化物検出 (北から)



写真 61 土坑 3 断面 (北から)



写真 62 土坑 4 (北西から)



写真 63 土坑 4 炭化物検出 (北西から)



写真 64 土坑 4 断面 (西から)



写真 65 土坑 5 (東から)

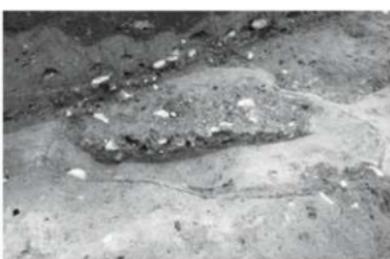


写真 66 土坑 5 断面 (東から)

図版 8



写真 67 土坑 6（東から）

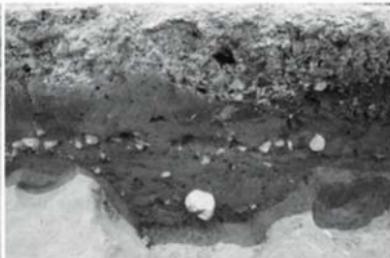


写真 68 土坑 6断面（北東から）



写真 69 土坑 7（南から）



写真 70 土坑 7断面（南西から）



写真 71 土坑 8（西から）



写真 72 土坑 8断面（南から）

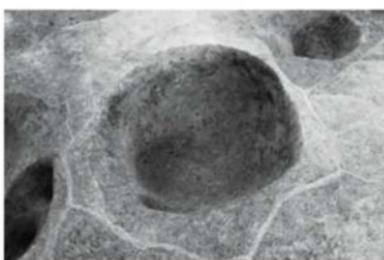


写真 73 土坑 9（西から）



写真 74 土坑 9断面（南西から）



写真 75 ピット 1 (北から)



写真 76 ピット 1断面 (北から)

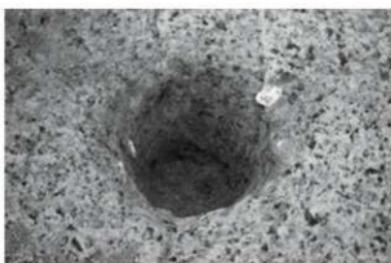


写真 77 ピット 2 (北西から)



写真 78 ピット 2断面 (北西から)



写真 79 ピット 3 (南から)



写真 80 ピット 3断面 (南から)

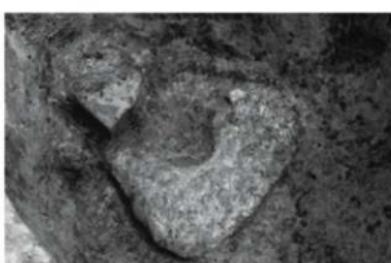


写真 81 ピット 3根固め粘土検出 (南から)

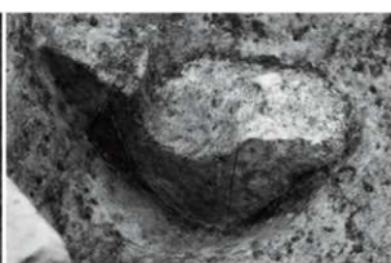


写真 82 ピット 3根固め粘土断面 (南から)

図版 10

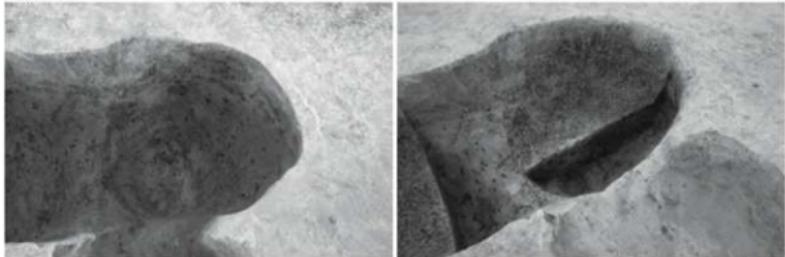


写真 83 ピット 4 (北西から)

写真 84 ピット 4 断面 (北から)

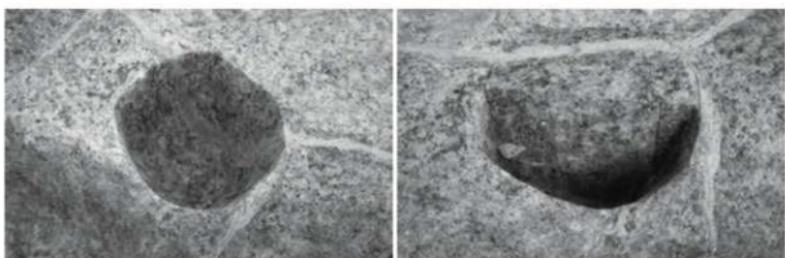


写真 85 ピット 5 (北西から)

写真 86 ピット 5 断面 (北西から)



写真 87 ピット 6 (北東から)

写真 88 ピット 6 断面 (北東から)



写真 89 溝 1・2 (南から)

写真 90 溝 1・2 南側断面 (北西から)



写真 91 溝3（北から）



写真 92 溝3北側断面（北から）



写真 93 溝4（南東から）



写真 94 溝4断面（南西から）



写真 95 性質不明造構1（南から）

図版 12



写真 96 性格不明遺構 1 検出（北西から）



写真 97 性格不明遺構 1 断面（北西から）



写真 98 性格不明遺構 1 漆パレット



写真 99 性格不明遺構 1 漆パレット内面



写真 100 性格不明遺構 2（南から）



写真 101 性格不明遺構 2 遺物出土状況（南から）

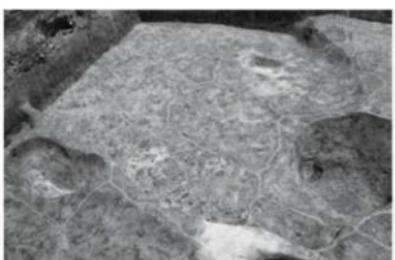


写真 102 性格不明遺構 3（西から）



写真 103 性格不明遺構 3 断面（西から）



写真 104 調査区⑤基本層序（東から）



写真 105 調査区⑤下層確認（南から）



写真 106 調査区⑥基本層序（南から）



写真 107 調査区⑥下層確認（南から）



写真 108 調査区①基本層序（北西から）



写真 109 作業風景①



写真 110 作業風景②



写真 111 作業風景③

図版 14

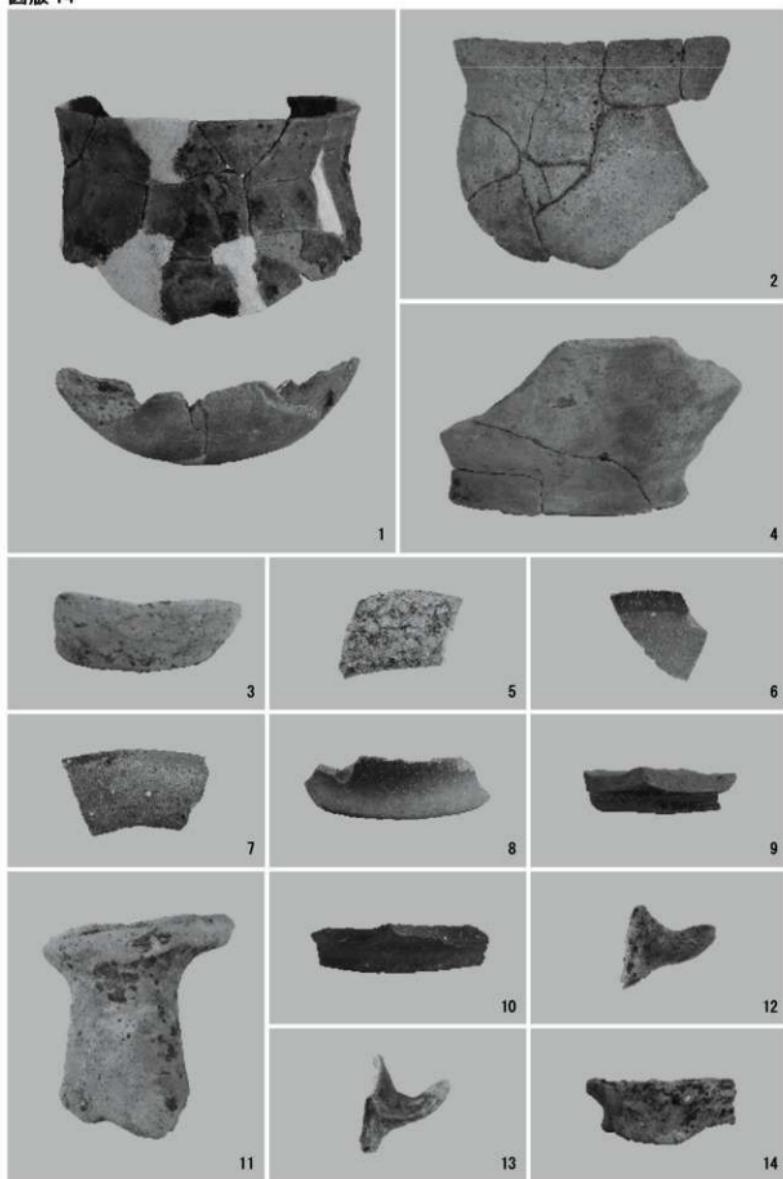


写真 112 出土遺物 1 ~ 14

図版 15

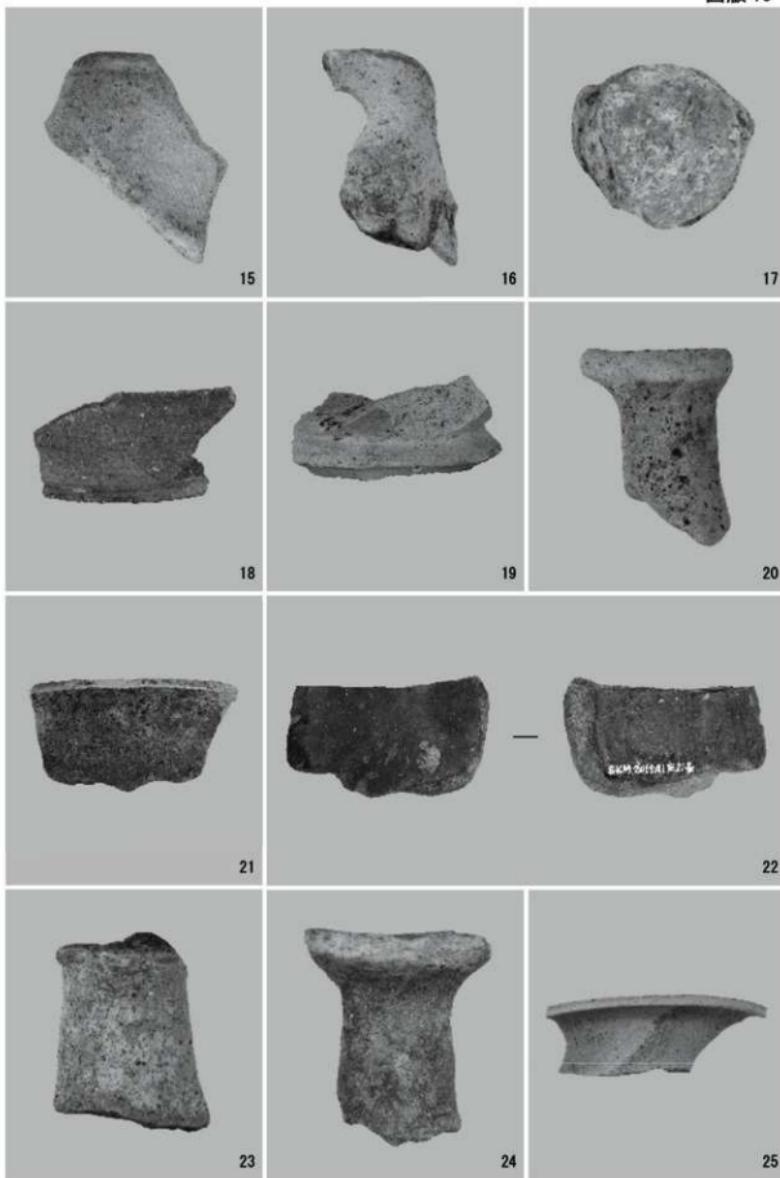


写真 113 出土遺物 15 ~ 25

图版 16

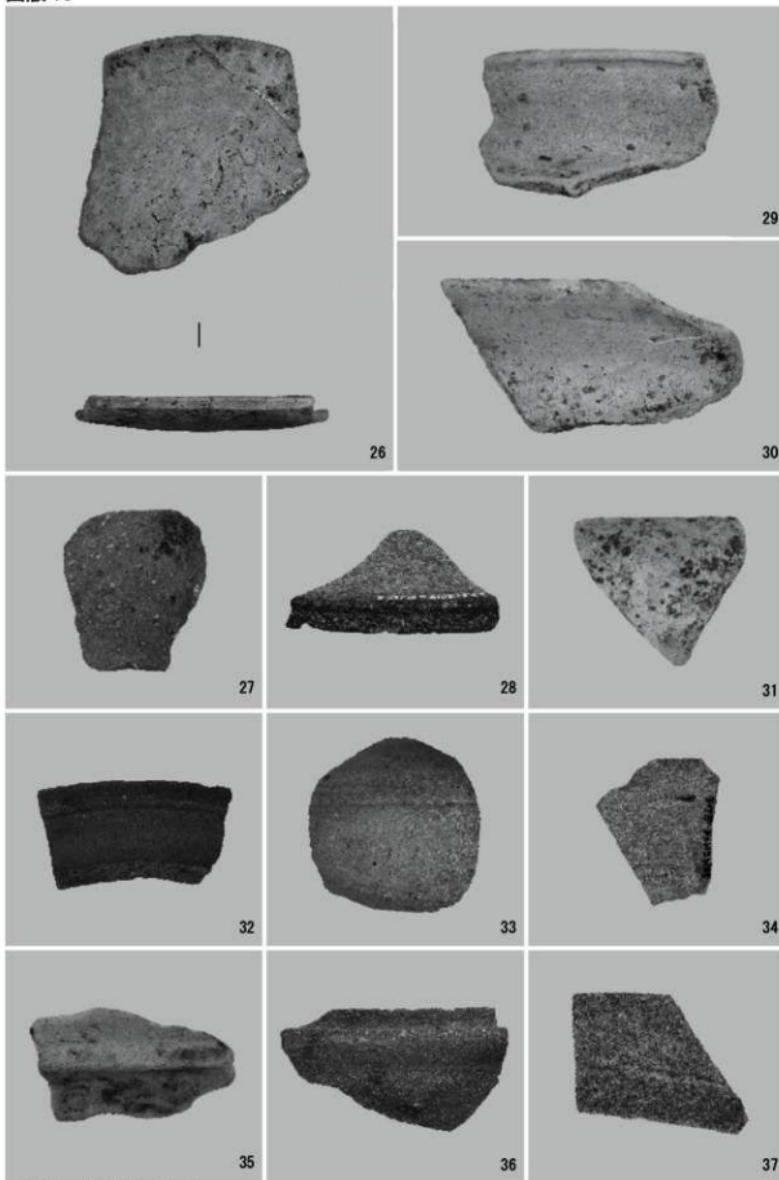


写真 114 出土遺物 26 ~ 37

図版 17

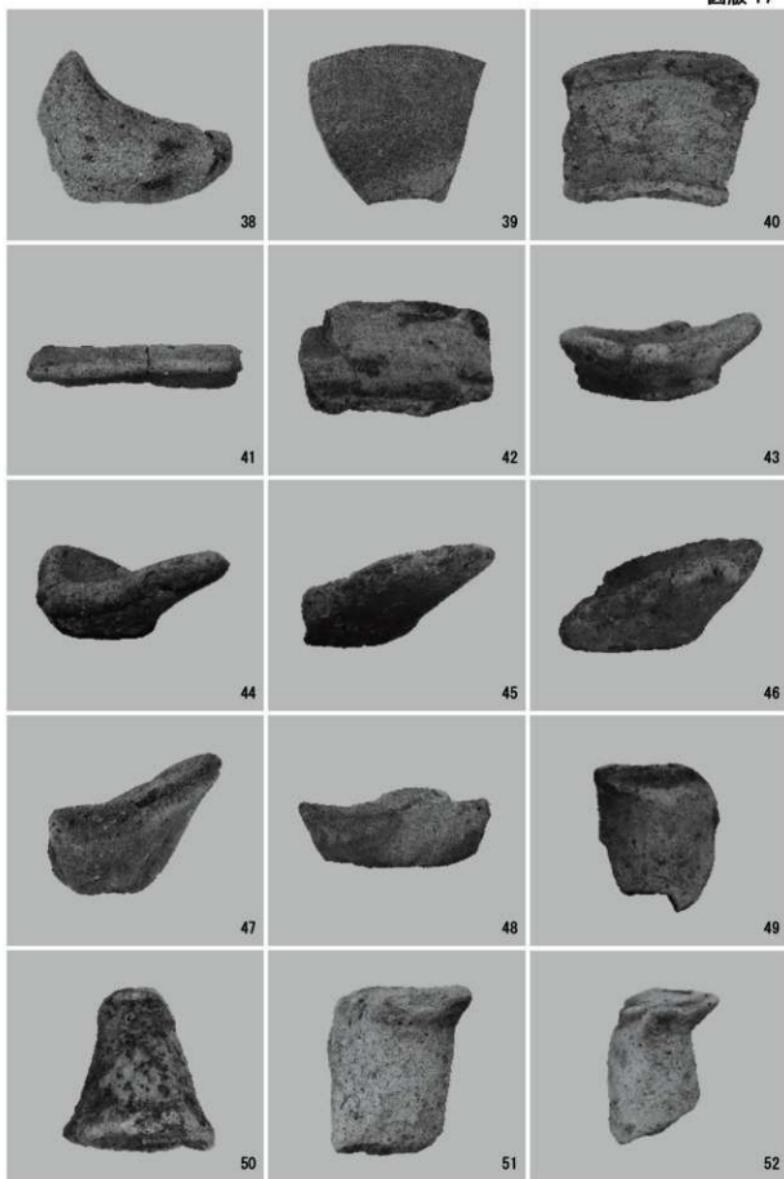


写真 115 出土遺物 38 ~ 52

図版 18

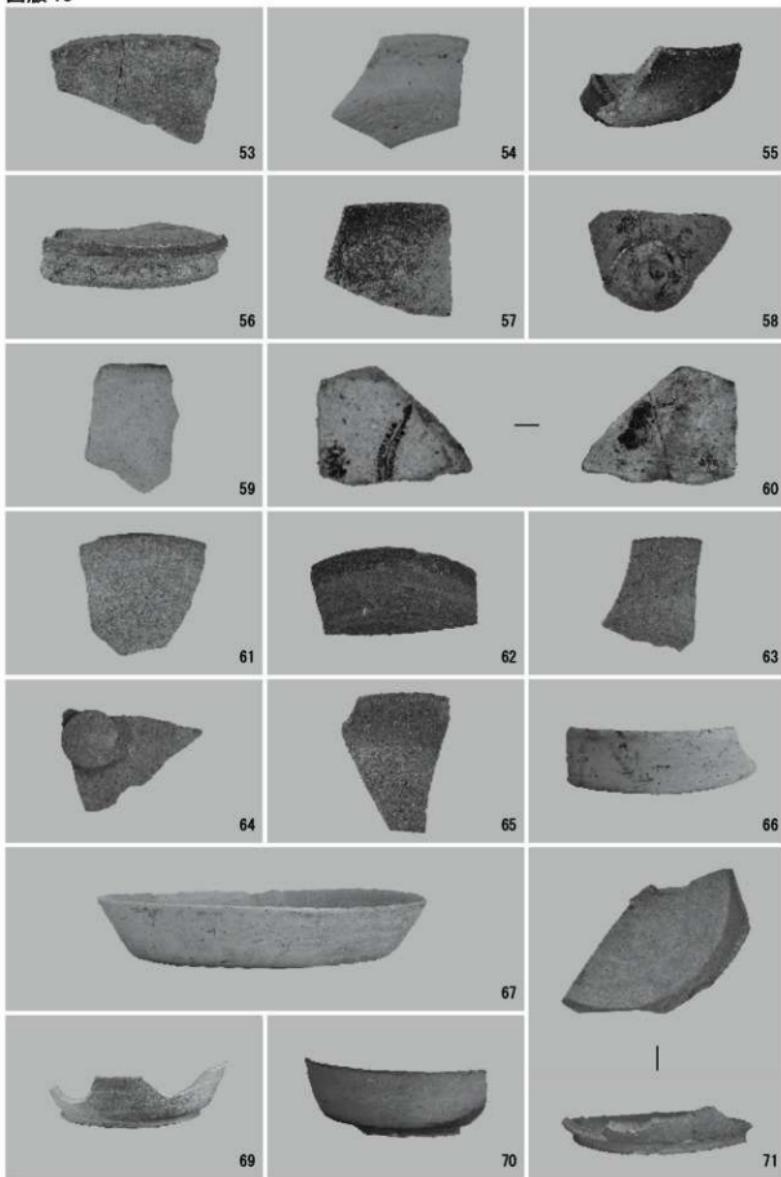


写真 116 出土遺物 53 ~ 67・69 ~ 71

図版 19

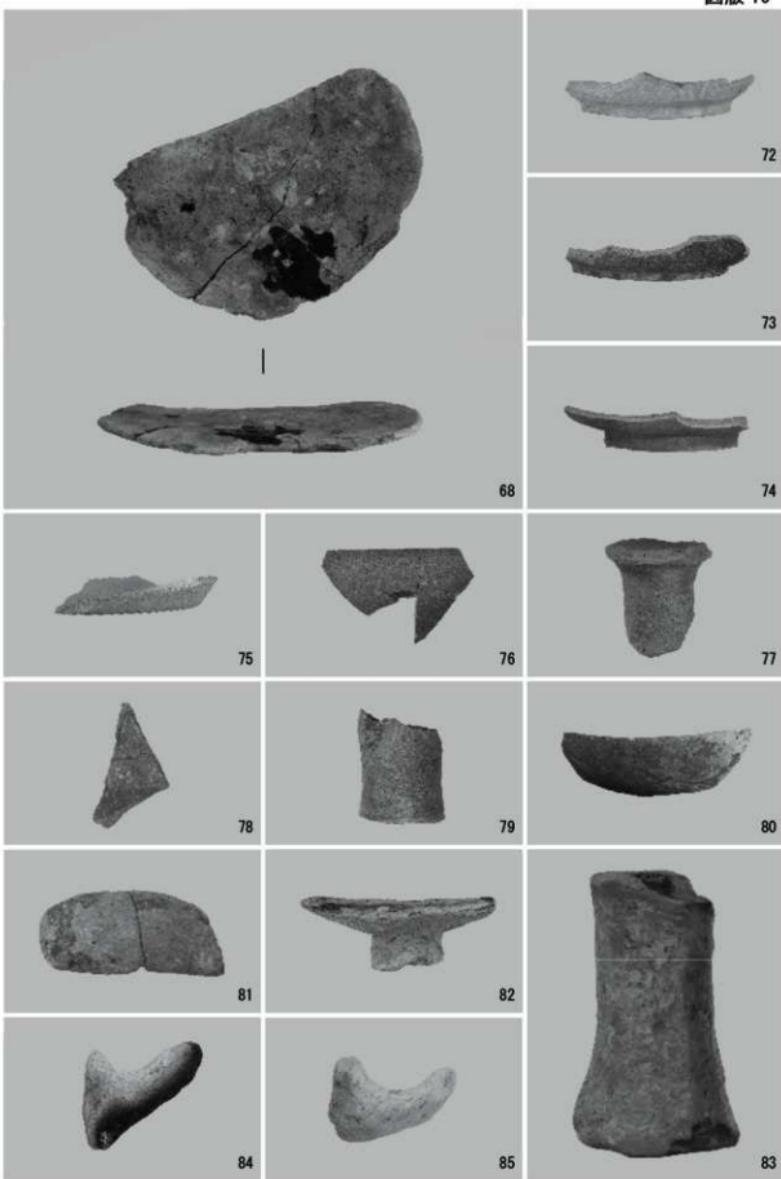
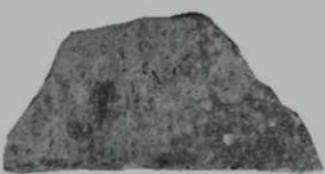
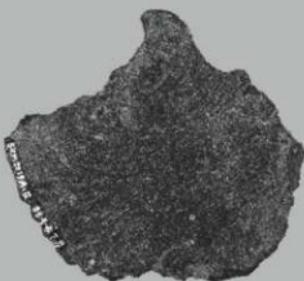
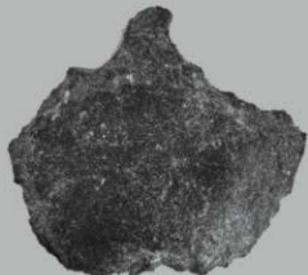


写真 117 出土遺物 68・72～85

図版 20



87



88



89

写真 118 出土遺物 87 ~ 89

図版 21



写真 119　出土遺物 86・90～108

報告書抄録

加古川市文化財調査報告 36

坂元遺跡発掘調査報告書

令和4（2022）年6月30日

編集・発行 加古川市教育委員会

〒 675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7
TEL 079-423-4088

印 刷 株式会社邦栄堂

〒 675-2213 兵庫県加西市西笠原町 766
TEL 079-048-2135

